南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第９集

山梨県南アルプス市

TERABEMURATSUKI DAI12 SITE

寺部村附第12遺跡

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５．３

南アルプス市教育委員会

山梨県新環状・西関東道路建設事務所

TERABE MURATSUKI DAI12 SITE EXCAVATION REPORT

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第９集

山梨県南アルプス市

TERABEMURATSUKI DAI12 SITE

寺部村附第12遺跡

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５．３

南アルプス市教育委員会

山梨県新環状・西関東道路建設事務所

TERABE MURATSUKI DAI12 SITE EXCAVATION REPORT

例　言

1．本書は山梨県南アルプス市寺部地内に所在する「寺部村附第12遺跡」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は道路（新山梨環状道路）建設に伴うものである。

3．調査は平成12年10月25日から平成13年3月23日にかけて、隣接する寺部村附第11遺跡と平行して行なった。年末年始の休業をはさみ、実質調査日数は69.0日であった。

4．調査範囲は、試掘調査の成果に基づき、実質掘削面積は、2907.8㎡であった。

5．発掘調査は若草町教育委員会が主体となって、田中大輔（若草町教育委員会社会教育課社会教育係）が担当した。

6．　発掘掘調査に従事したのは以下の方々である。

飯室めぐみ・石川久子・今村貞雄
小野健幸・小野充子・河西實・加藤秀代
佐久間篤子・佐久間春江・佐久間等
真道みゆき・鈴木政一・原田佳子
福島祥子・山本愛・山本妙子・山本三重子
（敬称略・50音順）

7．整理作業及び報告書執筆・刊行については、平成15年4月1日に若草町が周辺5町村と合併し「南アルプス市」となったため、若草町からこれを引き継ぎ、引き続き田中（平成15年より南アルプス市教育委員会生涯学習課文化財担当）が担当した。

8．整理作業は平成13年度から断続的に実施し、飯室めぐみ・石川二三枝・山路宏美・山本愛が参加した。

9．本書に掲載した地図は、国土地理院発行1/50000「甲府」・「鰍沢」、南アルプス市発行1/10000「南アルプス市地形図2」、南アルプス市発行1/25000「南アルプス市管内図」、若草町役場発行1/10000「若草町全図」、大日本帝国陸地測量部発行1/20000「甲府」・「小笠原」である。掲載に際し、縮尺は適宜変更した場合がある。

10．発掘調査・整理作業に際しては、以下の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

石神孝子・小林健二・宮澤公雄
山梨県教育委員会学術文化財課
（敬称略・50音順）

11．本書に関わる出土遺物ならびに写真・記録図面類は南アルプス市教育委員会において保管している。

遺構凡例

1．遺構図の縮尺は、全体測量図 1/350、個別の遺構図 1/25・1/50・1/100 で示した。各々の挿図中に示したスケールで確認されたい。また、便宜上同一遺構の平面図に対して断面図の縮尺を２倍としたものがある。

2．遺構断面図中の「272.3」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。

3．挿図中の北方位は国家座標に基づく座標北である。磁北は６°10′西偏する。

4．挿図中に示した座標値は国家座標第Ⅷ系に基づく。なお、本調査は平成 14 年４月の測量法改正以前に実施されており、特に断りのない場合、座標値は日本測地系に基づく数値である。

5．遺構断面図において、基本土層は、スクリーントーンで示したが、煩雑になる場合は省略した。遺構挿図において網掛けで示したのは焼土ないし被熱範囲であり、点線で示したのは床面において検出された顕著な硬化面の範囲である。また確認面において検出された砂礫層の範囲は、砂目のスクリーントーンで示した。

6．本書においては、便宜上遺構に以下に示すような略称を用いた。

ＳＩ（竪穴住居址）プランが方形又は方形に類する形状をとるもの。

Ｐ　（ピット）掘建柱建物址の柱穴等、遺構に伴う坑。

ＳＢ（建物址）ピットが掘建柱建物址をなすように並ぶもの。

ＳＥ（井戸址）

ＳＤ（溝）プランが溝状を呈するもの。

ＳＸ（不明遺構）土坑のうち、相対的に規模が大きく、その性格付けに特に苦慮するもの。

ＳＫ（土坑）土に穿たれた穴で上記以外のもの。

ＰＣ（土器集中部）遺構プランは確認できないが、遺物が一定範囲に集中して検出されるもの。

7．遺構の名称は、種別ごとに確認順に付したものを基本とするため、その所産時期、位置等とは無関係である。また、便宜上整理作業時にその一部について遺構番号の並べ替え等を行ったものがある。その際の遺構名の新旧対照については、第１章第２節「調査の方法と経過」を参照されたい。なお、上記のごとく遺構番号の変更を行った場合も、原稿執筆・組版の直前まで旧番号で作業を行なっている。

遺物凡例

1．遺物の縮尺はすべて１／３で示した。

2．図示した遺物のうち、遺構平／断面図中に遺物番号をもって出土位置を示したものがある。遺物挿図中に図示してあるのに遺構平／断面図中に図示されていないものは遺構一括で取り上げた遺物である。

3．土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半１／４を切り取った状態で作図し、左側１／２に外面、右側１／２に断面及び内面を記録した。また、残存状況によっては遺物の中心を算出し、180°回転して作図したが、この場合は中心線を一点鎖線で示した。また、断面等を任意の回転で付した場合は点線で示した。

4．須恵器、灰釉陶器は断面にスクリーントーンを施して、施釉範囲は別のスクリーントーンで示した。また、土師器に施されたスクリーントーンは赤彩範囲ないし黒色処理範囲を示す。

5．遺物観察表において括弧で示した計測値は、推定値もしくは残存最大高である。

6．遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修　（財）日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帳』に準拠して付与した。

7．挿図中の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致する。

目　次

例言・凡例
目次

第１章　調査に至る経緯と経過 ―― 1

第２章　遺跡の立地と環境 ―― 2

第３章　検出された遺構と遺物 ―― 9

第４章　総　括 ―― 41

参考引用文献
図版
報告書抄録・奥付

挿図目次

第１図　調査区の位置　— 3
第２図　遺跡の立地　— 4
第３図　遺跡の環境と周辺の調査　— 6
第４図　周辺の土地利用状況（明治21年）　— 7
第５図　基本層序　— 8
第６図　調査区全体測量図　— 15
第７図　ＳＩ０１測量図　— 16
第８図　ＳＩ０２測量図　— 16
第９図　ＳＩ０３測量図　— 17
第10図　ＳＩ０４測量図　— 18
第11図　ＳＩ０５測量図　— 19
第12図　ＳＩ０６測量図　— 20
第13図　ＳＩ０７測量図　— 21
第14図　ＳＩ０８測量図　— 22
第15図　ＳＩ０９測量図　— 22
第16図　ＳＢ０１測量図　— 23
第17図　ＳＢ０２測量図　— 24
第18図　ＳＥ０１測量図　— 24
第19図　ＳＤ０１測量図　— 24
第20図　ＳＤ０２測量図　— 25
第21図　ＳＤ０３測量図　— 25
第22図　ＳＤ０４測量図　— 25
第23図　ＳＫ０１測量図　— 26
第24図　ＳＫ０２測量図　— 26
第25図　ＳＫ０３測量図　— 26
第26図　ＳＫ０４・０５測量図　— 26
第27図　ＳＫ０６～ＳＫ１２測量図　— 27
第28図　ＳＸ０１測量図　— 28
第29図　ＳＩ１０・ＳＸ０２測量図　— 29
第30図　ＰＣ０１測量図　— 30
第31図　ＳＩ０１出土遺物　— 31
第32図　ＳＩ０２出土遺物　— 31
第33図　ＳＩ０３出土遺物　— 31
第34図　ＳＩ０４出土遺物　— 31
第35図　ＳＩ０５出土遺物　— 32
第36図　ＳＩ０６出土遺物　— 32
第37図　ＳＩ０８出土遺物　— 33
第38図　ＳＩ０９出土遺物　— 33
第39図　ＳＩ１０出土遺物　— 33
第40図　ＳＥ０１出土遺物　— 33
第41図　ＳＤ０２出土遺物　— 34
第42図　ＳＤ０３出土遺物　— 34
第43図　ＳＤ０４出土遺物　— 34
第44図　ＳＫ０１出土遺物　— 34
第45図　ＳＫ０２出土遺物　— 34
第46図　ＳＫ０３出土遺物　— 34
第47図　ＳＫ０４出土遺物　— 34
第48図　ＳＫ０８出土遺物　— 34
第49図　ＳＸ０１出土遺物　— 35
第50図　ＳＸ０２出土遺物（１）　— 35
第51図　ＳＸ０２出土遺物（２）　— 36
第52図　ＰＣ０１出土遺物　— 36
第53図　遺構外その他出土遺物　— 37

写真目次

写真１　調査区全景　— 8

表目次

第１表　遺構名新旧対照表　— 2
第２表　ＳＢ０１ピット計測表　— 11
第３表　ＳＢ０２ピット計測表　— 11
第４表　遺物観察表（１）　— 37
第５表　遺物観察表（２）　— 38
第６表　遺物観察表（３）　— 39
第７表　遺物観察表（４）　— 40

図版目次

図版１　調査区全景（西より）　SI01(南より)　SI02(北東より)　SI03(南より)　SI04(西より)
図版２　SI05(西より)　SI05竈(南西より)　SI06(南西より)　SI07(南西より)　SI08(南西より)
　　SI09(西より)　SI09竈(南西より)
図版３　SI10(西より)　SB01(東より)　SB01(上方が北)　SB02(東より)　SE01(南より)
　　SD02(南より)　SD04(東より)　SK01遺物出土状況(南より)
図版４　SK01(南より)　SK02(南より)　SK03(南より)　SK04~05(南より)　SK08(南東より)
　　SX01(南より)　SX02遺物出土状況(東より)
図版５　SI01~04・SK01~02・SB02・SE01(上方が北)　SI05~09・SK07~12(上方が北)
図版６　出土遺物　SI02-3 SI03-3 SI03-4 SI03-5 SI03-6 SI03-8 SI05-1 SI05-2
図版７　出土遺物　SI05-3 SI05-4 SI05-8 SI05-12 SI08-1 SI08-3 SI08-5
図版８　出土遺物　SI08-7 SI08-8 SI08-9 遺構外-4 SK01-1 SK01-2 SK08-1 SK08-4ほか
図版９　出土遺物　SK04-1 SK04-2 SK04-3 SX01-1 SX01-3 SX02-1 SX02-11 SX02-18 PC01-1
図版10　出土遺物　PC01-2 PC01-6 PC01-7 PC01-8 PC01-9

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成10年12月、若草町教育委員会（以下町教委）は、山梨県新環状・西関東道路建設事務所（以下新環状事務所）より、予てより建設計画のあった新山梨環状道路（若草工区）について、同計画地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。

これに対し町教委は、計画地内には多くの埋蔵文化財包蔵地が存在することから、まず計画地内全域にわたって試掘調査を行い、埋蔵文化財の有無について明確に把握する必要がある旨回答した。

県教育委員会学術文化財課を含めた協議の結果、建設事業の進捗上早期に着工が求められる部分から随時詳細な試掘調査を行なうことで町教委、新環状事務所双方が合意した。そこで町教委は、まず平成11年２月から３月にかけて、建設計画地の東端部からの延長約800ｍについて試掘調査（第１次）を行なった。この結果、町教委は若草町鏡中条字御崎・蔵入地内において平安時代並びに中近世の所産と思われる遺構・遺物を検出した。この地点（御崎蔵入遺跡）の本調査は、工事計画との兼合いから、残る部分の試掘調査に先立ち、平成11年８月～11月に行なった。

残る試掘調査（第２次）については、御崎蔵入遺跡の発掘調査終了後、平成11年12月から３月にかけて行なった。

その結果、予てからの包蔵地寺部村附第６・９・11・12遺跡及び中西第３遺跡において遺構が検出され、本発掘調査を要することが判明した。

この内、平成12年度については、用地買収の進捗、工事計画との調整から寺部村附第６・11・12遺跡（第６遺跡については平成13年度まで継続）について、本調査を実施することで、町教委、新環状事務所は合意し、調査に関わる覚書を締結した後今回の発掘調査に至った。

調査の実施に際しては、広範な対象範囲の速やかな完遂が求められたため、寺部村附第11・12遺跡については町教委が２遺跡平行して調査を実施し、寺部村附第６遺跡ついては、町教委から（財）山梨文化財研究所に調査を委託して実施した。

第２節　調査の方法と経過

調査に際しては、ＧＰＳを用いた基準点設置後、まず国家座標第Ⅷ系を基準とする５ｍメッシュからなるグリッドを設定し、測量の基準とした。

５ｍメッシュの各線（ライン）の名称は、南北に走る線を東から西にＡ・Ｂ・Ｃ・・・とアルファベットで、また東西に走る線を北から南に１・２・３・・・と算用数字で表し、それぞれＡ―ライン、Ｂ－ライン、１－ライン、２－ラインなどと呼称した。またそれぞれのラインの交点を（西へ並ぶアルファベット）－（南へ並ぶ算用数字）のように表して、Ａ―１ポイント、Ｂ－２ポイントなどと呼称した。各区（スクエア）の名称はその区画の北東隅のポイントの名称をもって充て、Ａ―１区のように呼称した。因みにグリッドの原点となるＡ－１ポイントの座標値は、x=-43140.000 y=-800.000である。

掘削に際し、表土については重機を用いて除去し、表土除去後人力にて遺構を精査した。

遺構の掘削に際しては、上面の精査による遺構確認後、原則として２本の直行するセクションラインを設定して四分割し、市松模様状に土層観察用のセクションベルトを残して覆土を除去した。覆土の除去に際しては、極力新しく堆積した層から１層ごとに除去し、覆土内での遺物の層位関係が把握できるよう努めた。また、遺構プランや、遺構の切り合い状況の確認が困難な場合は、適宜トレンチ／サブトレンチを設けるなどして遺構の把握に努めた。セクションベルトは土層断面図を1/20で作成した後除去した。なお、その規模によっては、遺構を四分割せず二分割に半裁して調査を実施したものがある。

掘立柱建物址のピット等においては、半裁して覆土を除去し、土層を観察した後、土層断面図を作成せず遺構のエレベーション図の作成、さらには底面標高の測量のみを持ってこれに代えた遺構もある。また、溝状の遺構については、適宜主軸に直交するようにセクションベルトを設け、表土を除去した。

遺構平面、エレベーション図、並びに遺物出土地点の測量は、基本的にコンピュータシステム（株）の遺跡調査システム「SITE Ⅳ」に拠ったが、一部

ラジコンヘリコプターを用いた空中写真測量を用いて補完している。

調査は、前記のとおり隣接する寺部村附第11遺跡の発掘調査と平行して行い、平成12年10月25日から開始し平成13年3月23日に完了した。年末年始の休業をはさみ、実質調査日数は69.0日であった。また、実質掘削面積は、2907.8㎡であった。

整理作業は、平成13年度から断続的に行い本報告書の刊行に至った。なお、整理作業中便宜上遺構の名称を第1表のとおり変更した。ただし、整理作業において遺構番号の変更を行った場合も、遺物の注記や実測、その他図面整理を含め、原稿執筆・組版の直前まで旧番号で作業を行った。

調査時名称	→	報告時名称
SI01	→	SI01
SI02	→	SI02
SI03	→	SI03
SI04	→	SI04
SI05	→	SI05
SI06	→	SI06
SI08	→	SI07
SI09	→	SI09
SI10	→	SI08
SI07	→	PC01
SE01	→	SE01
SB01	→	SB02
SB02	→	SB01
SD01	→	SD03
SD02	→	SD02
SD03	→	SD04
SD04	→	SD01
SK01	→	SK02
SK02	→	SK01
SK03	→	SK03
SK04	→	SK04
SK05	→	SK05
SK06	→	SK06
SK07	→	SK07
SE02	→	SK08
SK08	→	SK09
SK09	→	SK10
SK10	→	SK11
SK11	→	SK12
SX01	→	SX01
SX02	→	SX02
	→	SI10

第1表　遺構名新旧対照表

第2章　遺跡の立地と環境

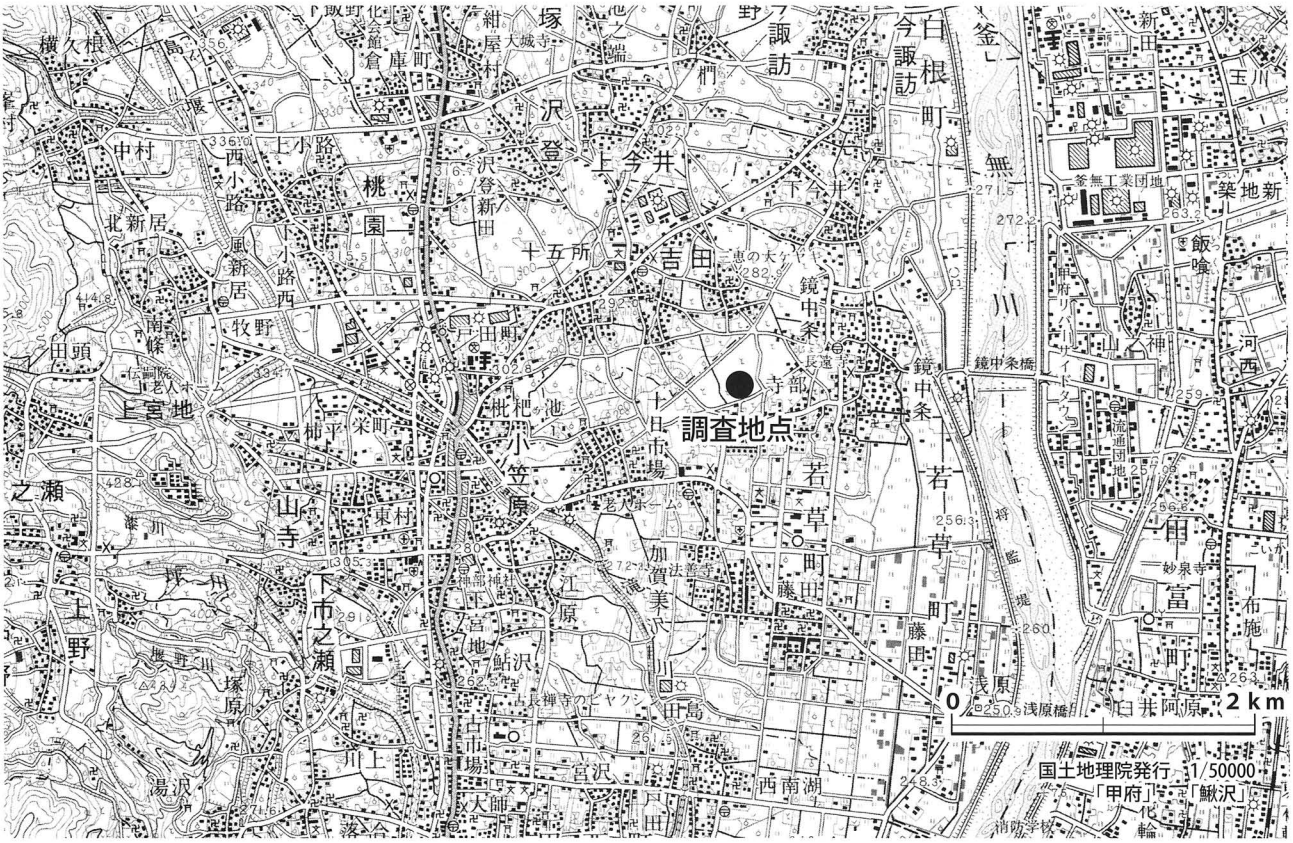
第1節　遺跡の立地

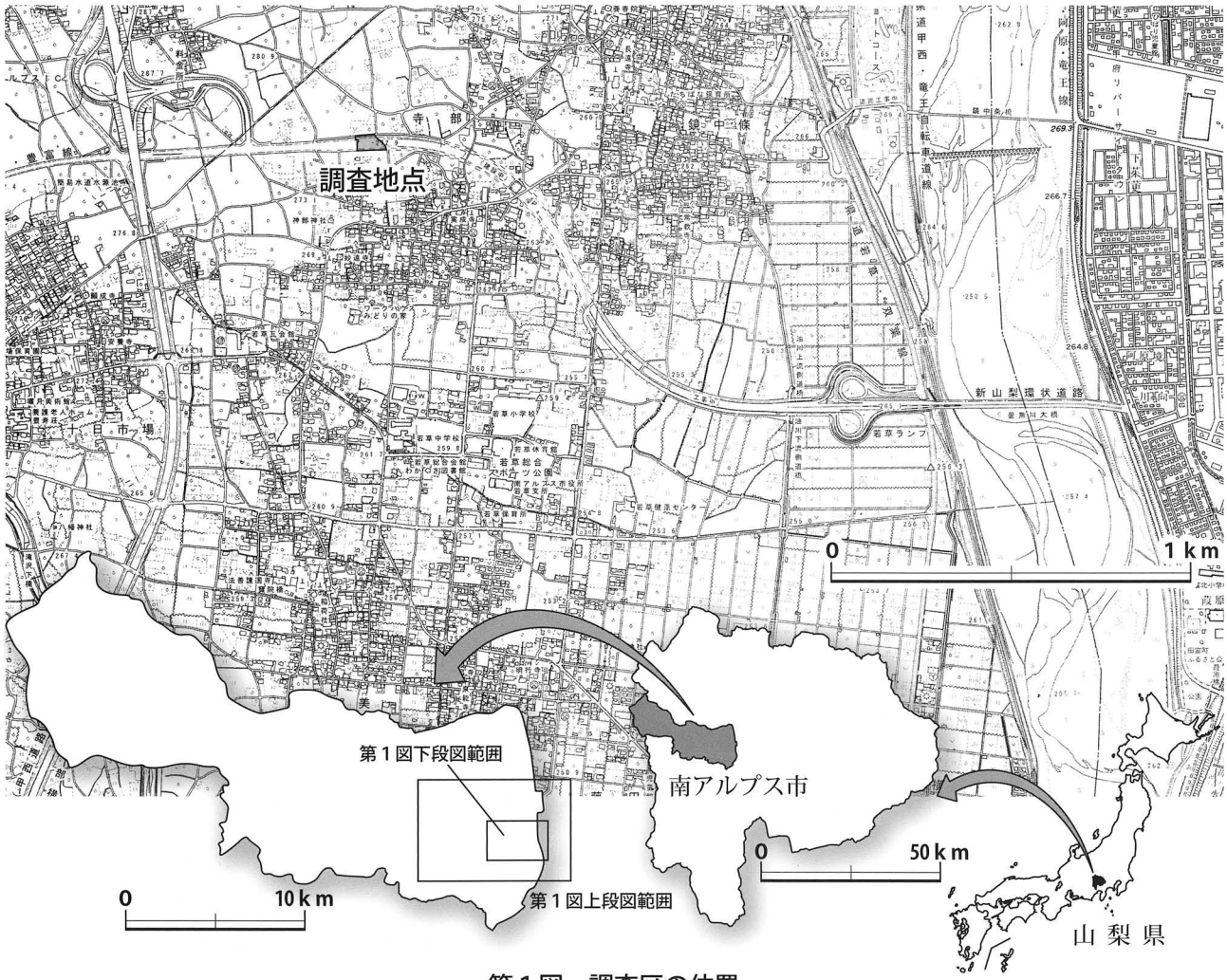
本遺跡は、平成15年4月1日、山梨県の釜無川（富士川）右岸地域6町村が合併して誕生した南アルプス市に立地する。市の総面積264.06平方ｋｍ、領域は東西29.6ｋｍ、南北11.8ｋｍの範囲に広がり、山梨県の総面積の約5.9%を占める。市の東端は、釜無川左岸に占地する市域の飛地部分にあり、西端は、大仙丈ケ岳（2975ｍ）であり長野県に接する。市の北端は、駒津峰（2752ｍ）付近で、南端は、釜無川に滝沢川、坪川等が合流する地点となる。市の最高点は北岳山頂の3193ｍ、最低点は市の最南端にあたり標高約241ｍを測る。

市の領域は甲府盆地における釜無川（富士川）右岸地域のほぼ全てを占める。これは、概ね山梨県の最西部、所謂峡西（きょうさい）地域、西郡（にしごおり）地方などと呼称されてきた地域に相当し、平成15年の町村合併以前より地形的にも文化的にも一体的に捉えられてきた地域といえる。

市域西部は、国内第2位の標高(3193ｍ)を誇る南アルプス連峰（赤石山脈）の主峰北岳を擁し、その前衛である巨摩山地を含め急峻な山岳が卓越する。また、櫛形山を中心とした巨摩山地と南アルプス連峰との間には、所謂「糸魚川-静岡構造線」が市域を縦断する。

市域東半は、これら急峻な山岳を流下してきた河川の営為によって形成された複合扇状地が発達する。その中でも、御勅使川の河川作用によって形成された御勅使川扇状地は、日本有数の扇状地として知られる。市域の東辺は一部対岸に飛地を有するが、概ね釜無川に画され、これら巨摩山地由来の複合扇状地群が到達し得なかった市域南東辺には、釜無川の氾濫原がひろがっている。


調査地点
0
2km
国土地理院発行 1/50000
「甲府」「鰍沢」


調査地点
0
1km
第1図下段図範囲
第1図上段図範囲
南アルプス市
0
10km
0
50km
山梨県

第1図　調査区の位置

寺部村附第12遺跡
調査地点
寺部村附第12遺跡
南アルプス市
：市之瀬台地
：山地
：御勅使川扇状地
：滝沢川扇状地
：市之瀬台地麓複合扇状地／御勅使川二次扇状地
：氾濫原／釜無川扇状地
：現河道
：遺跡
0
1:50000
2 km

第２図　遺跡の立地

寺部村附第12遺跡の位置は、第3図に（1）として示した（以下遺跡名のあとに付した番号は第3図に示した遺跡の位置に対応する）とおり、御勅使川扇状地に占地する。

御勅使川扇状地では、その扇端部の湧水線に沿って帯状に埋蔵文化財包蔵地が分布することが知られている。微視的に見れば御勅使川扇状地の最末端では古墳時代後期・奈良平安時代を中心とする集落に伴って腰帯具などが検出された新居道下遺跡（2）、弥生時代中期、後期及び古墳時代後期～中世に係る遺構・遺物が検出された溝呂木道上第5遺跡第Ⅰ地点・第Ⅱ地点（3・4）・枇杷B遺跡（5）、溝呂木道上第5遺跡から滝沢川を隔て南側に占地する向第1遺跡（6）などがあり、これまで発掘調査が行われている。これら遺跡群の調査成果からは、弥生時代中期以降中世まで、連綿と人間の営為の痕跡が確認されており、扇状地末端部の湧水帯に支えられた豊かな住環境を想像することが出来る。

御勅使川扇状地末端の範疇で捉えうる遺跡群でもやや内側（扇央）に入ると古墳時代前期及び平安時代の集落が発見された村前東A遺跡（7）・角力場第2遺跡（8）、寺部村附第6・11遺跡（10・9）、同じく古墳時代前期の遺構が検出された前原G遺跡（11）・豊小学校遺跡（12）があり、この辺りに古墳時代前期の遺構が濃密且つ広汎に分布することが明らかになりつつある。特に村前東A遺跡からは、100軒を超える該期住居址が検出されており、古墳時代前期の拠点的集落として注目される。

また同領域については、平安時代、9世紀前半から半ば以降、古墳時代前期以来断絶していた集落が突如として再出現する傾向があり、例えば八ヶ岳山麓における平安時代前半の集落動向に見られるような該期の汎甲斐国的開墾指向の高揚といった潮流がここで見て取れる。

これに加え、村前東A遺跡の北側には弥生時代後期の方形周溝墓群が検出された十五所遺跡（13）が占地する。また、寺部村附第6遺跡（10）からは、古墳時代中期の円形周溝墓が3基検出されており、甲府盆地西部地域の弥生時代～古墳時代の動向を探る上で注目される。

寺部村附第12遺跡は、御勅使川扇状地上、扇端から約500～750m程扇央寄りに位置し、微視的に見れば、御勅使川扇状地扇端部の遺跡群の中でも内側（扇央）寄りの分布領域の範疇として捉えうる。ただし、この領域においては、今回検出された遺構や遺物のうち、平安時代後半に係るものについては、これまであまり検出例がなく、本遺跡以外では、本遺跡の西に接する寺部村附第11遺跡（9）および本遺跡の東南に接し、現在の寺部集落に北接する寺部村附第6遺跡（10）などにおいて若干の住居址、竪穴状遺構が検出されているに留まる。

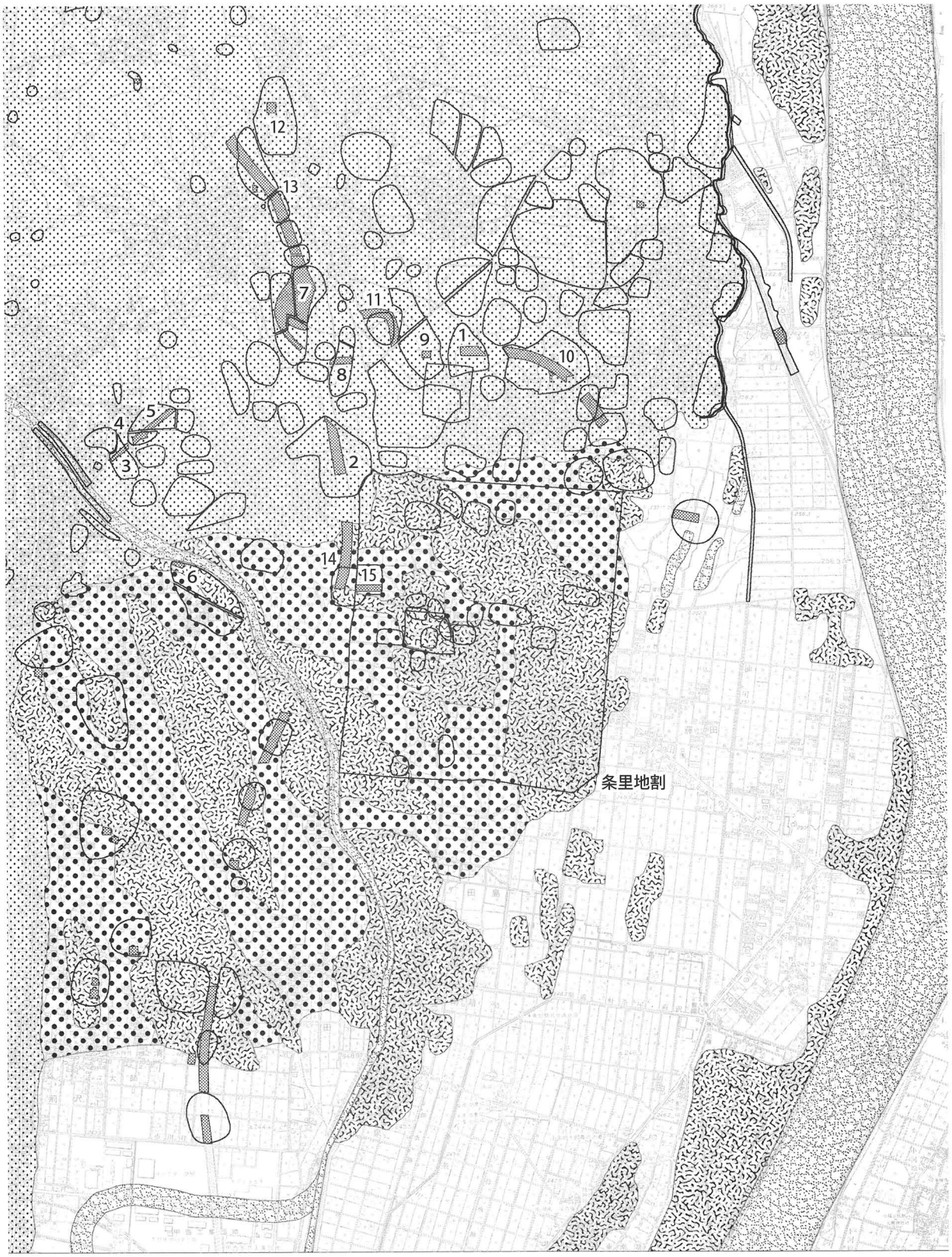
なお、御勅使川扇状地扇端域は、すなわちこの地域でいうところの「田方（たかた）」と「原方（はらかた）」の境界域にあたり、これより北側は、古来から「月夜でも焼ける」と称された御勅使川扇状地扇央の旱魃地帯、所謂「原七郷[1)]」となる。

本遺跡周辺を含む御勅使川扇状地末端部は、10世紀前半に成立した『和名類聚抄』に所載される甲斐国巨麻郡九郷のうちの大井郷に比定される。御勅使川扇状地末端の湧水帯に位置する遺跡群の南面に広がる滝沢川扇状地上には条里地割が広く遺存し、12世紀代にはこの条里地域を中心に加賀美荘が成立して甲斐源氏加賀美氏の拠点となってゆく。滝沢川扇状地上の微高地に現在も占地する古刹「法善寺」は、加賀美氏の館跡と伝えられ、ここに居を構えた加賀美遠光は、その長男光朝を秋山、次男長清を小笠原（いずれも現南アルプス市）に配するなどして峡西地方に勢力をもった。

この滝沢川扇状地上では、法善寺の塔頭であった「福寿院」関連の遺構が検出された二本柳遺跡（14～15）などが調査されている。二本柳遺跡では特に、甲西バイパス地点（14）から古代末から近世の水田址などと共に、中世の木棺が良好な状況で検出され、当時の葬送儀礼を検証する上で貴重な事例となった。法善寺周辺には、近世以前には20を超える塔頭が存在したとされ、法善寺を中心としたこの地域の隆盛を知ることができる。

また、毎年2月10日、11日の両日、安養寺を中心として現在の県道韮崎櫛形豊富線に沿って開かれる「十日市（南アルプス市指定史跡）」は、その起源が中世に遡る。甲府盆地に春を呼ぶ祭として知られるこの市が行われる県道部分は、御勅使川扇状

1) 原七郷：（はらしちごう）御勅使川扇状地上の灌漑などを目的として寛文10年（1670）に開削された用水堰である「徳島堰」の開通によっても、なお水不足に苦しんだ扇央の7村、すなわち上八田、西野、在家塚、上今井、吉田、小笠原、桃園を指す。当地域での旱魃地帯の代名詞として使われる。



0　1:25000　1km

凡 例：

河道
旧河道

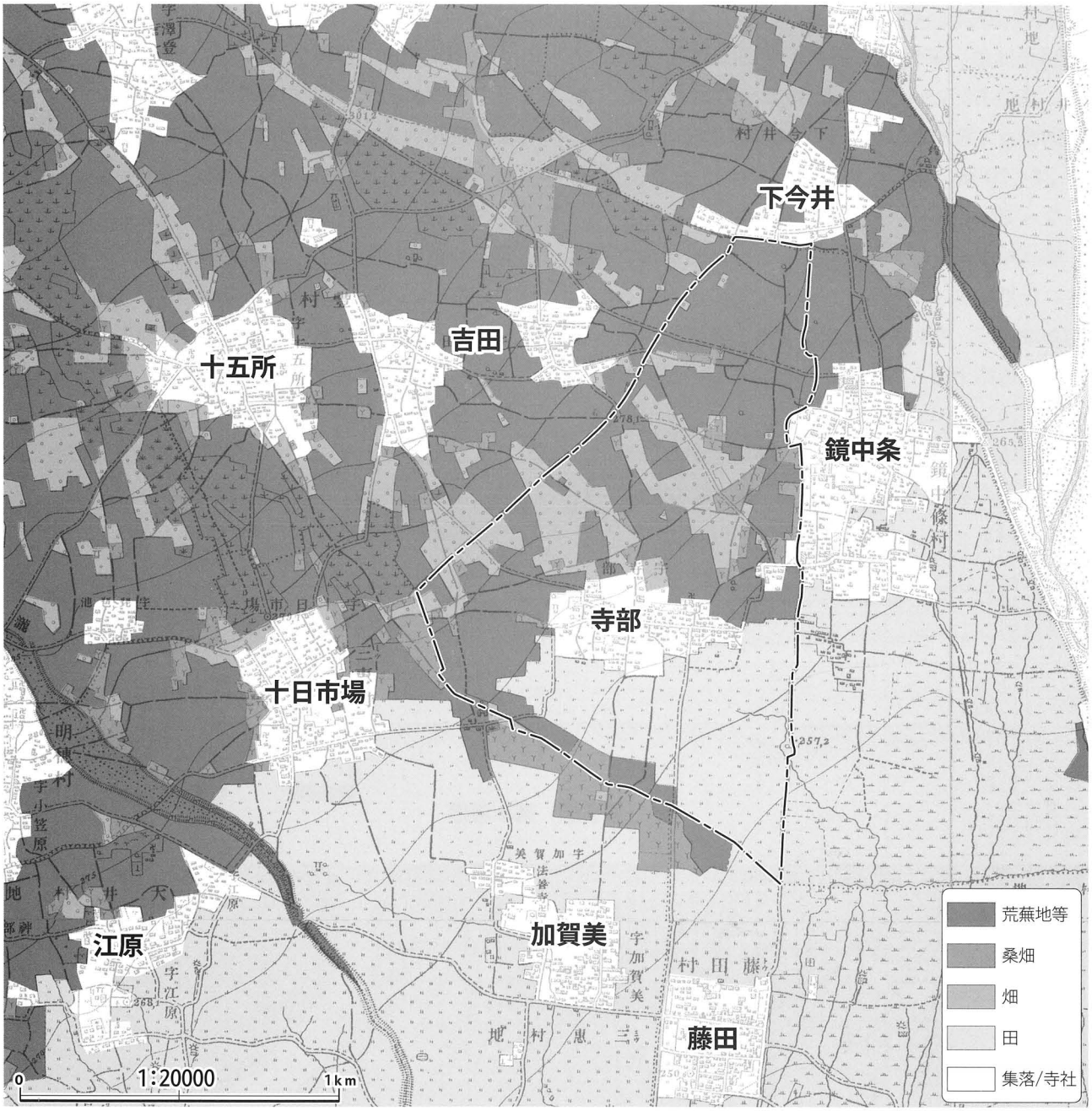
御勅使川扇状地及び
市之瀬台地麓複合扇状地

釜無川氾濫原

氾濫原上や
扇状地上の微高地

滝沢川扇状地

第３図　遺跡の環境と周辺の調査



第4図　周辺の土地利用状況（明治21年）

地の南縁、滝沢川扇状地の北縁にあたり、このラインはいわゆる田方、原方の境界線に一致するものである。田方、原方それぞれの産物を各々の境界で交換した市の成り立ちを想起することができ、地域間交流の拠点としても、この地域の中世の繁栄を偲ぶことができる。

遺跡の位置する南アルプス市寺部は、近世村落寺部村にあたる。明治21年の土地利用状況（第4図）を見れば、寺部村は、御勅使川扇状地末端に並ぶ鏡中条、十日市場、江原の各村々とともに屋敷地の北側が荒蕪地や桑畑、南側が水田となっており、まさに地形の境界線上に位置することがわかる。

検地帳によれば、寺部村は慶長検地時点での石高525石6升。耕地面積は田3町余り、畑13町余り、荒地16町余りで、やはり北半が扇央の旱魃地帯にかかるその立地から、畑地の割合及び荒地の割合が相対的に高いことが看取される。本遺跡周辺も、現在は畑地灌漑設備の整備により桃を中心とした果樹栽培が盛行するが、近世には綿花、煙草などが栽培されてきたものと推察され、近世以降畑地灌漑設備の整備がすすむまでは、専ら桑畑として耕作が行なわれてきた。

第２節　調査区の土層

調査区は、御勅使川扇状地の扇端付近に位置する。東西 85.8 m、南北幅 44.3 mの調査区は、南に向かって緩やかに傾斜し、調査区北端の地表標高が 274.10 m、調査区南端の地表標高は 273.05 m となっている。

扇状地上に位置することから、今回の調査で確認された基本層は、すべてが御勅使川の営為よる二次的な堆積で、写真１に示すとおり、確認面においては黄褐色粘土層と円礫を主体とする砂礫が縞状に混在する。

今回確認された基本層序は以下のとおり。

０　近年の客土。調査区南半分部を中心に確認されている。

Ⅰ　明褐色土。砂礫を含む。

Ⅱ'　砂礫に非常に富むⅡ層。

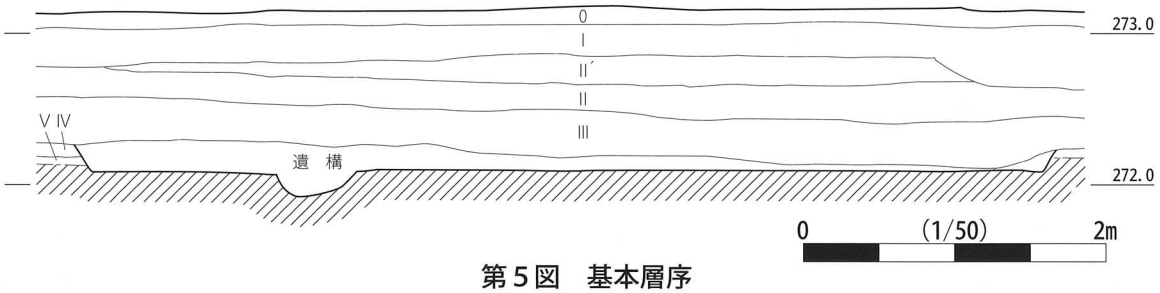
Ⅱ　灰褐色土。砂礫を多く含みしまらない。

Ⅲ　黒褐色土。しまりなく砂礫を多く含む。古墳時代前期および平安時代の遺物包含層。

Ⅳ　暗黄褐色粘質土。Ⅴ層より色調暗く砂礫を多く含む。Ⅲ層とⅤ層の漸移層。

Ⅴ　暗黄褐色粘質土。本層上面が今回の調査における遺構確認面となった。

Ⅵ　砂礫層。径５～50 mm大の円礫を主体とする。なお、Ⅳ・Ⅴ層については、本調査区の多くの部分で堆積が不安定となり、所々で欠如し、Ⅵ層の砂礫層が露出する。



第５図　基本層序

写真１　調査区全景（上方が北）

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　竪穴住居址（ＳＩ）

ＳＩ０１

Ｊ－８・９区を中心に他の遺構とは切り合い無く単独で検出された。平面形は隅円方形を呈す。主軸はN-12° 00′-Wにとり、確認面での規模は東西4.80 m、南北4.60 mを測る。床面における規模は、東西4.51 m、南北4.38 m。床面は、概ねよく硬化し、黄褐色粘土粒の散布が見られる。また図示した範囲に特に顕著な硬化面が確認される。確認面から床面までの深さは0.34 m、床面標高は271.96 mを測る。炉は中央やや北東寄りに１基、被熱した床面の焼土範囲として検出された。床面への掘り込み等は確認されない。その規模は長径0.42 m、短径0.33 mを測る。覆土は自然堆積で７層に分けられる。柱穴は確認できなかった。このほか付属施設として、北壁に２ヶ所本址プランから溝状に突出する部分を確認できる。本址と切り合う遺構の可能性もあるが、精査したが調査時点において住居址本体との切り合い関係を確認することはできなかった。西側の突出部は幅0.35 m、住居址本体からの突出長は1.18 m。東側の突出部は幅0.44 m、長さ0.94 mで、確認面からの深さはそれぞれ最大0.05 m程で浅い。本遺跡においてはSI03においても同様の突出部を確認することができる。

遺物の出土量は少なく、古墳時代前期の所産４点を図示するに止まる。

ＳＩ０２

Ｊ－９・10区を中心に検出された。遺構の南半が調査区外にあるが、平面形は隅円方形乃至隅円長方形を呈するものと推察され、確認しえた範囲では他の遺構とは切り合い無く単独で存在する。主軸はN-23° 30′-Wにとり、確認面での規模は東西5.14 m、南北3.06 m以上を測る。床面における規模は東西4.88 m、南北2.92 m以上。床面は概ねよく硬化し、黄褐色粘土粒の撒布が見られ、覆土と明瞭に識別することができる。確認面から床面までの深さは0.18 m、床面標高は272.02 mを測る。炉は中央やや北東寄りに１基、被熱した浅い皿状のピットとして検出される。炉の規模は長径0.68 m、短径0.61 mの楕円形で、床面からの深さは0.03 mを測る。このほか、径0.20～0.28 mの円形の被熱範囲を２ヶ所、本址北半において確認することができる。柱穴等他の施設は確認できなかった。住居址の覆土は自然堆積で３層に分けられる。

遺物の出土量は少ない。古墳時代前期の所産となる遺物５点を図示した。

ＳＩ０３

Ｍ－９区を中心に検出された。平面形は隅円方形を呈し、SK01、SK02、SE01にそれぞれ切られる。主軸はN-33° 00′-Wにとり、確認面での規模は東西6.05 m、南北6.71 mを測る。床面における規模は、東西5.89 m、南北6.55 m。床面は黄灰色粘土ブロックが散り明瞭に覆土と識別できる。特に本址中央付近で著しい硬化面を確認できる。周縁に向かい床面の硬化の度合いは弱く、黄灰色粘土ブロックの散布も少なくなる。確認面から床面までの深さは0.18 m、床面標高は271.01 mを測る。炉は中央やや北寄りに１基確認され、その規模は長径0.57 m、短径0.49 mを測り、形状は楕円形を呈す。炉の南辺には、赤灰色に変色した粘土ブロックを有す。床面から火床面までの深さは、0.05 m、掘方最深部までの深さは0.09 mを測る。住居址の覆土は自然堆積で６層に分けられる。柱穴は確認できなかった。このほか付属施設として、本址北西隅付近に３ヶ所、SI01同様の本址プランから溝状に突出する部分を確認することができる。本址と切り合う遺構の可能性もあるが、調査時において住居址本体との切り合い関係を確認することはできなかった。一番南側の突出部は幅0.30 m、住居址本体からの突出長は0.83 m。中央部にピット状のくぼみを有す。真ん中の突出部は幅0.30 m、長さ0.67 mで、住居址本体との接点付近にピット状のくぼみを有す。一番北側の突出部は、幅0.35 m、住居址本体からの突出長は0.75 m。先端にピット状のくぼみを有す。確認面からの深さは、それぞれ最大0.05 m程で浅い。本址では、さらに西壁中央部にも0.53 m程の幅で、住居址プランから0.17 mほど外側に広がった部分を認めることができる。

遺物の出土量は少ない。古墳時代前期の所産となる遺物８点を図示した。また図示し得ないが、上記突出部の覆土からも、古墳時代前期の土器片が検出されている。

ＳＩ０４

Ｍ・Ｎ－１０区を中心に検出された。遺構の南半が調査区外にあるが、平面形は方形乃至長方形を呈するものと推察され、調査区内ではSE01に切られる。主軸はN-17°00′-Wにとり、確認面での規模は東西5.68 m、南北4.84 m以上を測る。床面における規模は東西5.57 m、南北4.78 m以上。床面は炉の周辺を中心として顕著な硬化面が認められる。確認面から床面までの深さは0.08 m、床面標高は272.10 mを測る。炉は中央やや北東寄りに１基検出された。炉の規模は長径0.59 m、短径0.44 mの不整な楕円形で、床面から火床面までの深さは0.05 mを測る。炉の底面には明確な被熱面(焼土面)を有する。そのほか、径0.19～0.40 m程の円形の被熱面を炉址の東側に２ヶ所確認することができる。柱穴は確認できなかった。また床面において、調査区南壁沿いに楕円形を呈すると推察されるピットを１基検出した。ピットの床面からの深さは0.17 mを測る。住居址の覆土は自然堆積で４層に分けられる。

遺物の出土量は少ない。古墳時代前期の所産となる遺物３点を図示した。

ＳＩ０５

Ｅ－９・１０区を中心に検出された。遺構の南側が調査区外にあるが、平面形は方形乃至長方形を呈するものと推察され、SI06、SI07を切る。主軸はN-14°30′-Eにとり、確認面での規模は東西4.28 m、南北3.38 m以上を測る。床面における規模は東西3.85 m、南北3.16以上。東壁を除き幅0.17～0.20 m、床面からの深さ0.08 m程の周溝が廻る。床面には著しい硬化面は確認できない。確認面から床面までの深さは0.26 m、床面標高は272.03 mを測る。竈は、住居址北東隅に１基設けられ、その規模は幅1.79 m、長さ0.87 mを測る。竈は主に礫を用いて構築され、火床及び煙出し部分に顕著な被熱面を確認できる。ただし火床中に検出された長径0.22 m、短径0.18 m、火床面からの深さ0.05 mを測る楕円形のピット内は被熱した痕跡が認められない。住居址の覆土は自然堆積で７層に分けられる。柱穴は確認できなかった。このほか付属施設として、竈右袖外側に長径0.44 m、短径0.37 mのやや不整な楕円形を呈するピットが１基検出されている。

遺物は、竈周辺を中心に平安時代後半の所産となる遺物が検出され、この内12点を図示した。

ＳＩ０６

Ｃ・Ｄ－９区を中心に検出された。平面形は方形を呈し、SI05、SI09、SD01、SK07、SK08、SK11、SK12に切られる。主軸はN-40°00′-Eにとり、確認面での規模は東西4.76 m、南北5.21 mを測る。床面における規模は、東西4.60 m、南北5.06 m。床面に著しい硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは0.11 m、床面標高は272.08 mを測る。炉や床面の被熱した痕跡等は確認されなかった。また、柱穴等その他の付属施設も確認されなかった。覆土はやや不整な堆積で５層に分けられる。

遺物の出土量は少ない。古墳時代前期の所産となる遺物４点を図示した。

ＳＩ０７

Ｄ・Ｅ－８・９区を中心に検出された。平面形は長方形を呈し、SI05、SI08、SI09、SK06、SK07、SK08に切られる。主軸はN-38°30′-Eにとり、確認面での規模は東西5.52 m、南北6.33 mを測る。床面における規模は東西5.49 m、南北6.23 m。床面は遺構の中心付近に顕著な硬化面を有し容易に検出することができる。確認面から床面までの深さは0.08 m、床面標高は272.18 mを測る。明確な炉址は確認されなかったが、径0.23～0.34 m程の円形乃至楕円形に床面が被熱した痕跡を、本址やや北寄りで４ヶ所確認した。また、柱穴その他の付属施設は確認されなかった。

古墳時代前期の所産となる遺物をわずかに検出したが、小片のため図示できない。

ＳＩ０８

Ｅ－８区を中心に検出された。平面形はやや不整な方形を呈し、SI07を切る。主軸はN-43°30′-Eにとり、確認面での規模は東西4.90 m、南北5.02

mを測る。床面における規模は東西 4.72 m、南北 4.96 m。床面に著しい硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは 0.11 m、床面標高は 272.17 mを測る。炉や床面の被熱した痕跡等は確認されなかった。また、柱穴その他の付属施設も確認されなかった。覆土は自然堆積で３層に分けられる。

古墳時代前期の所産となる遺物が検出され、この内９点を図示した。

ＳＩ０９

Ｄ－９ポイント付近を中心に検出された。竪穴住居址としたが、住居址とすれば、東西に長い小判状乃至草鞋状の特異な平面形を呈す。SD01、SK08、SK09、SK10、SK11 に切られ、SI06、SI07 を切る。主軸は N-115° 00′-E にとり、確認面での規模は東西 4.69 m、南北 1.83 mを測る。床面における規模は東西 4.53 m、南北 1.66 m。底面はやや凹凸を有し、顕著な硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは 0.12 m、床面標高は 272.17 m を測る。なお、本址北東隅において長さ 0.48 m、幅 0.37 mにわたり床面の著しく被熱した部分を検出した。構築材の痕跡等は認められないが竈等施設の痕跡か。この他、柱穴その他の付属施設も確認されなかった。覆土は３層に分けられる。

遺物は、数量的には、古墳時代前期の所産となるものと平安時代後半のものが合い半ばして検出されている。この内６点を図示した。

ＳＩ１０

Ｎ－２ポイントを中心に検出された。遺構の北半が調査区外にあるが、平面形は方形乃至長方形を呈するものと推察され、調査区内では時期的に後出する SX02 とプランが重なる。主軸は N-10° 00′-W にとり、確認面での規模は東西 6.32 m、南北 4.97 m以上を測る。床面における規模は、東西 5.98 m、南北 4.83 m以上。床面は所々顕著な硬化面が認められる。確認面から床面までの深さは 0.35 m、床面標高は 273.08 mを測る。炉址その他の付属施設は検出されなかった。覆土は自然堆積で５層に分けられる。

遺物は、古墳時時代前期の所産に占められるが、小片が多くこの内２点を図示し得たに止まる。

第２節　建物址（ＳＢ）

ＳＢ０１

Ｌ－３ポイント周辺で検出された。２間×３間の側柱の掘立柱建物址を想定したが、P11 の存在から、南側に庇を持つ建物である可能がある。この場合 SD04 と切り合うが、直接の切り合いがなく、この点からの新旧関係は明らかにしえない。主軸は N-7° 00′-E にとり、規模は東西 7.24 m、南北 4.48 m。南側に庇を持つとすればその幅 1.82 m。柱間の距離は東西方向で平均 2.40 m、南北方向で平均 2.24 mを測る。各ピットの覆土は P07 を除き黒褐色土に占められるが、P08 ～ 10 は砂礫層を地山とするため砂礫質が強い。P07 は他のピットと異なり、覆土に焼土粒、炭化物粒をおびただしく含む。

遺物は、本址を構成するピット中、Ｐ 04 覆土から、弥生時代後期～古墳時代前期の所産となる土器片１点を検出したに止まるが、小片のため図示し得なかった。

ＳＢ０２

Ｌ－ 10 ポイント周辺で検出された。１間×３間の側柱の掘立柱建物址を想定したが、調査区南壁付近での検出のため、遺構がさらに南に伸びる可能性もある。調査区内では他の遺構との切り合い関係は

Pit No.	形状	長径	短径	深さ	底面標高
1	円形	0.28	0.26	0.38	273.00
2	円形	0.32	0.29	0.27	272.99
3	円形	0.33	0.32	0.41	273.00
4	円形	0.34	0.32	0.25	272.93
5	円形	0.32	0.29	0.27	273.04
6	円形	0.27	0.25	0.26	272.95
7	円形	0.26	0.26	0.26	272.98
8	円形	0.34	0.32	0.29	272.97
9	円形	0.27	0.26	0.20	273.09
10	楕円形	0.39	0.33	0.23	273.04
11	円形	0.26	24	0.01	273.10
12	楕円形	0.31	0.27	0.09	273.21

第２表　ＳＢ０１ピット計測表

Pit No.	形状	長径	短径	深さ	底面標高
1	楕円形	0.25	0.22	0.11	272.12
2	楕円形	0.24	0.21	0.17	272.09
3	円形	0.19	0.19	0.05	272.15
4	円形	0.22	0.21	0.03	272.13
5	円形	0.21	0.21	0.12	272.10
6	円形	0.28	0.28	0.17	272.05
7	円形	0.26	0.25	0.17	272.03

第３表　ＳＢ０２ピット計測表

認められなかったが、SI02と切り合い、遺構がさらに東に伸びる可能性も指摘できる。主軸はN-11°30′-Eにとり、規模は東西6.07 m、南北1.80 m。柱間の距離は東西方向で平均2.02 m、南北方向で平均1.80 mを測る。各ピットの覆土は黒褐色土で占められ、焼土炭化物を含む。

遺物の検出はなく、その構築時期は不明だが、覆土の土質から平安時代の所産である可能性が指摘できる。

第3節　井戸址（ＳＥ）

ＳＥ０１

Ｎ－10ポイント周辺で検出された。SI03、SI04を切る。形状は円形を呈し、確認面における規模は東西2.24 m、南北2.11 m。検出しえた深さは1.81 m、底面標高は270.34 mを測る。覆土は、地山の黄褐色乃至黄灰色の粘土ブロックを多く含み、自然堆積乃至埋め戻されたような堆積で20層に分けられる。

覆土から検出される遺物は、数量的には古墳時代前期の所産のものが圧倒するが、遺構底面付近から、図示したとおりわずかに平安時代後半の遺物が検出されている。

第4節　溝（ＳＤ）

ＳＤ０１

Ｃ－９区において検出された。SI06、SI09を切る。検出しえた長さは3.68 mで、やや湾曲しながら東西に伸びる。断面はU字状を呈し、検出しえた幅は0.40 m程で、最深部における確認面からの深さは、0.13 m、底面標高は272.24 mを測る。覆土は黒褐色土を主体として２層に分けられる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の土器片を若干量検出したが、いずれも小片であり図示し得なかった。検出された遺物は古墳時代前期のものに限られるが、SI09を切ることから本址は、平安時代後半以降の所産とすることができる。

ＳＤ０２

グリッドＪ－ラインに沿うように検出された。SD04に切られる。遺構の北側が調査区外に延びるが、調査区内で確認しえた長さは16.35 mで、N-5°00′-Eあたりを主軸に南北に伸びる。確認しえた幅は0.60～0.70 m、深さは0.25 m程で、底面標高は調査区北壁付近で273.30 m、a-a'ラインで273.18 m、b-b'ラインで272.92 m、c-c'ラインで273.12 m、本址を検出し得た南端付近で、273.02 mとなり、現地形同様概ね北から南に傾斜することが看取される。覆土は黒褐色土を主体して２層に分けられる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の土器片を若干量検出したが、いずれも小片であった。この内１点を図示した。

ＳＤ０３

グリッドＩ－ラインに沿うように検出された。遺構の南側が調査区外に延びるが、調査区内では他遺構との切り合い関係は認められない。調査区内で確認しえた長さは3.72 mで、ほぼ南北を軸にとる。確認しえた幅は0.40 m、深さは0.15 m程で、底面標高はa-a'ラインで272.01 mを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体して２層に分けられる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の土器片を若干量検出したが、いずれも小片であった。この内２点を図示した。

ＳＤ０４

Ｇ－３区～Ｌ－３区にかけて検出された。SD02を切る。調査区内で確認しえた長さは24.20 mで、ほぼ東西を主軸にとる。確認しえた幅は0.30～0.70 m、深さ0.15 m程で、底面標高は検出しえた西端部で、273.15 m、セクションを図示したa-a'ラインで273.02 m、検出しえた東端で272.91 mを測り、現地形同様西から東に傾斜していることがわかる。覆土は黒褐色土を主体として２層に分けられる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の土器片を若干量検出したが、いずれも小片であった。この内２点を図示した。

第5節　土　坑（ＳＫ）

ＳＫ０１

Ｍ－８・９区で検出された。SI03を切る。形状は隅丸長方形を呈し、主軸をN-11°30′-Eにとる。確認面における規模は東西0.78 m、南北2.03 mを測る。断面形は底面が平坦なタライ状を呈し、確

認しえた深さは0.32 m、底面標高は271.85 mを測る。覆土は黒褐色土を主体として5層に分けられる。

遺物は、図示したとおり遺構中央部において、覆土中から平安時代前半の所産となる土師器杯2点（いずれも接合して完形）が検出された。本址は今回の調査範囲中では唯一の平安時代前半（10世紀前半）の遺構となる。

ＳＫ０２

Ｍ－10ポイント付近で検出された。SI03を切る。形状は楕円形を呈し、主軸をN-14°00′-Eにとる。確認面における規模は東西1.65 m、南北2.61 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは0.57 m、底面標高は273.12 mを測る。覆土は黒褐色土を主体として7層に分けられる。

図示したとおり、覆土中から平安時代後半の遺物が検出されたほか、図示しえないが古墳時代前期の遺物が若干検出されている。

ＳＫ０３

Ｑ－２区で検出された。切り合いなく単独で存在し、形状は円形を呈す。確認面における規模は東西1.86 m、南北2.02 mを測る。断面形は底面が平坦なタライ状を呈し、確認しえた深さは0.57 m、底面標高は273.12 mを測る。覆土は黒褐色土を主体として4層に分けられる。

図示したとおり、覆土中から平安時代後半の遺物が検出されたほか、図示し得ないが古墳時代前期の遺物が若干検出されている。

ＳＫ０４

Ｇ－８区で検出された。切り合いなく単独で存在し、形状は楕円形を呈す。確認面における規模は東西1.13 m、南北1.98 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは0.23 m、底面標高は272.08 mを測る。覆土は暗褐色土を主体として4層に分けられる。

遺物は、覆土中から鏃と思しき鉄製品2点、不明鉄製品1点が検出された。その他は古墳時代前期の所産となる遺物がわずかに認められる程度で、1点を図示するに止まる。

ＳＫ０５

Ｇ－８区で検出された。切り合いなく単独で存在し、形状は楕円形を呈す。確認面における規模は東西1.00 m、南北0.48 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは0.16 m、底面標高は272.07 mを測る。覆土は暗褐色土を主体として2層に分けられる。

遺物は、古墳時代前期の所産となる土器片がわずかに検出されたが、いずれも小片のため図示しえなかった。

ＳＫ０６

Ｄ－９区で検出された。SI07、SK07を切り、形状は楕円形を呈す。確認面における規模は東西1.04 m、南北0.52 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは0.38 m、底面標高は271.85 mを測る。覆土は黒褐色土を主体として2層に分けられる。

遺物は検出されなかった。

ＳＫ０７

Ｄ－９区で検出された。SI06、SI07を切り、SK06、SK08に切られる。形状は楕円形を呈す。確認面における規模は東西1.72 m、南北1.10 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは0.12 m、底面標高は272.10 mを測る。覆土は暗褐色土を主体として3層に分けられる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期の土器片を数点検出したが、小片のため図示し得なかった。

ＳＫ０８

Ｄ－９区で検出された。SI06、SI07、SI09、SK07を切る。形状は楕円形を呈す。確認面における規模は東西2.35 m、南北2.04 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは0.49 m、底面標高は271.78 mを測る。中央北東寄りに長径0.64 m、短径0.55 m、底面からの深さ0.05 mほど楕円形のピットを有する。覆土は黒褐色土を主体として2層に分けられる。

遺物は、土師質土器を主体としながら、灰釉陶器などが検出されている。また、覆土中から鉄滓が検出された。ただし、遺物の数量的主体は、混入した古墳時代前期の遺物片に占められる。

ＳＫ０９

Ｄ－８区で検出された。SI09を切る。形状は円形を呈す。確認面における規模は長径0.50 m、短

径 0.45 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは 0.15 m、底面標高は 272.18 mを測る。覆土は焼土と炭化物を多く含む締まりのない黒色土に占められる。

遺物は検出されなかった。

ＳＫ１０

Ｃ－９区で検出された。SI09 を切る。形状は円形を呈す。確認面における規模は長径 0.50 m、短径 0.49 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは 0.14 m、底面標高は 272.04 mを測る。覆土は焼土と炭化物を多く含む締まりのない黒色土に占められる。

遺物は検出されなかった。

ＳＫ１１

Ｃ－９区で検出された。SI09 を切る。形状は円形を呈す。確認面における規模は長径 0.49 m、短径 0.48 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは 0.14 m、底面標高は 272.03 mを測る。覆土は焼土と炭化物を多く含む締まりのない黒色土に占められる。

遺物は検出されなかった。

ＳＫ１２

Ｃ・Ｄ－９区で検出された。SI06 を切る。形状は円形を呈す。確認面における規模は長径 0.50 m、短径 0.48 mを測る。断面形はU字状を呈し、確認しえた深さは 0.25 m、底面標高は 271.90 mを測る。覆土は焼土と炭化物をわずかに含む、暗褐色土に占められる。

遺物は検出されなかった。

第６節　不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ０１

Ｐ・Ｑ－３・４区において、切り合いなく単独で検出された。主軸は N-12° 30′-W にとり、平面形はやや不整な隅丸方形を呈す。確認面における規模は東西 7.03 m、南北 6.33 mを測る。底面は擂鉢状に窪み平坦な面を有さない。また、底面において硬化面や被熱面等も確認されない。確認面からの深さは最大で 0.43 m、底面標高は 272.94 mを測る。覆土は、砂礫を多く含む黒灰色土を主体として２層に分けられる。

本址の所産時期は、遺物や覆土の土質から平安時代後半とすることができるが、検出された遺物量は該期のものよりも、数量的には混入した古墳時代前期のものが凌駕する。

ＳＸ０２

Ｎ－２ポイントを中心に検出された。遺構の北半が調査区外にあり、遺構東半のプランが判然としないが、平面形はやや不整な隅丸方形乃至隅丸長方形を呈するものと推察される。

調査区内では SI10 とプランが上下に重なる。遺構の遺存状態が良くなく、規模、主軸等は明確にしえないが、底面は擂鉢状に窪み平坦面は見られない。また特に硬化面や被熱面等も確認できない。確認面から底面までの深さは 0.10 m、床面標高は 273.43 mを測る。覆土は自然堆積で２層に分けられる。

本址は、SI10 を入れ子状に切る遺構であるのか、SI10 の埋没過程で生じた窪みを捉えたものであるのか判然としない。

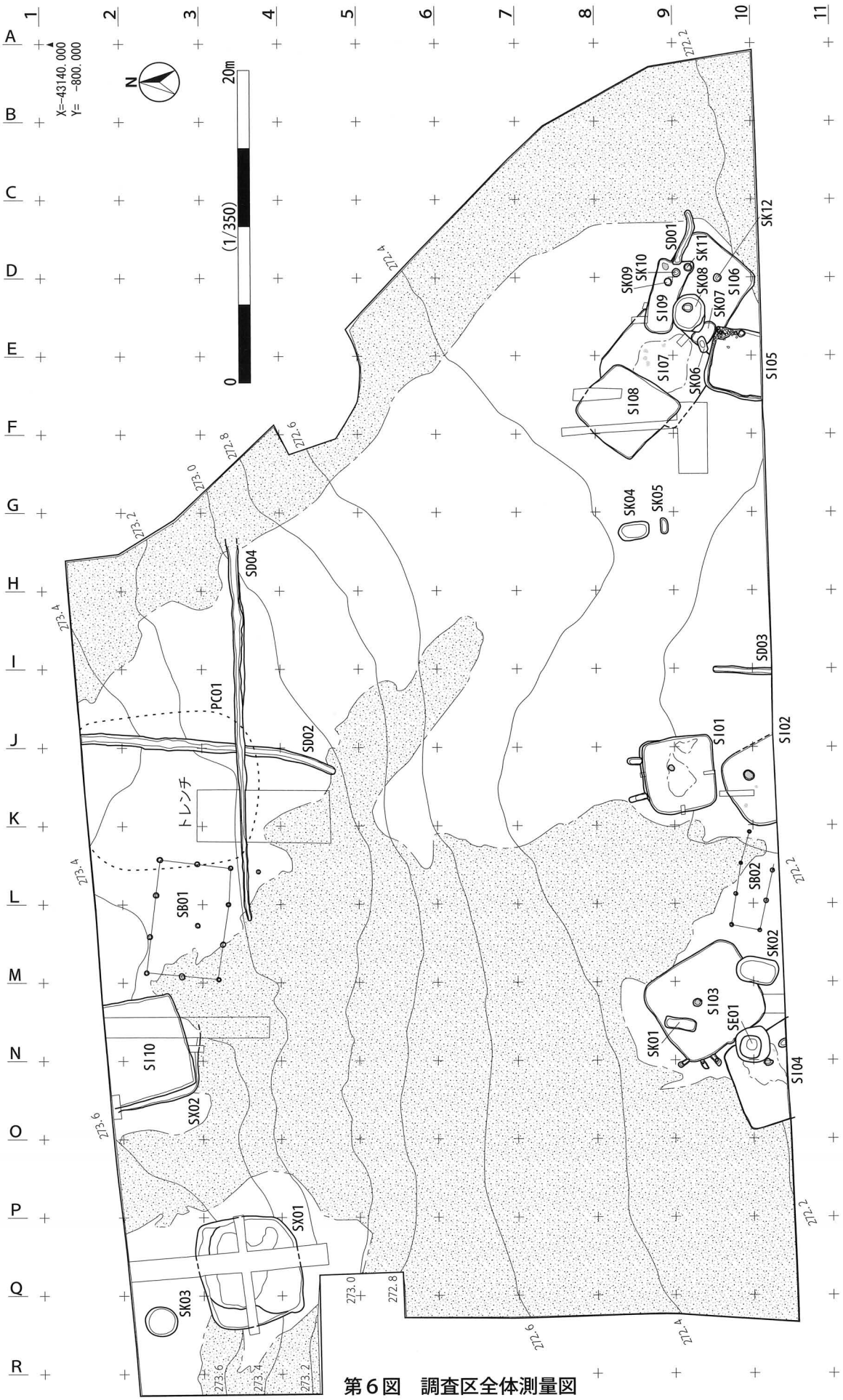
遺物は、特に検出された遺構範囲の北西部付近に集中して多量に検出された。その所産時期は古墳時代前期のものに占められる。

第７節　土器集中部（ＰＣ）

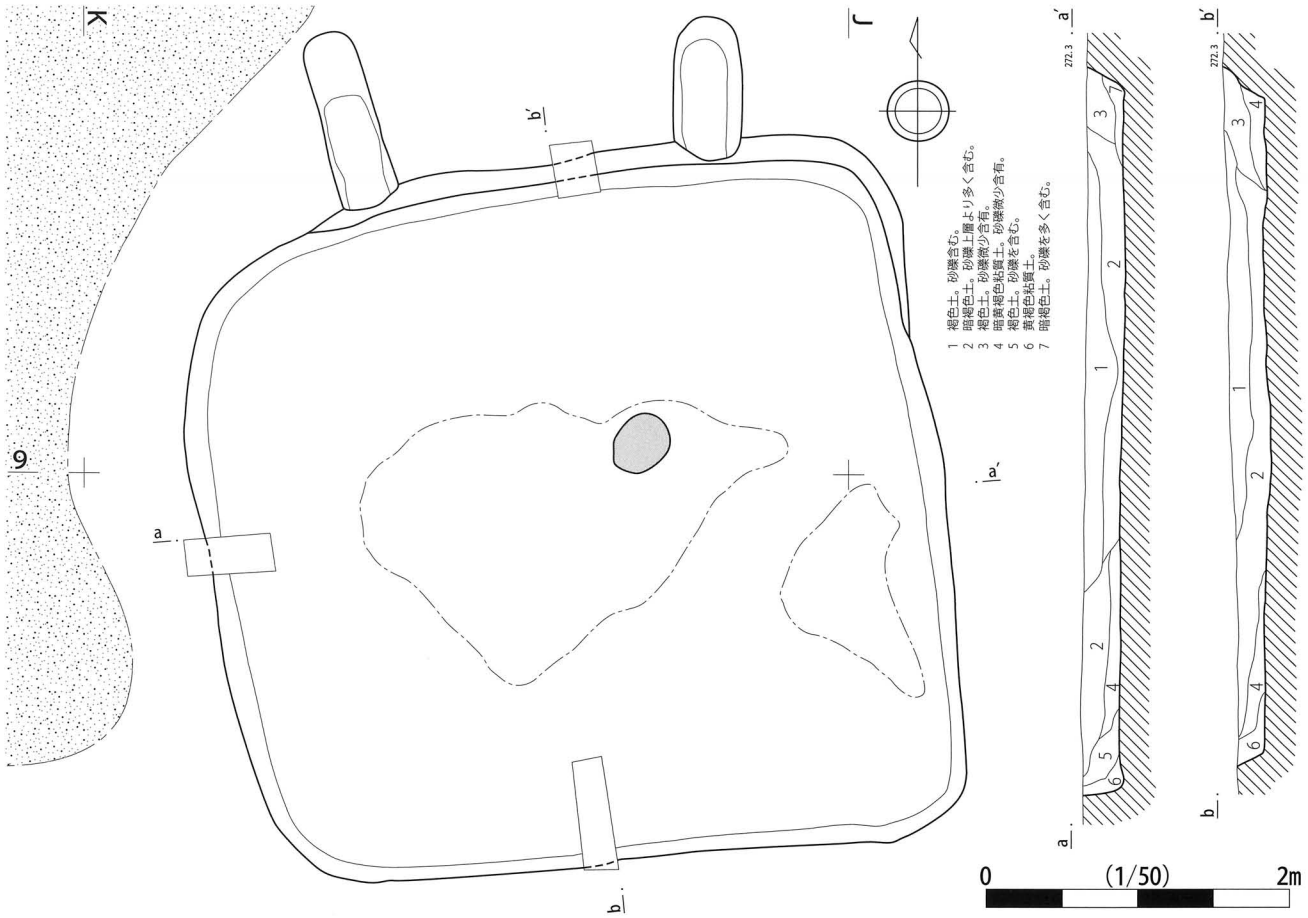
ＰＣ０１

Ｊ－２区を中心に検出された。遺物が一定範囲から集中して検出されたためトレンチを設定するなどして精査したが、遺構プランはついに確認に至らなかった。選出された遺物の分布は、北側（調査区外）に広がる可能性が高い。

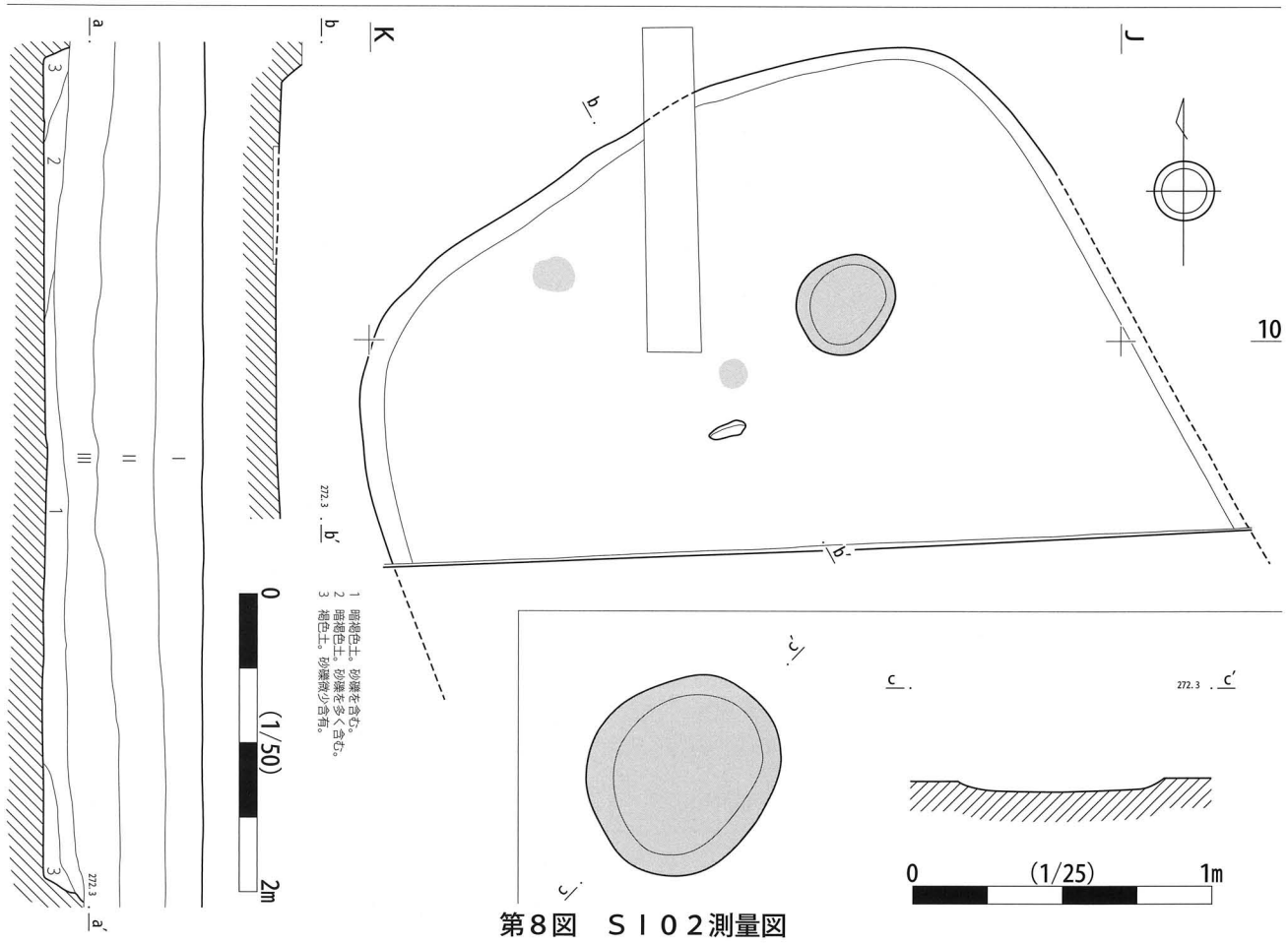
遺物の時期は、平安時代後期～古墳時代前期の範疇で捉えられる。



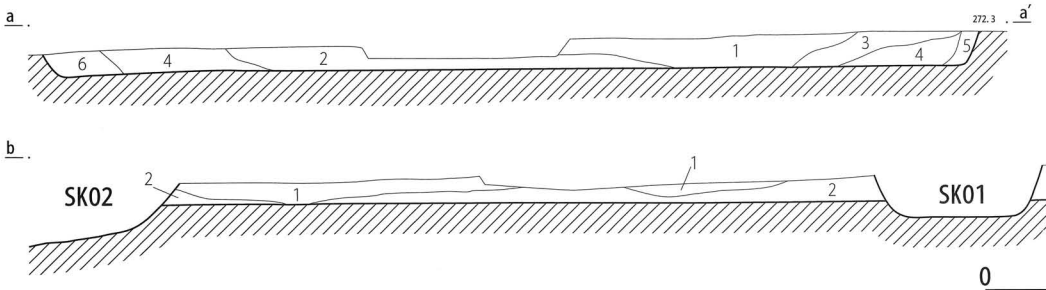
第6図　調査区全体測量図



第7図　ＳＩ０１測量図

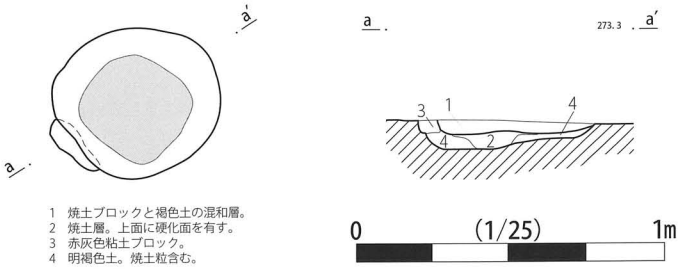


第8図　ＳＩ０２測量図



1 暗褐色土。しまりなく、砂礫を多く含む。
2 褐色土。砂礫微少含有。
3 褐色土。砂礫含む。
4 褐色土。砂礫多く含み色調暗い。
5 褐色土。色調明るく、砂礫少ない。
6 暗黄褐色土。やや砂質。砂礫を含む。

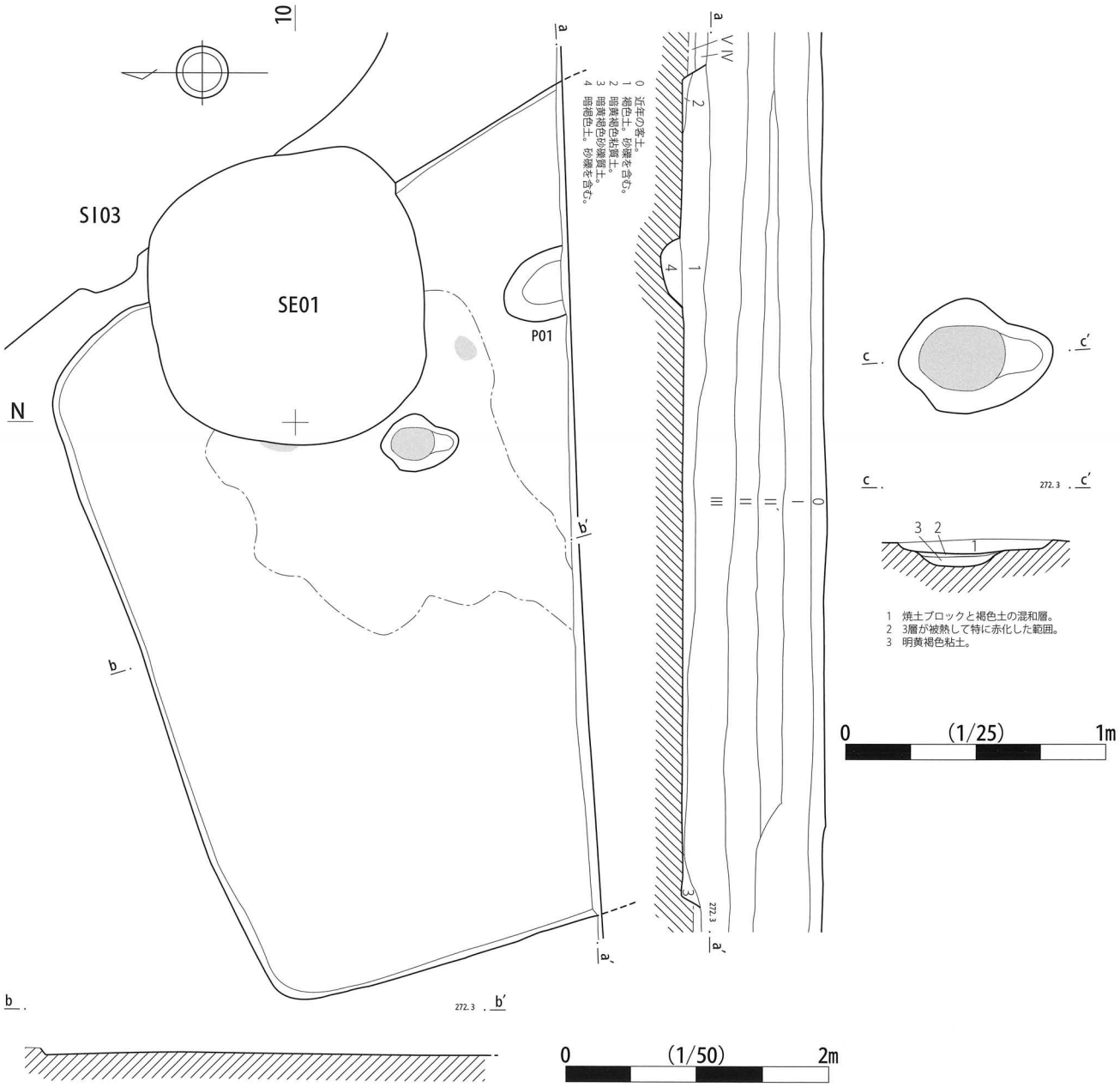
0 (1/50) 2m



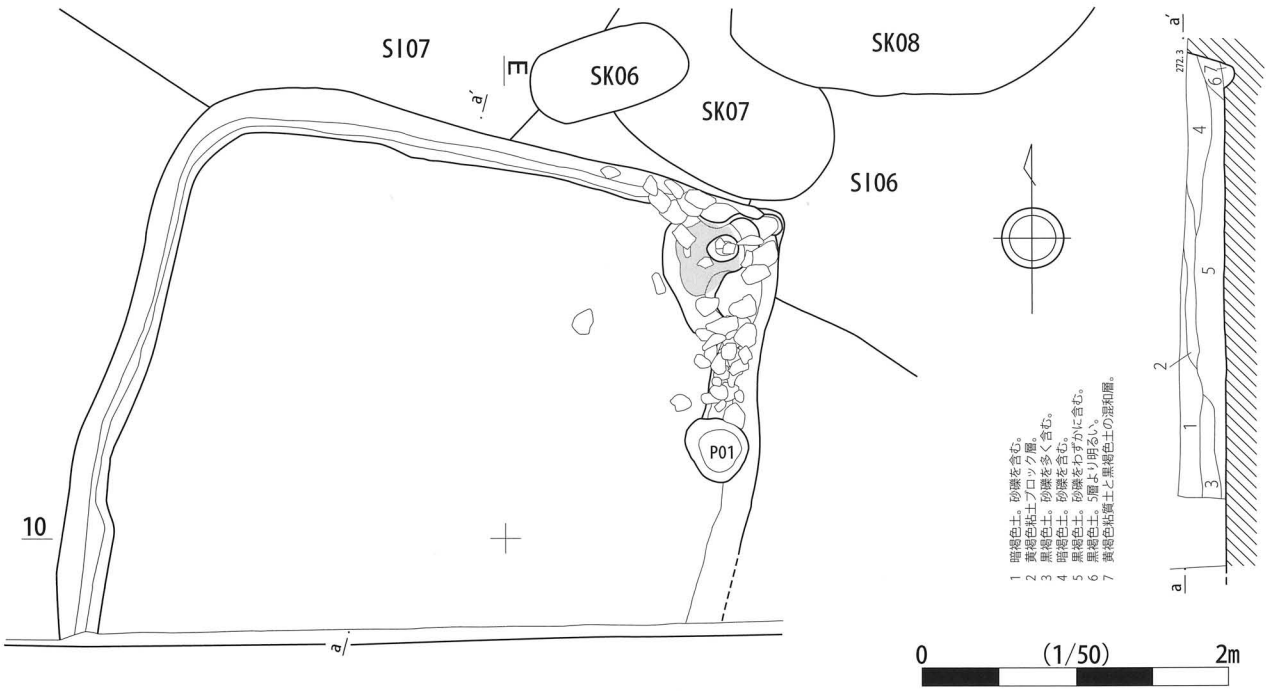
1 焼土ブロックと褐色土の混和層。
2 焼土層。上面に硬化面を有す。
3 赤灰色粘土ブロック。
4 明褐色土。焼土粒含む。

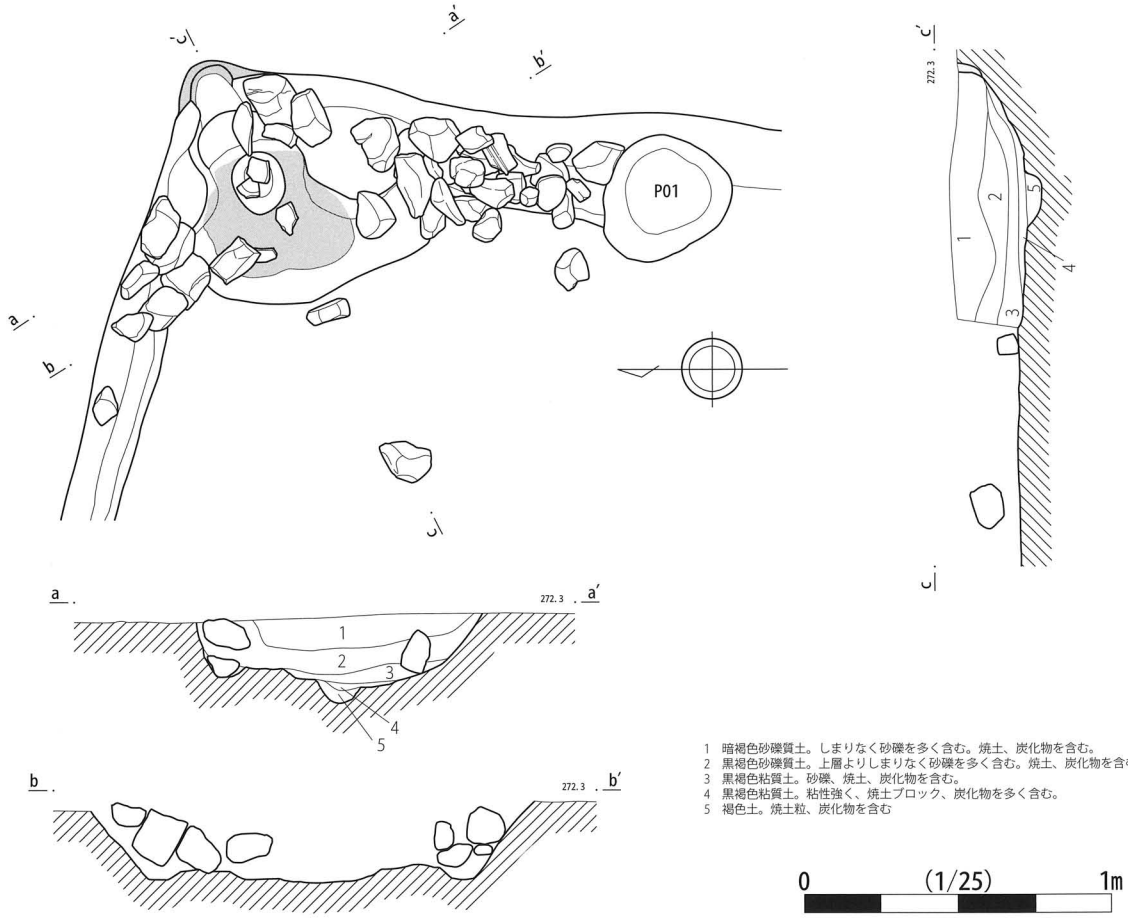
0 (1/25) 1m

第9図　SI03測量図

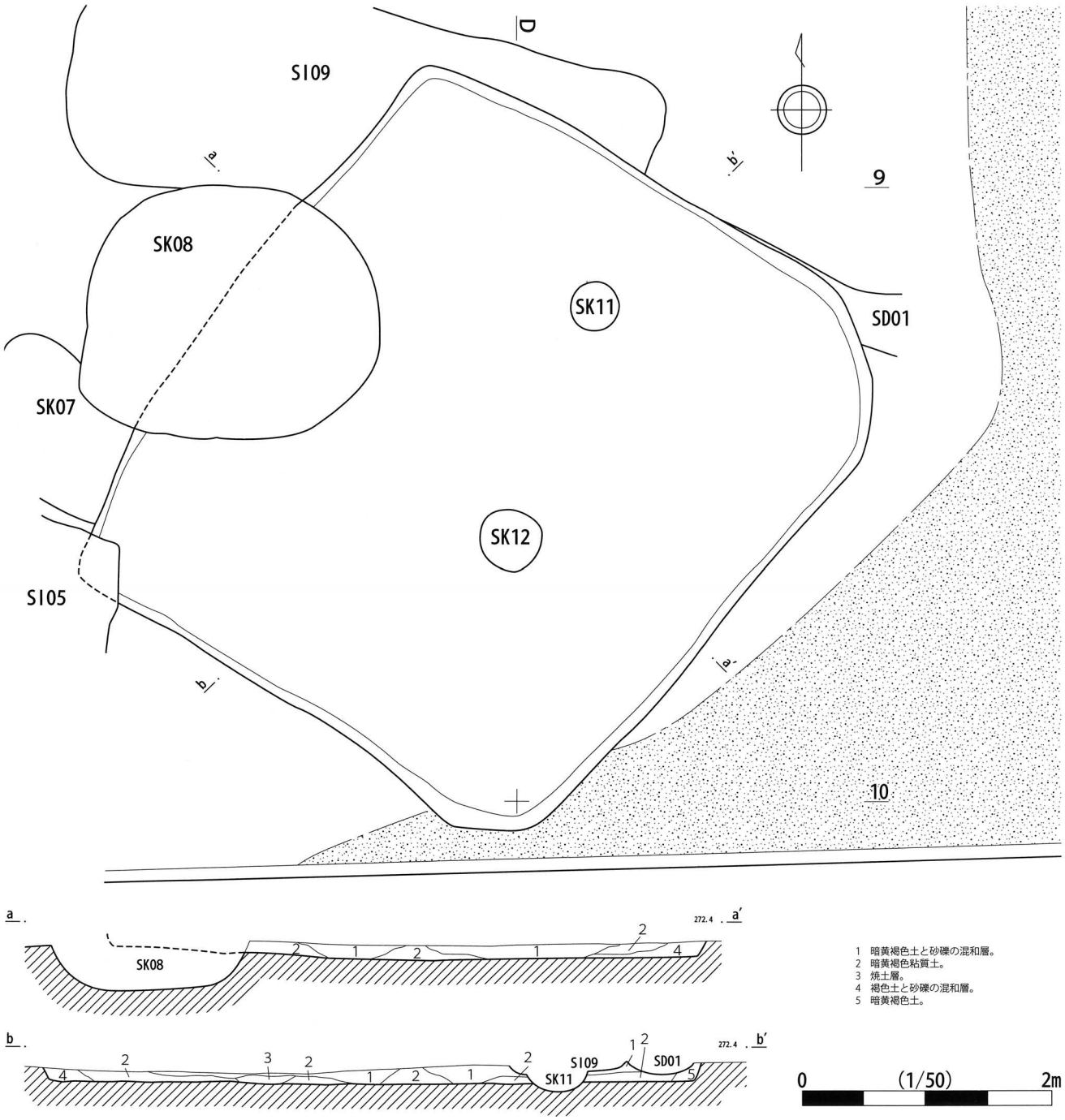


第10図　ＳＩ０４測量図

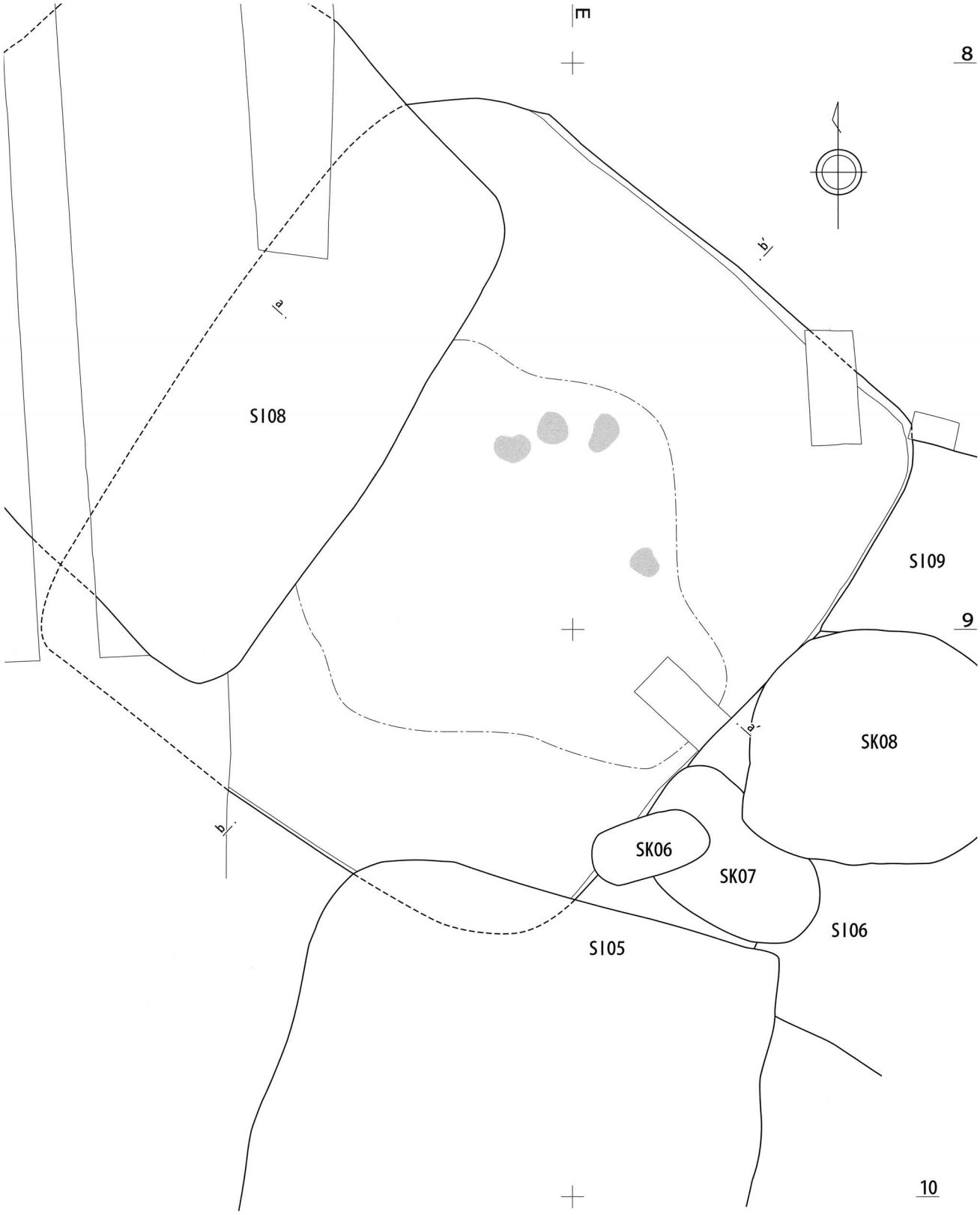


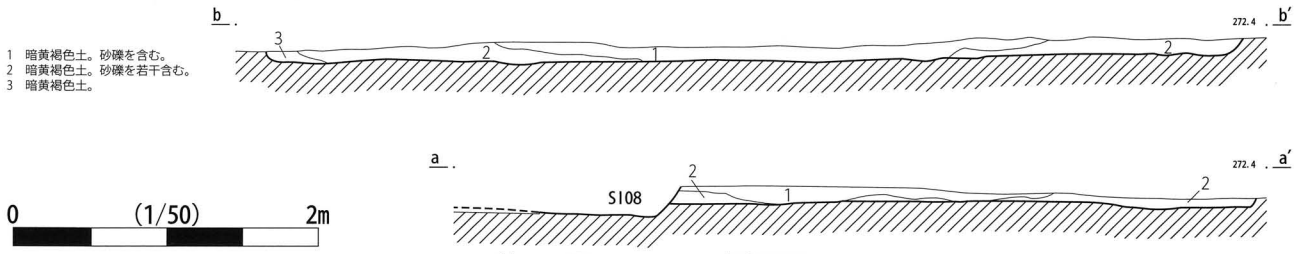


第11図　S I 0 5測量図

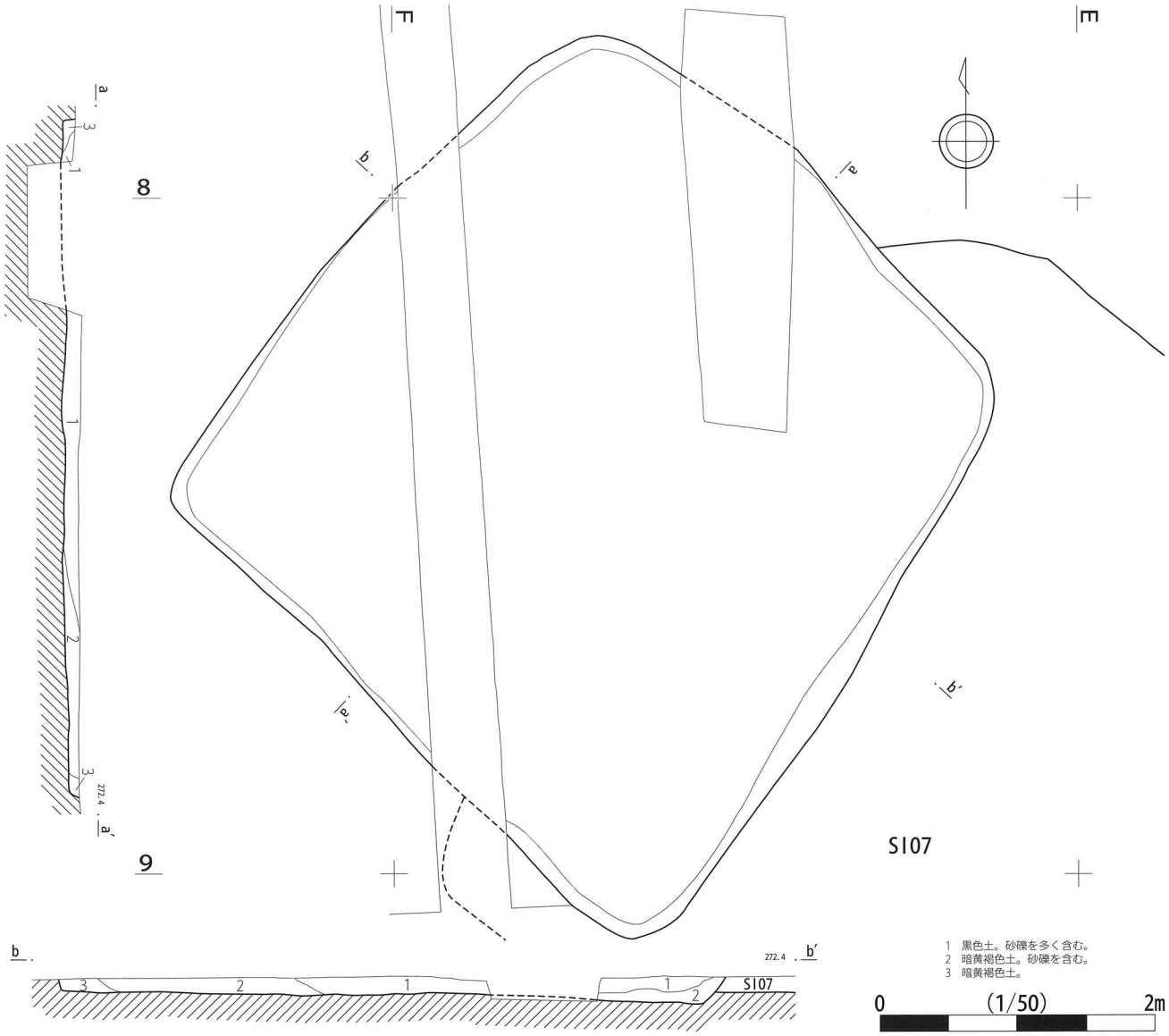


第12図　S106測量図

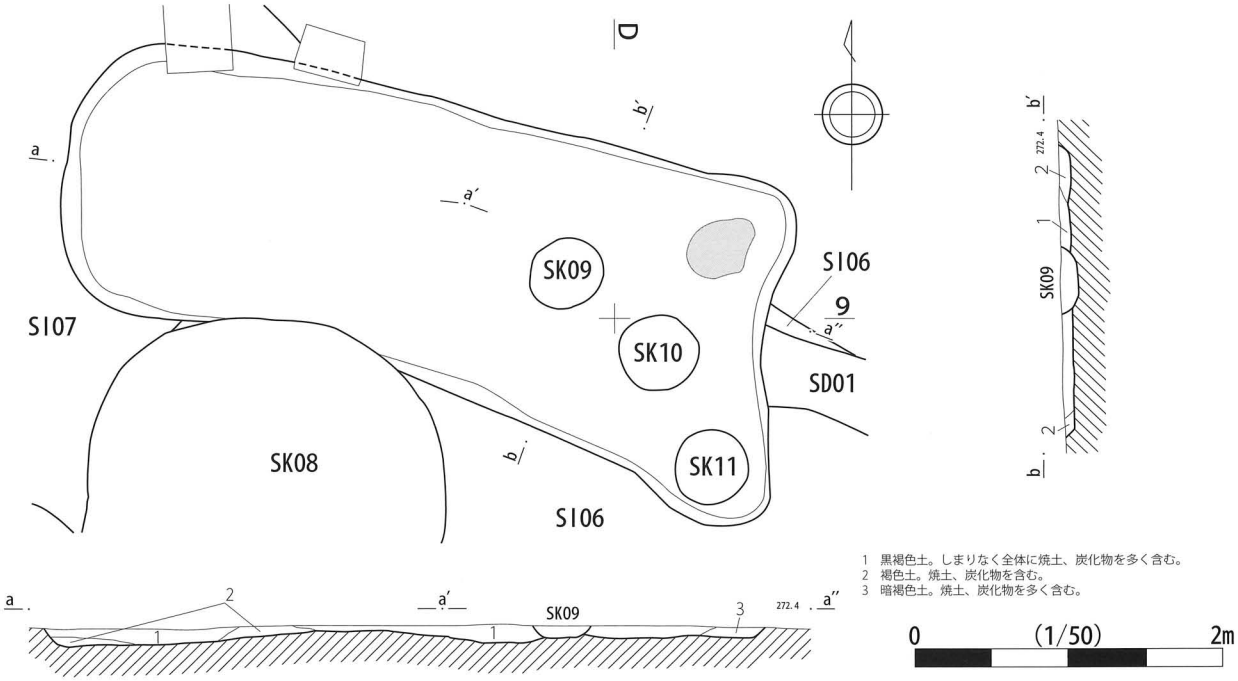




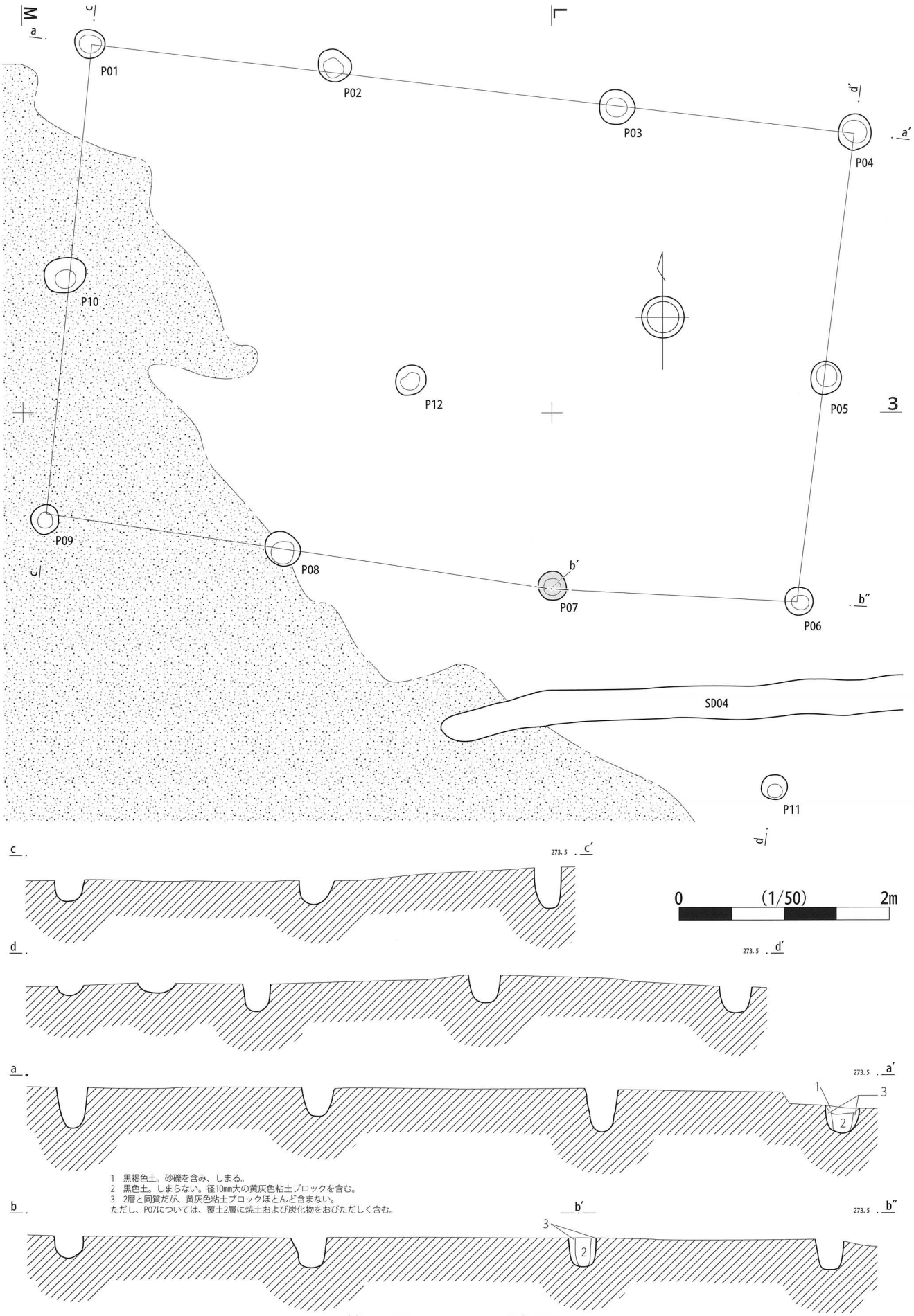
第13図　S107測量図



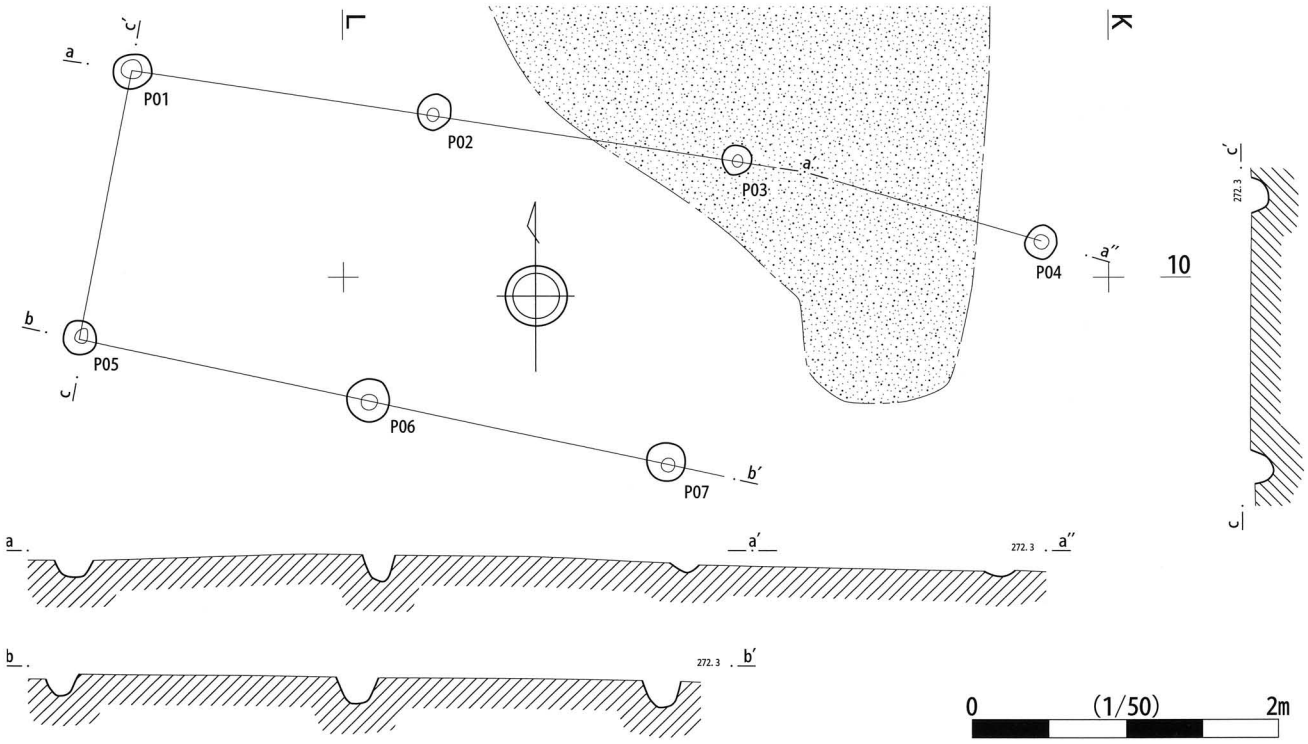
第14図　S I 0 8測量図



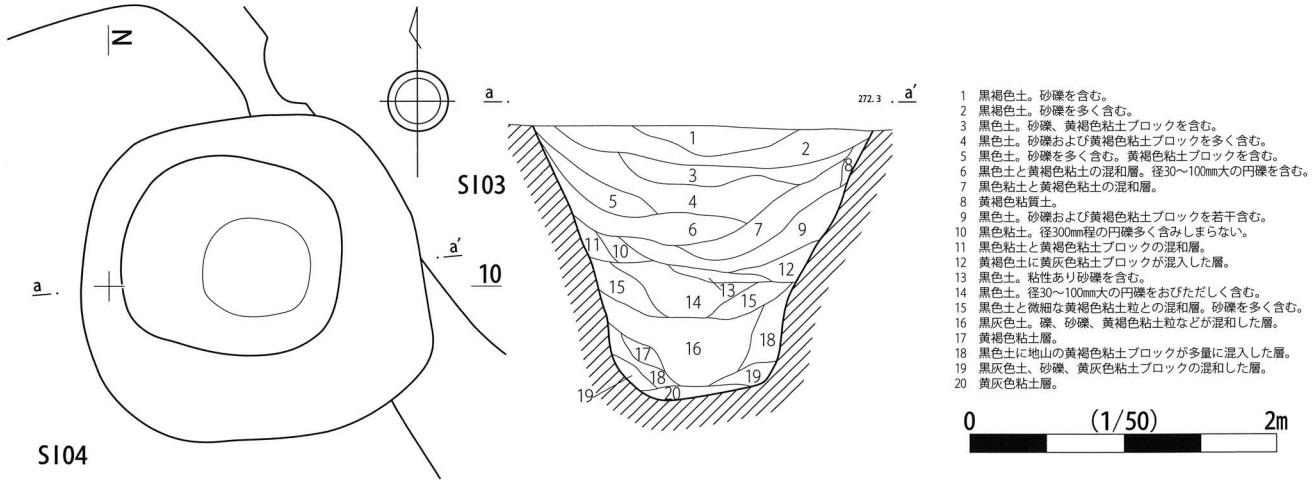
第15図　S I 0 9測量図



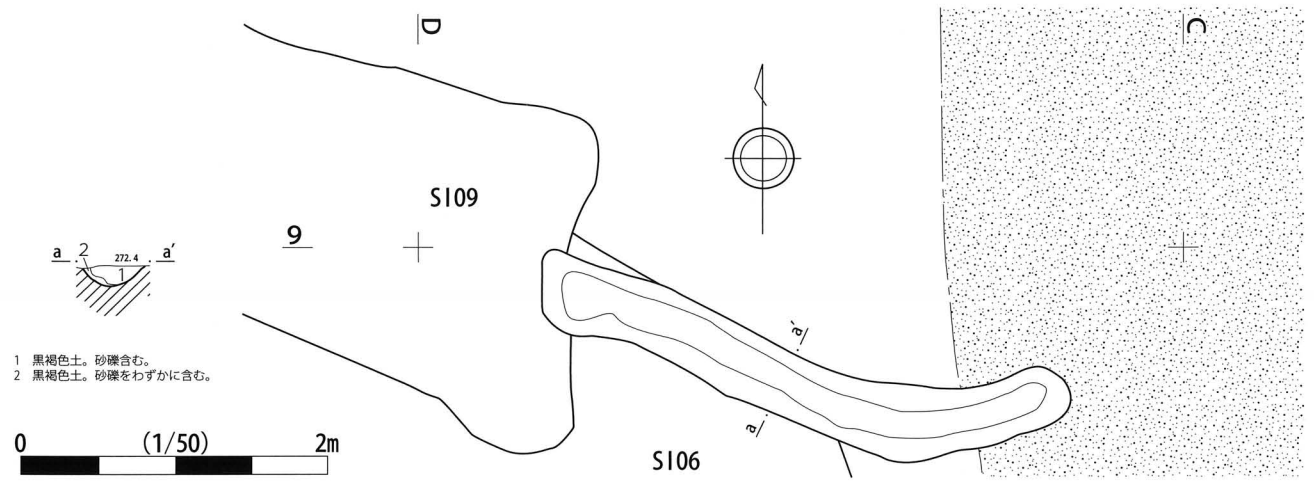
第16図　ＳＢ０１測量図



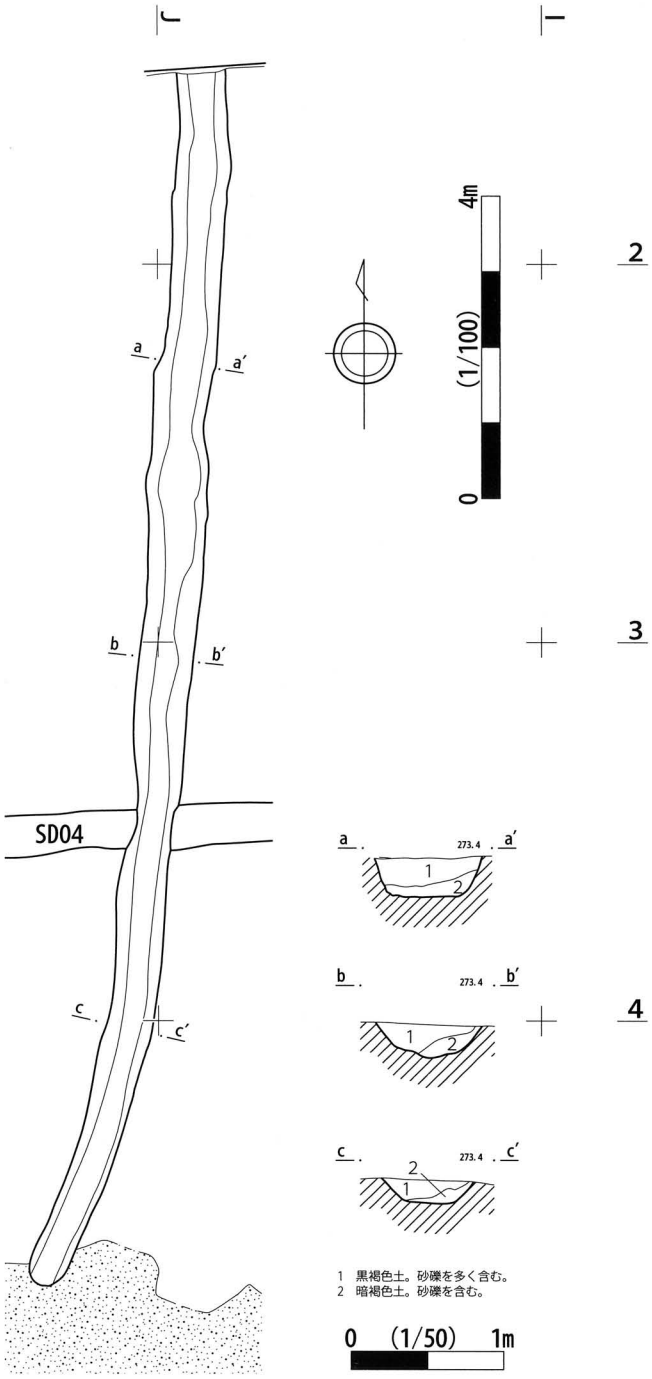
第17図　ＳＢ０２測量図



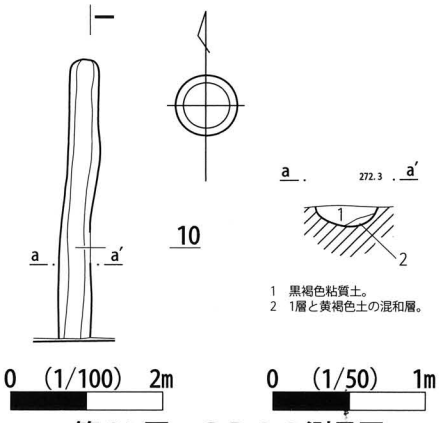
第18図　ＳＥ０１測量図



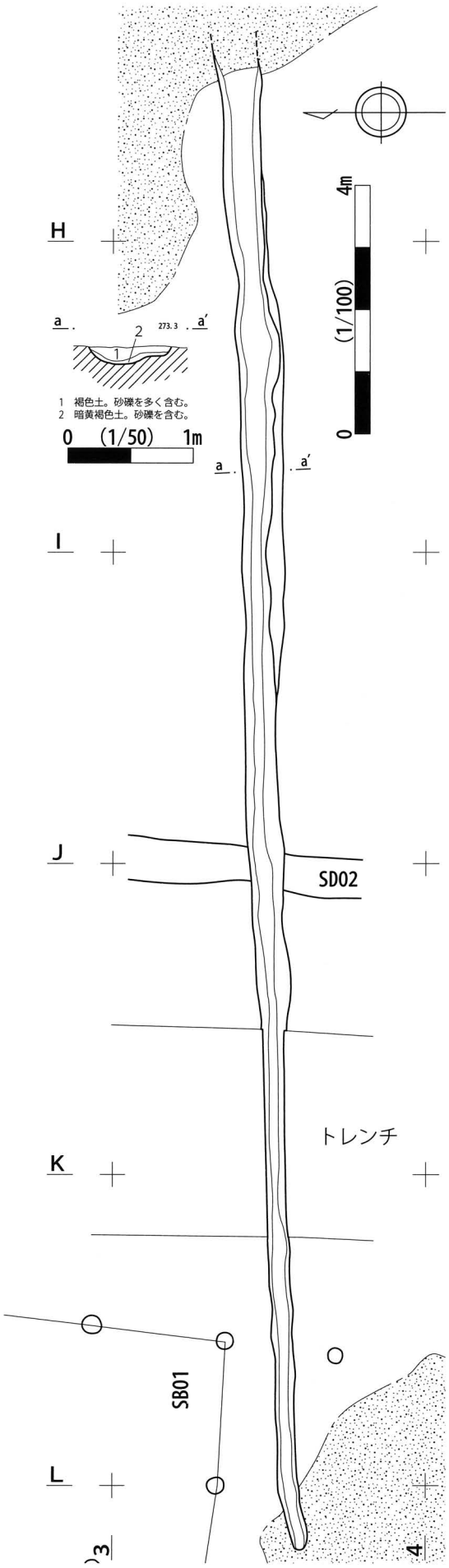
第19図　ＳＤ０１測量図



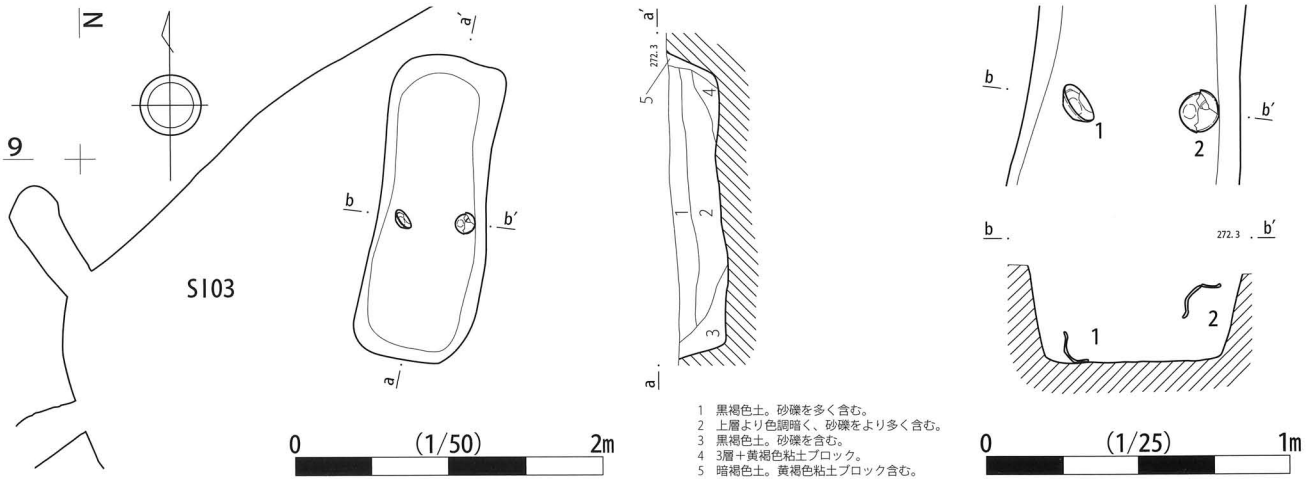
第20図　ＳＤ０２測量図



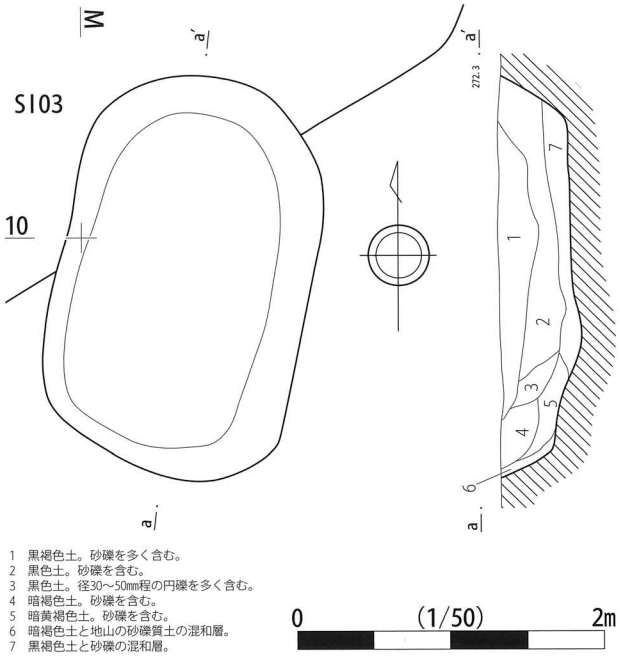
第21図　ＳＤ０３測量図



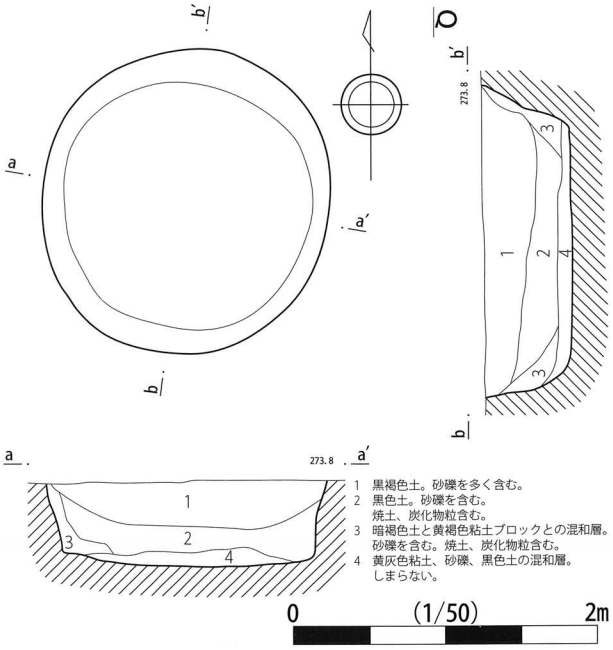
第22図　ＳＤ０４測量図



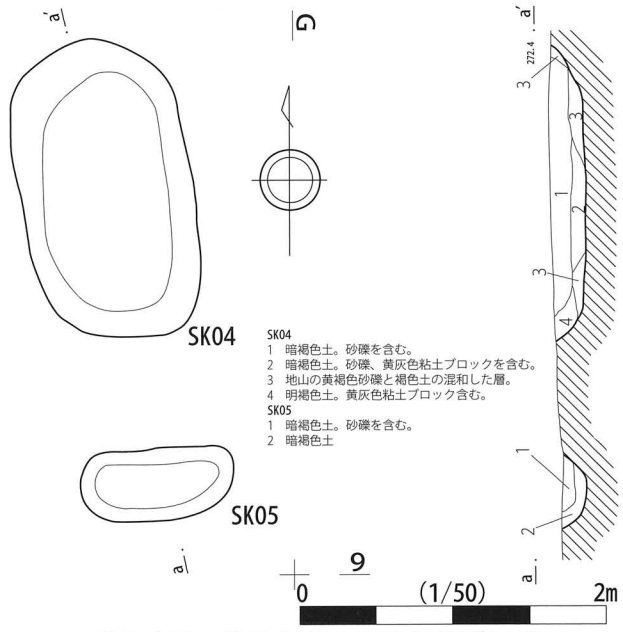
第23図　ＳＫ０１測量図



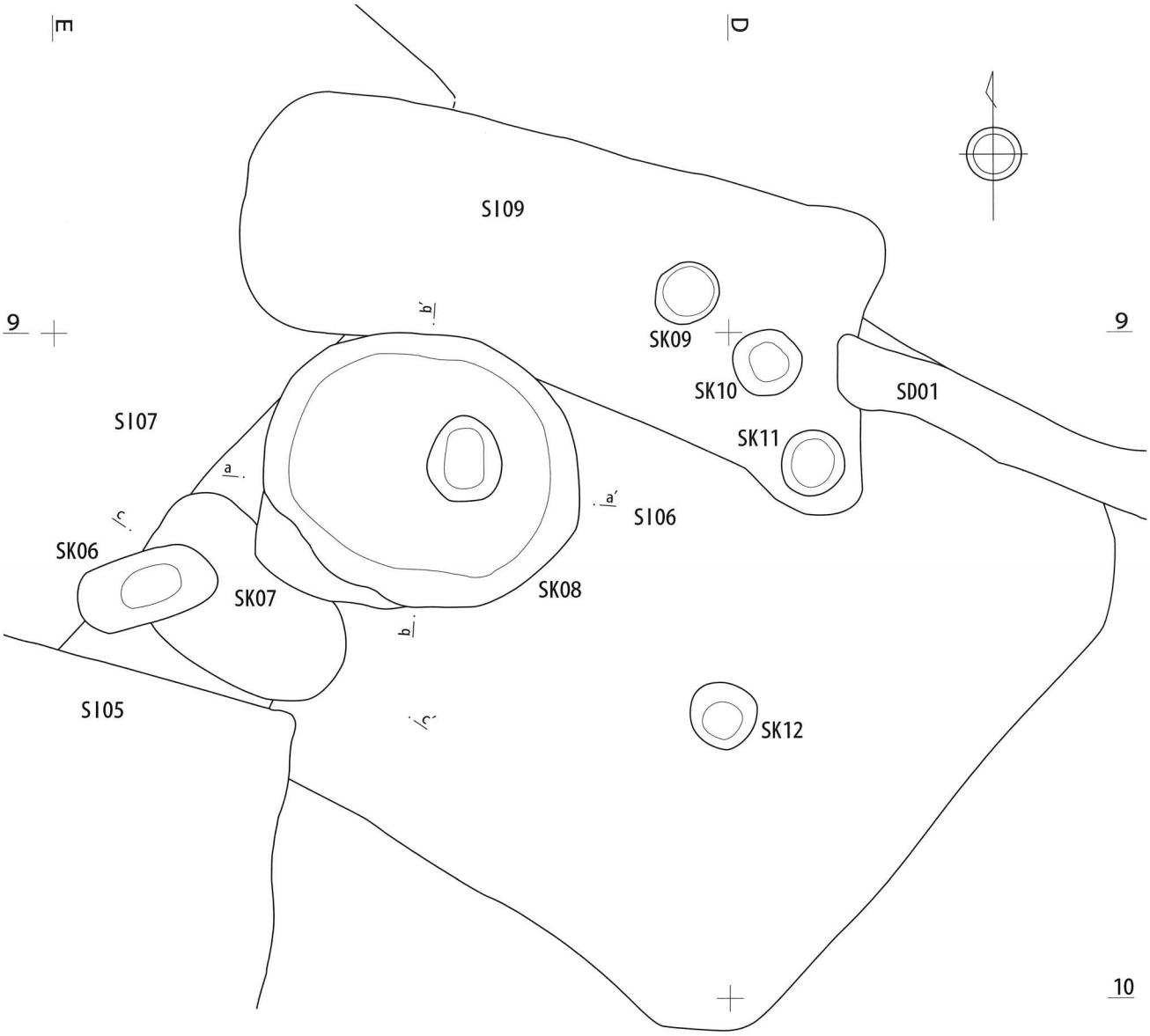
第24図　ＳＫ０２測量図

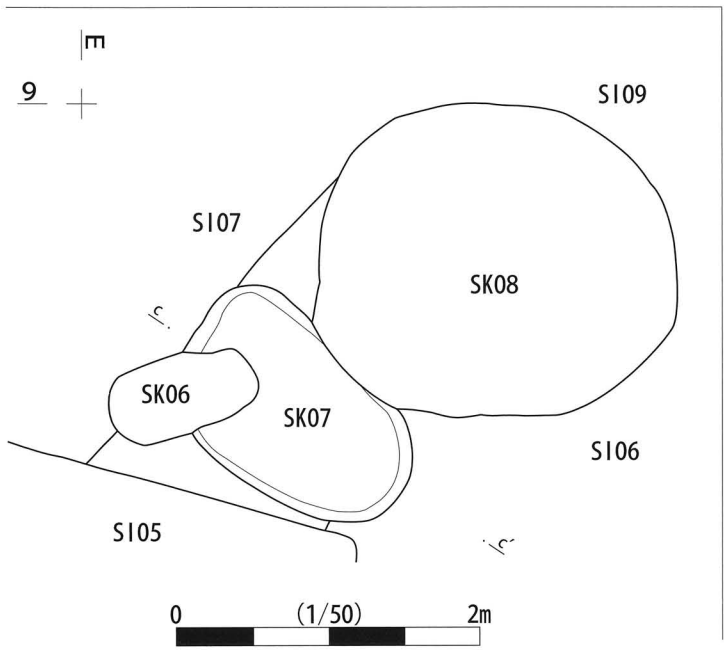


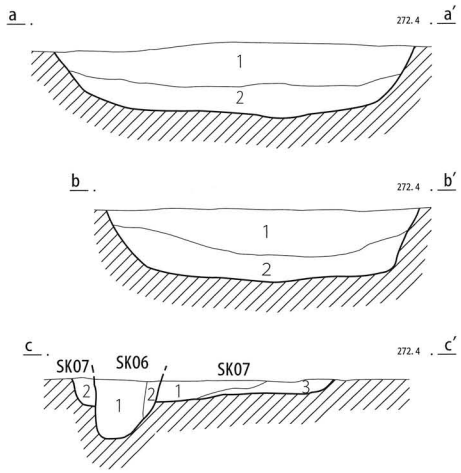
第25図　ＳＫ０３測量図



第26図　ＳＫ０４・ＳＫ０５測量図

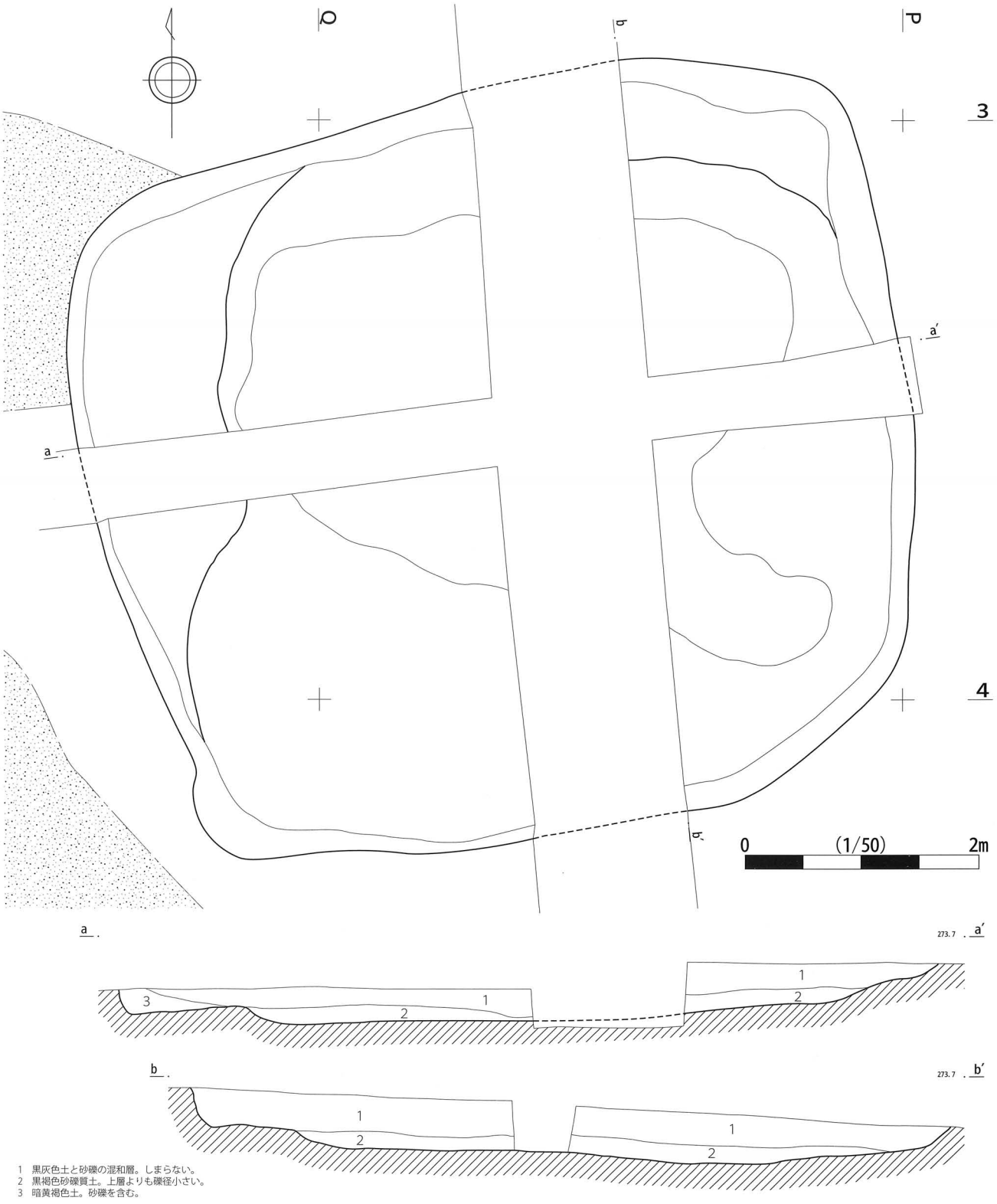




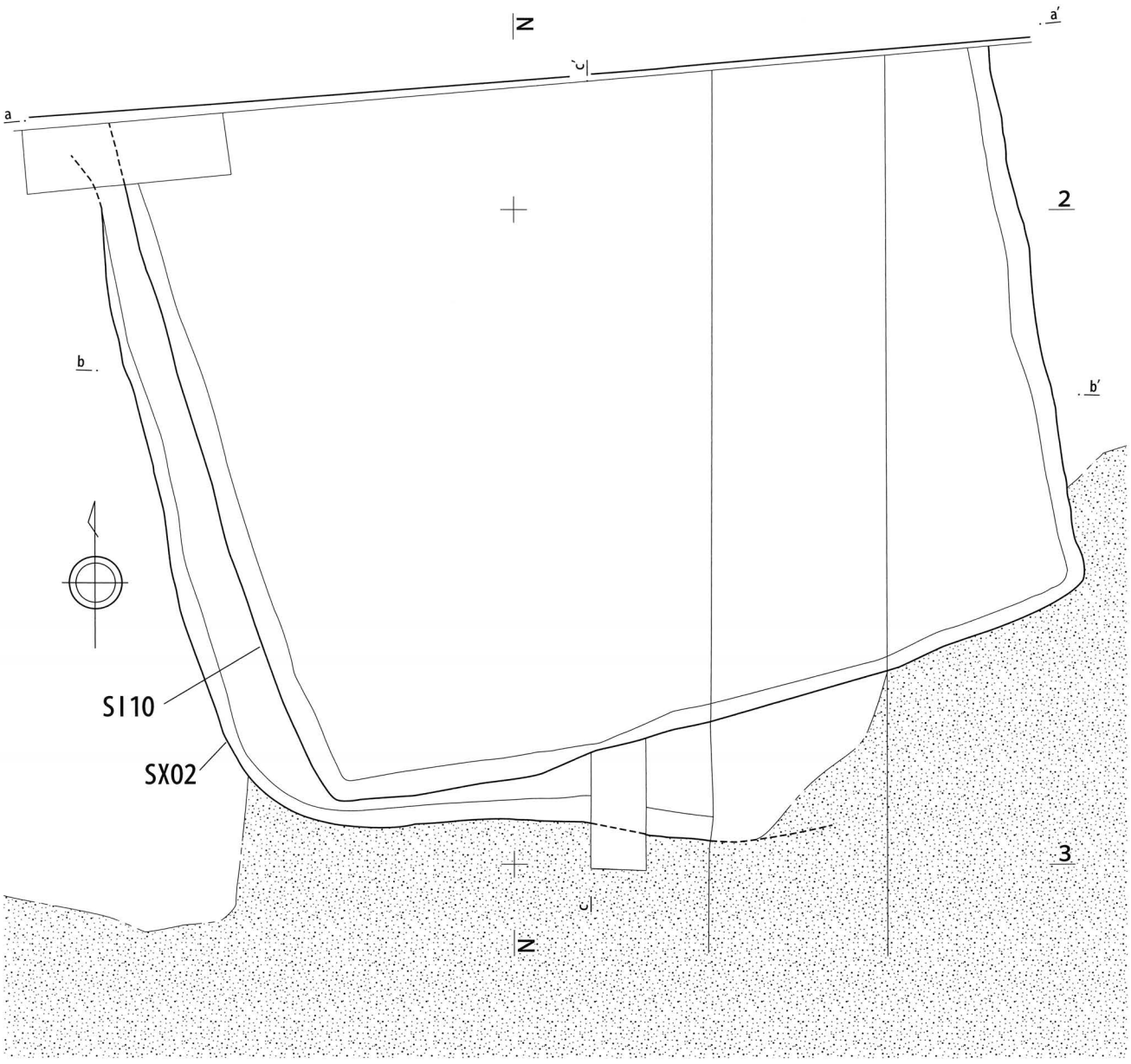


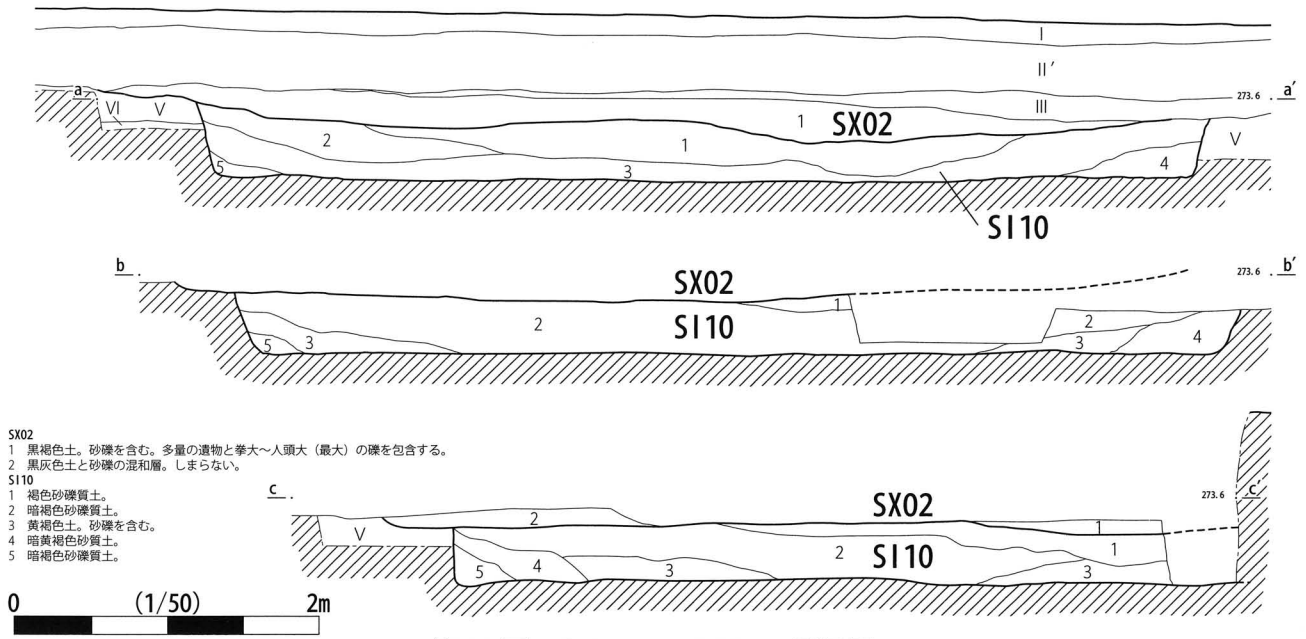
SK06
1　黒褐色土。焼土・炭化物を多く含む。
2　暗黄褐色土。
SK07
1　暗褐色土。焼土・炭化物、砂礫を含む。
2　暗黄褐色土。焼土・炭化物をわずかに含む。
3　褐色土。
SK08
1　黒褐色土。砂礫を多く含む。
2　黒色土。砂礫を含む。

第27図　ＳＫ０６～ＳＫ１２測量図

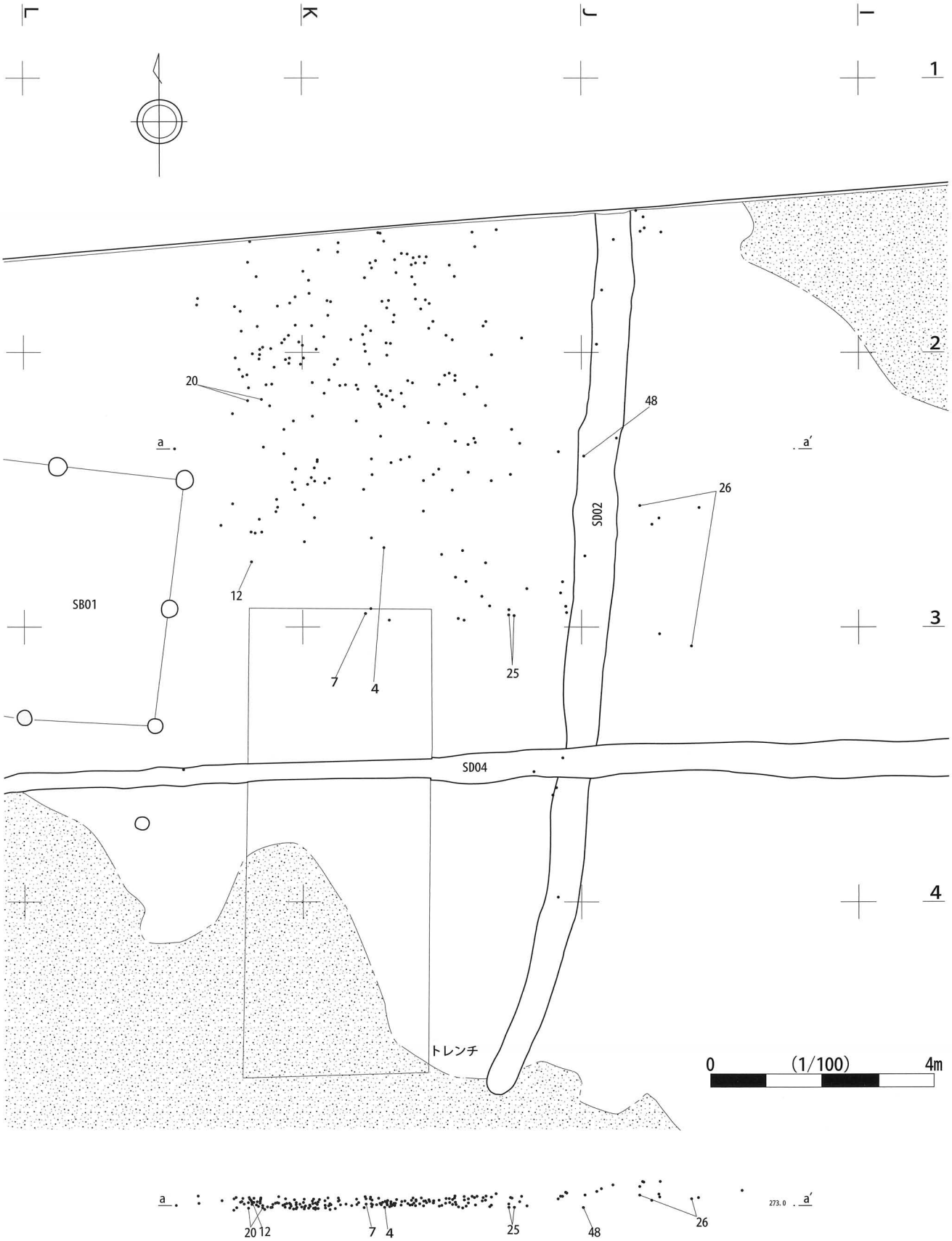


第28図　ＳＸ０１測量図

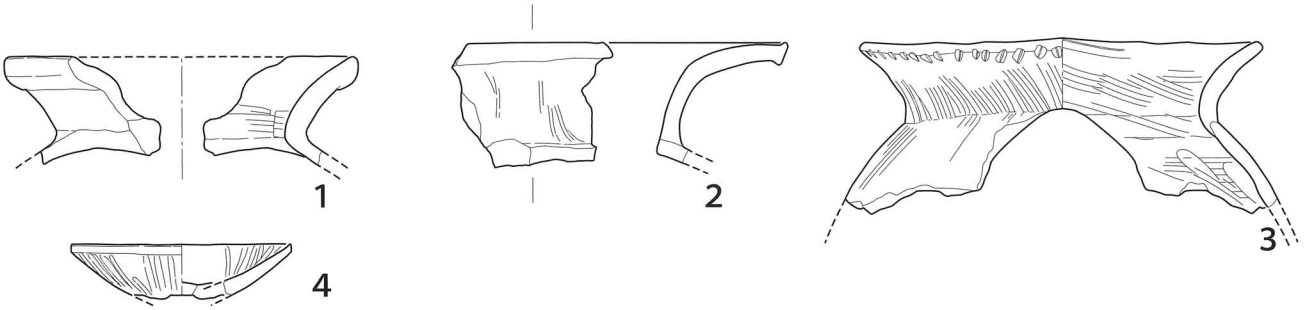




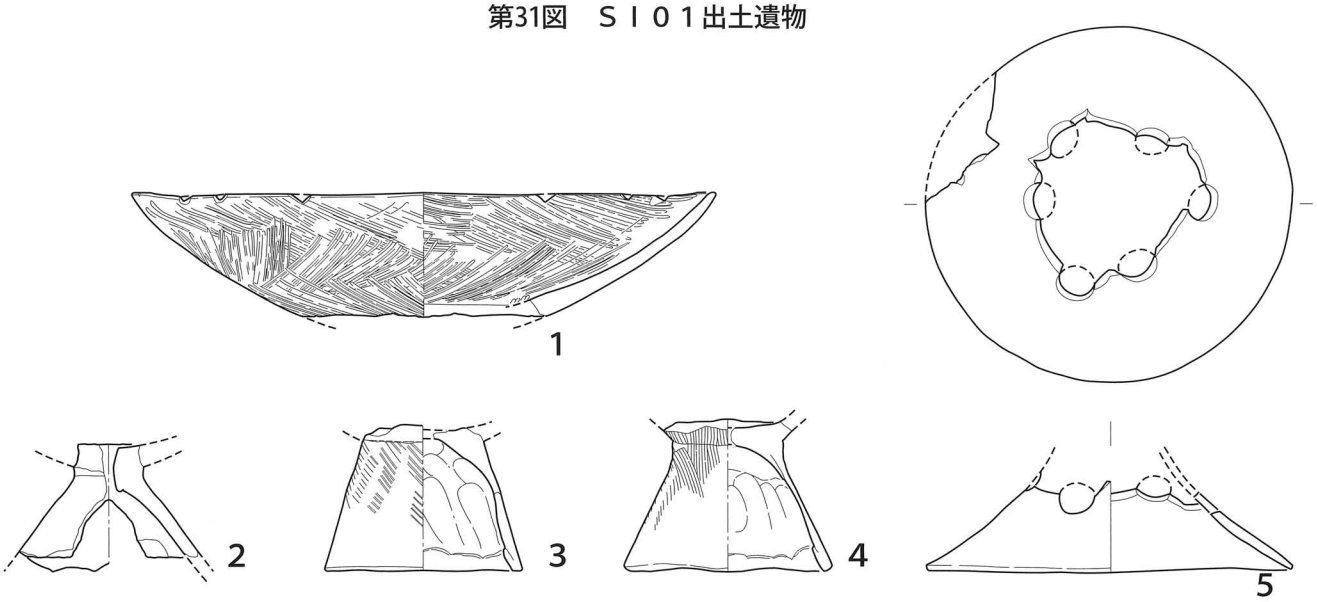
第29図　ＳＩ１０・ＳＸ０２測量図



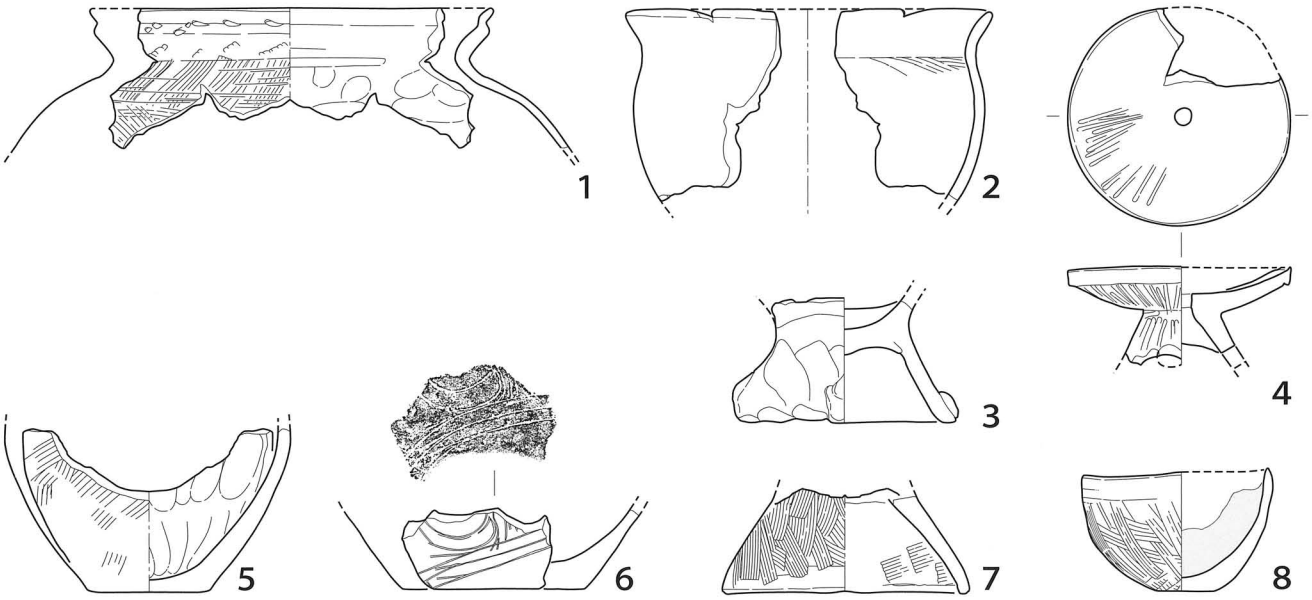
第30図　ＰＣ０１測量図



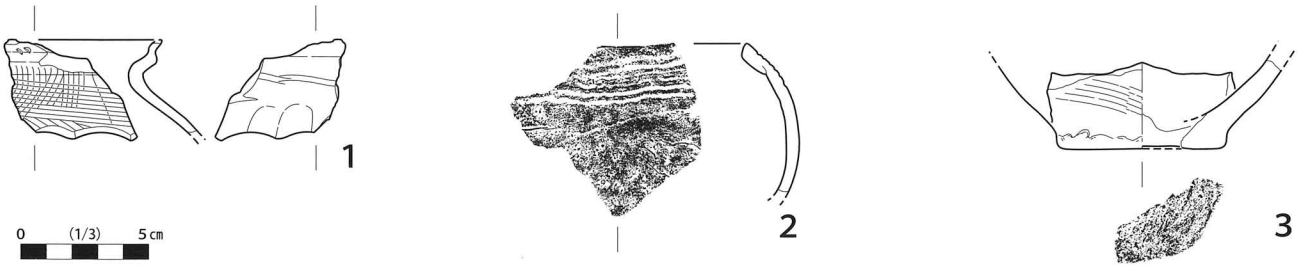
第31図　ＳＩ０１出土遺物



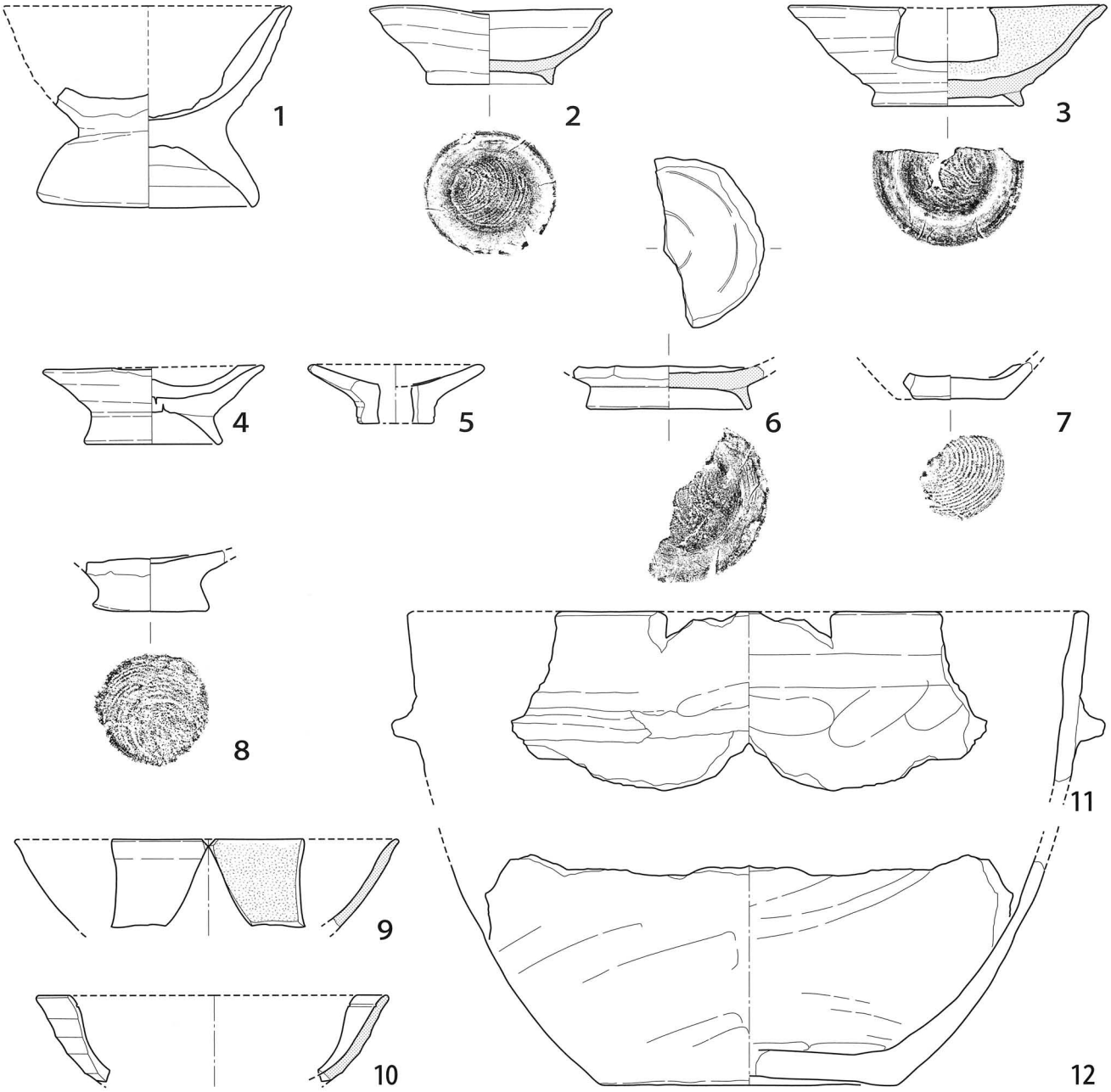
第32図　ＳＩ０２出土遺物



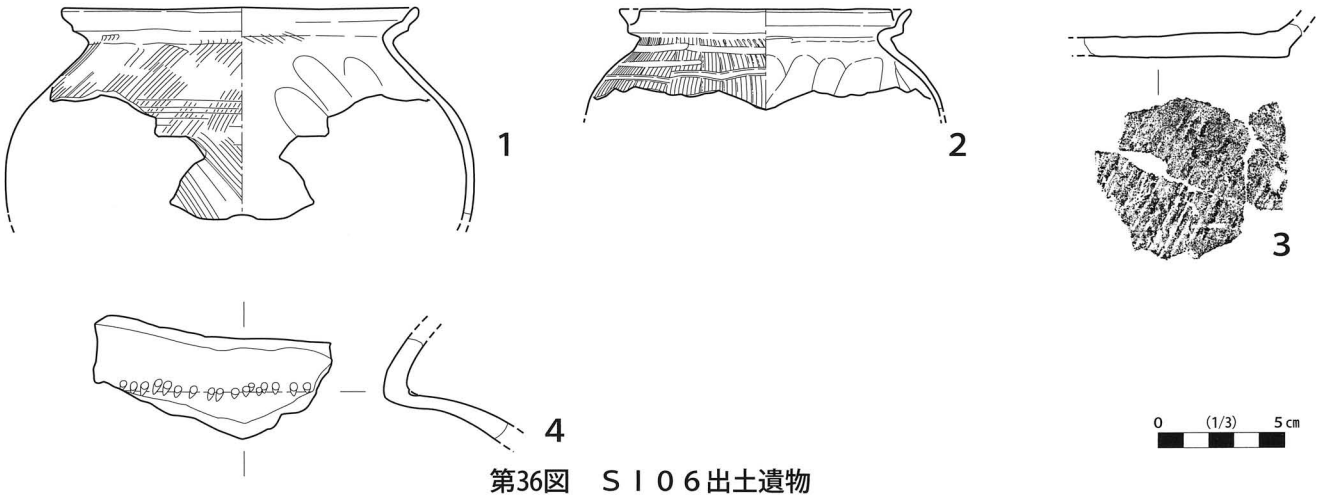
第33図　ＳＩ０３出土遺物



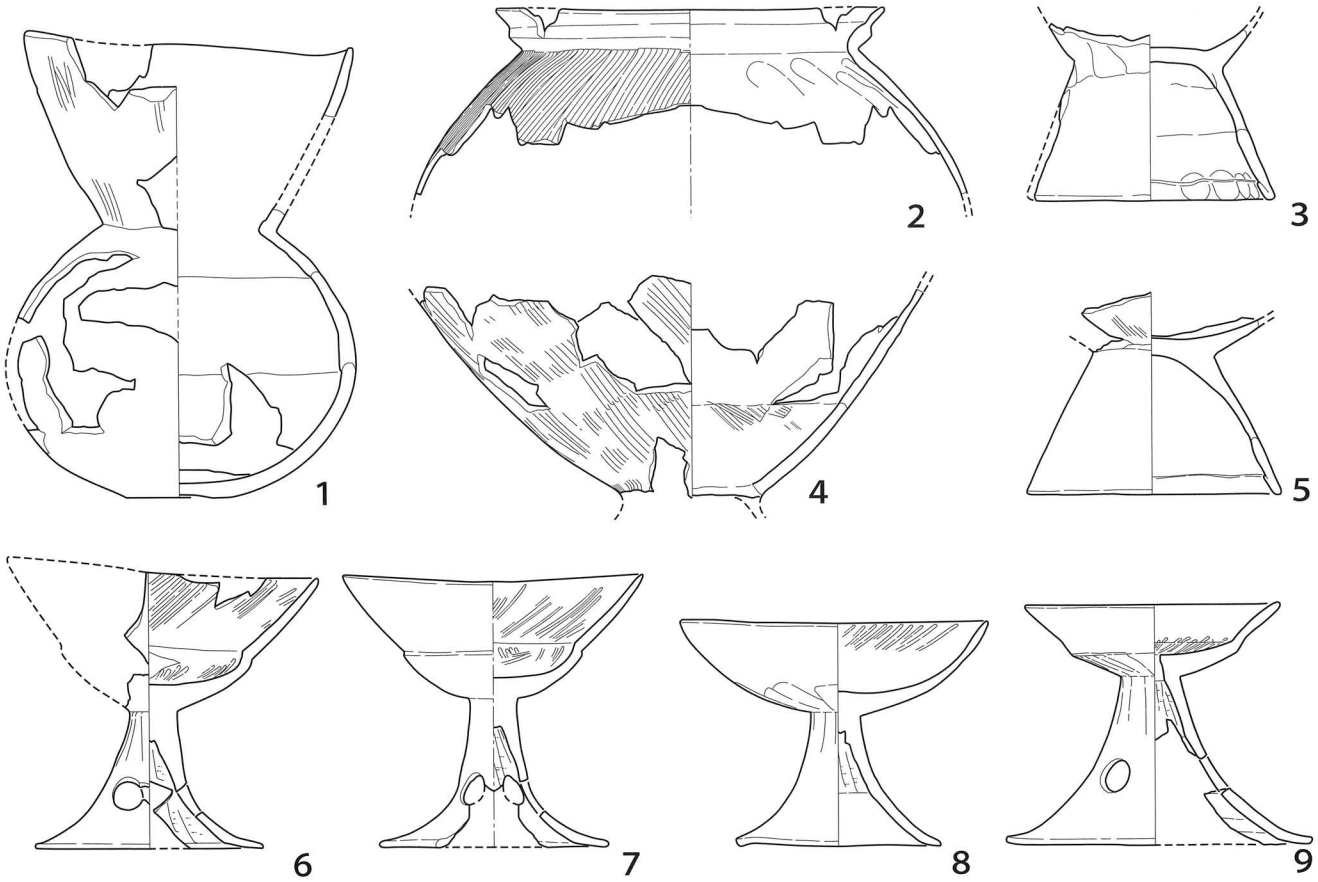
第34図　ＳＩ０４出土遺物



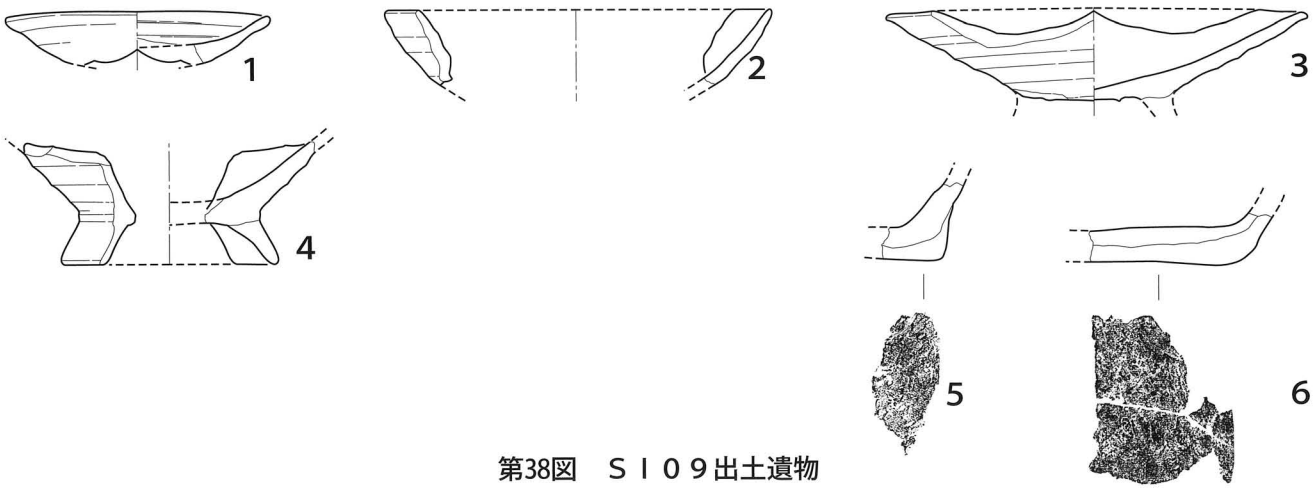
第35図　ＳＩ０５出土遺物



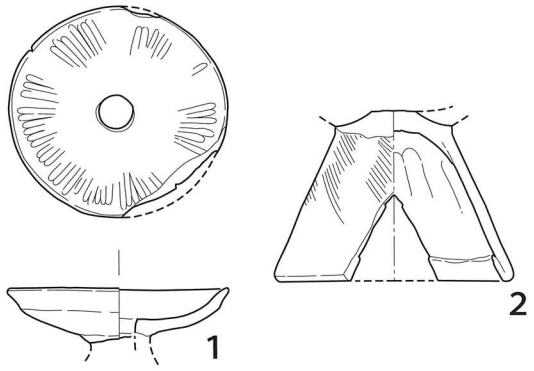
第36図　ＳＩ０６出土遺物



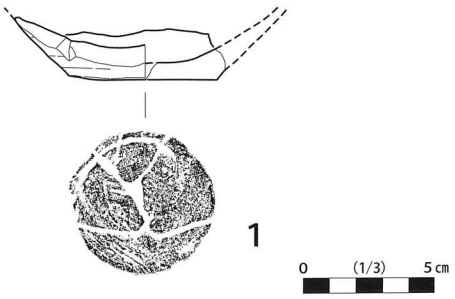
第37図　ＳＩ０８出土遺物



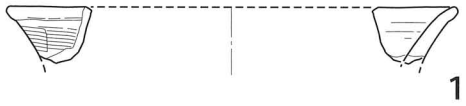
第38図　ＳＩ０９出土遺物



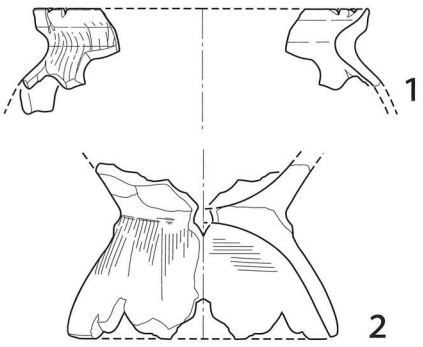
第39図　ＳＩ１０出土遺物



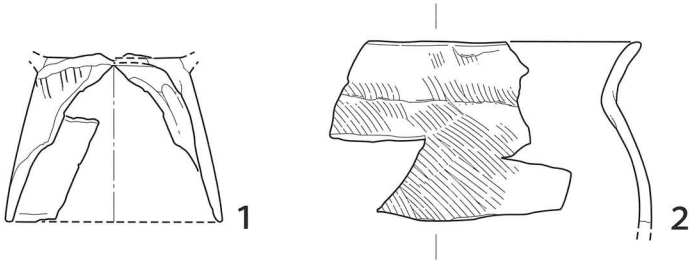
第40図　ＳＥ０１出土遺物



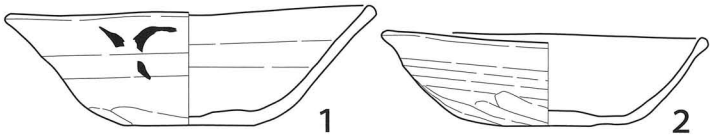
第41図　ＳＤ０２出土遺物



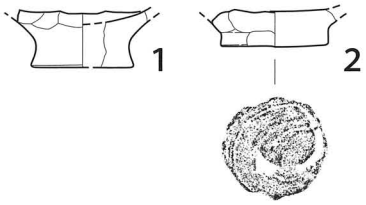
第42図　ＳＤ０３出土遺物



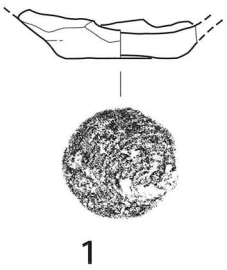
第43図　ＳＤ０４出土遺物



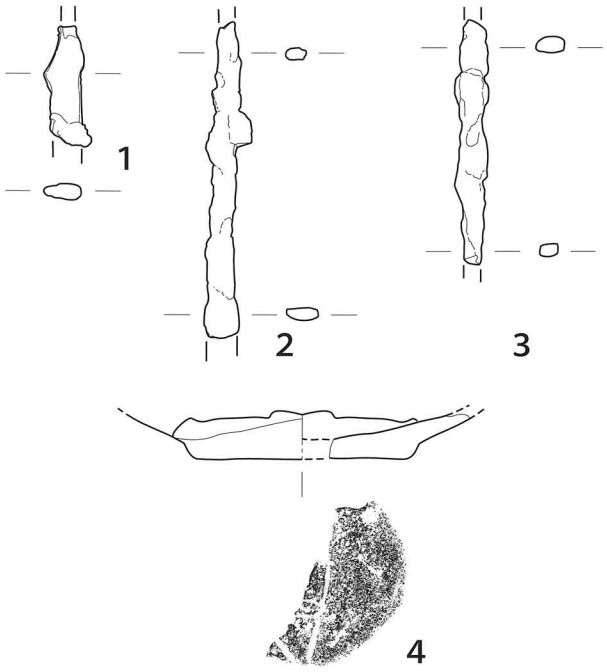
第44図　ＳＫ０１出土遺物



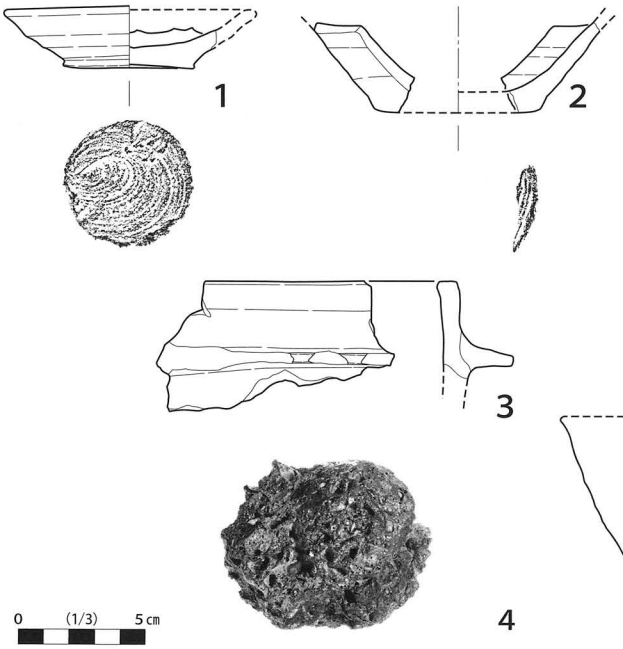
第45図　ＳＫ０２出土遺物

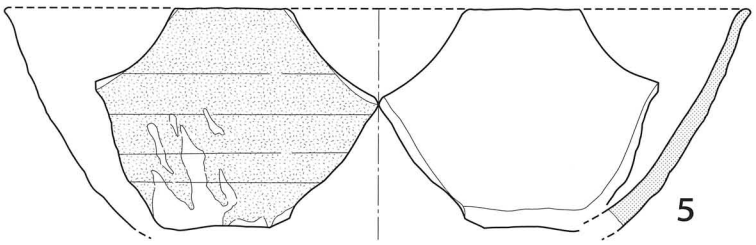


第46図　ＳＫ０３出土遺物

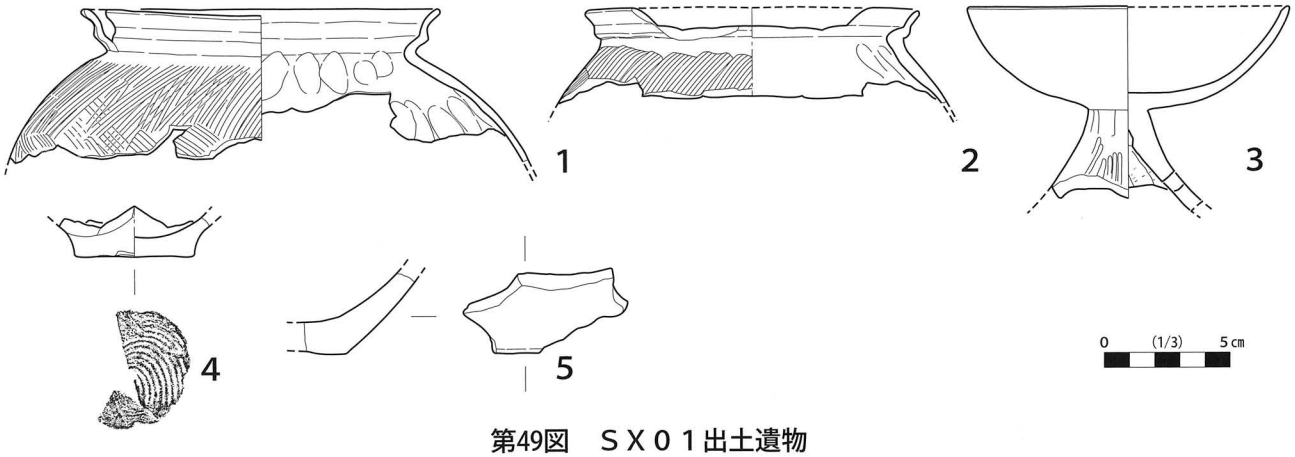


第47図　ＳＫ０４出土遺物

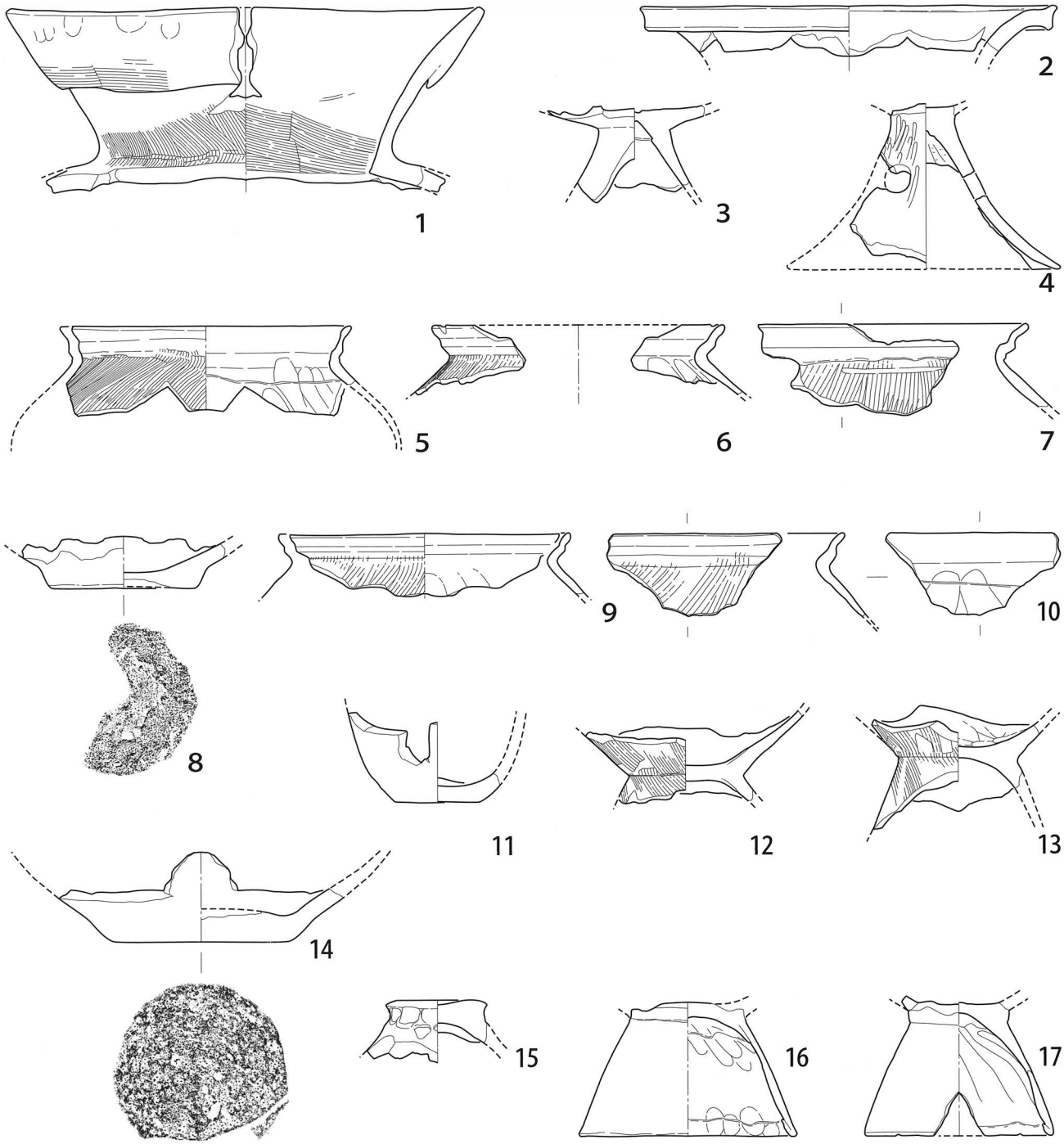




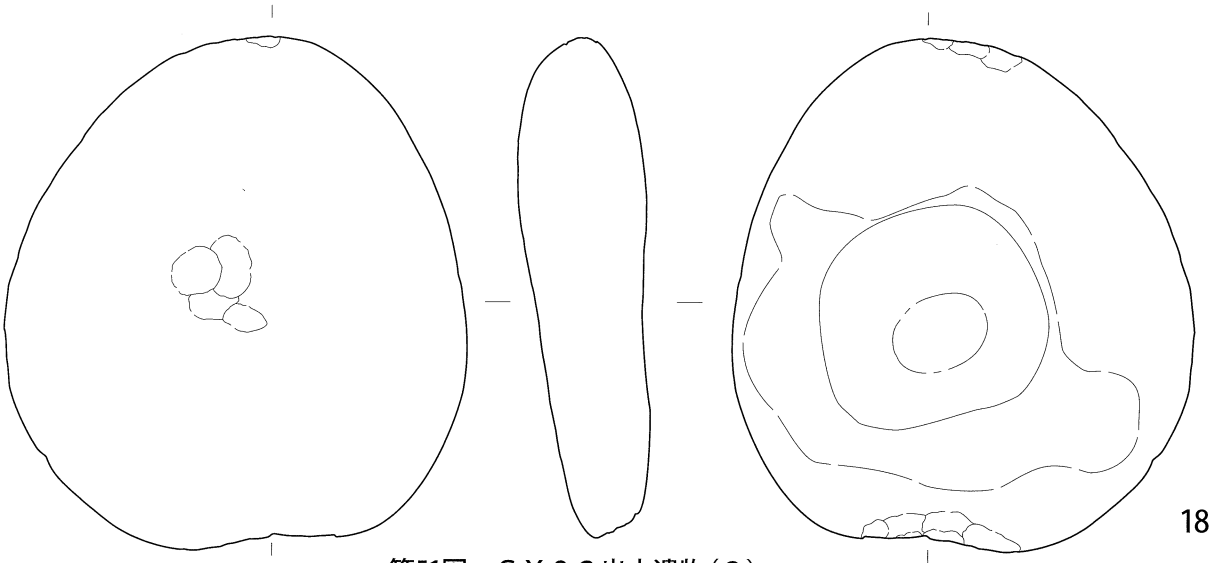
第48図　ＳＫ０８出土遺物



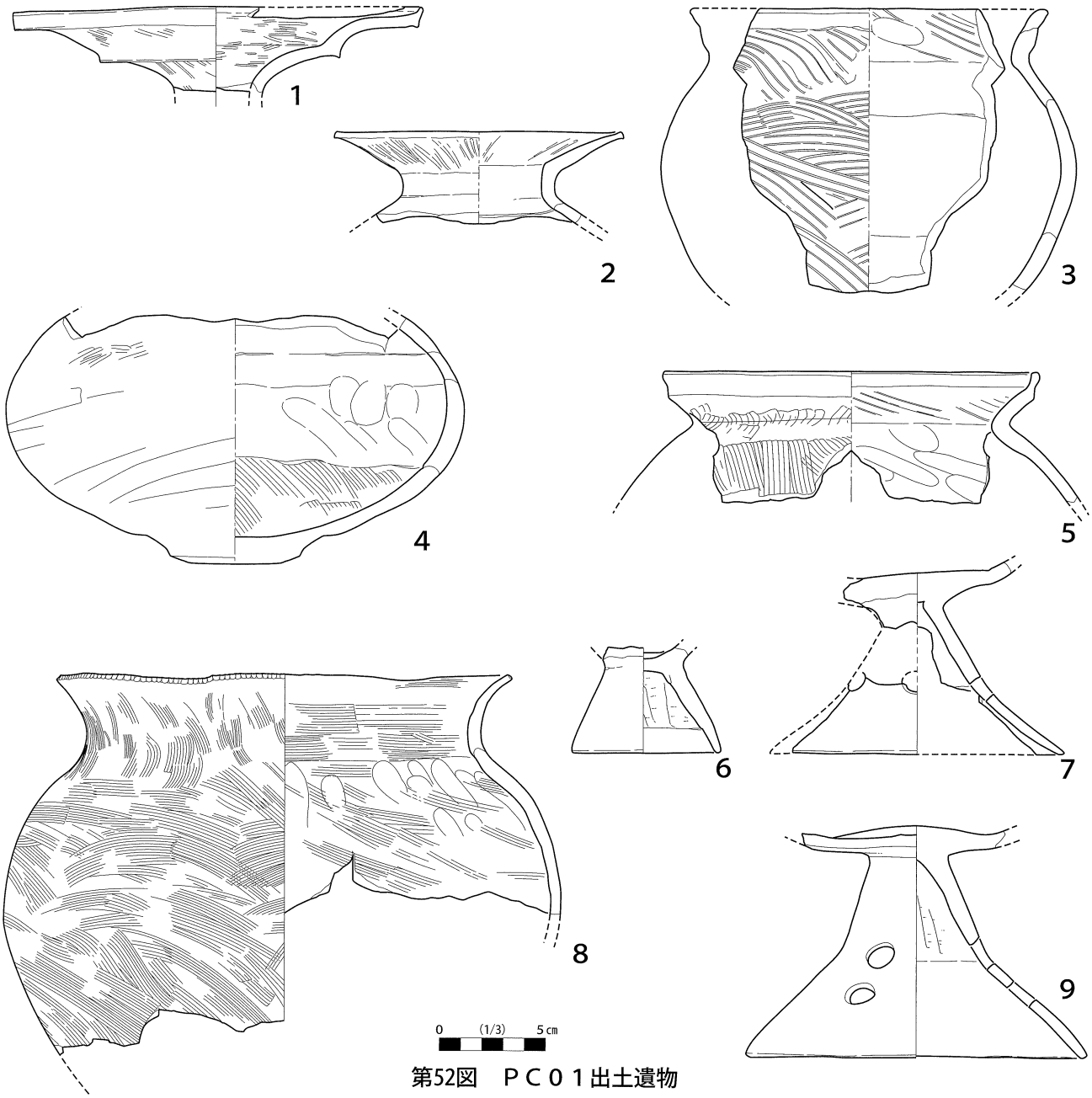
第49図　ＳＸ０１出土遺物



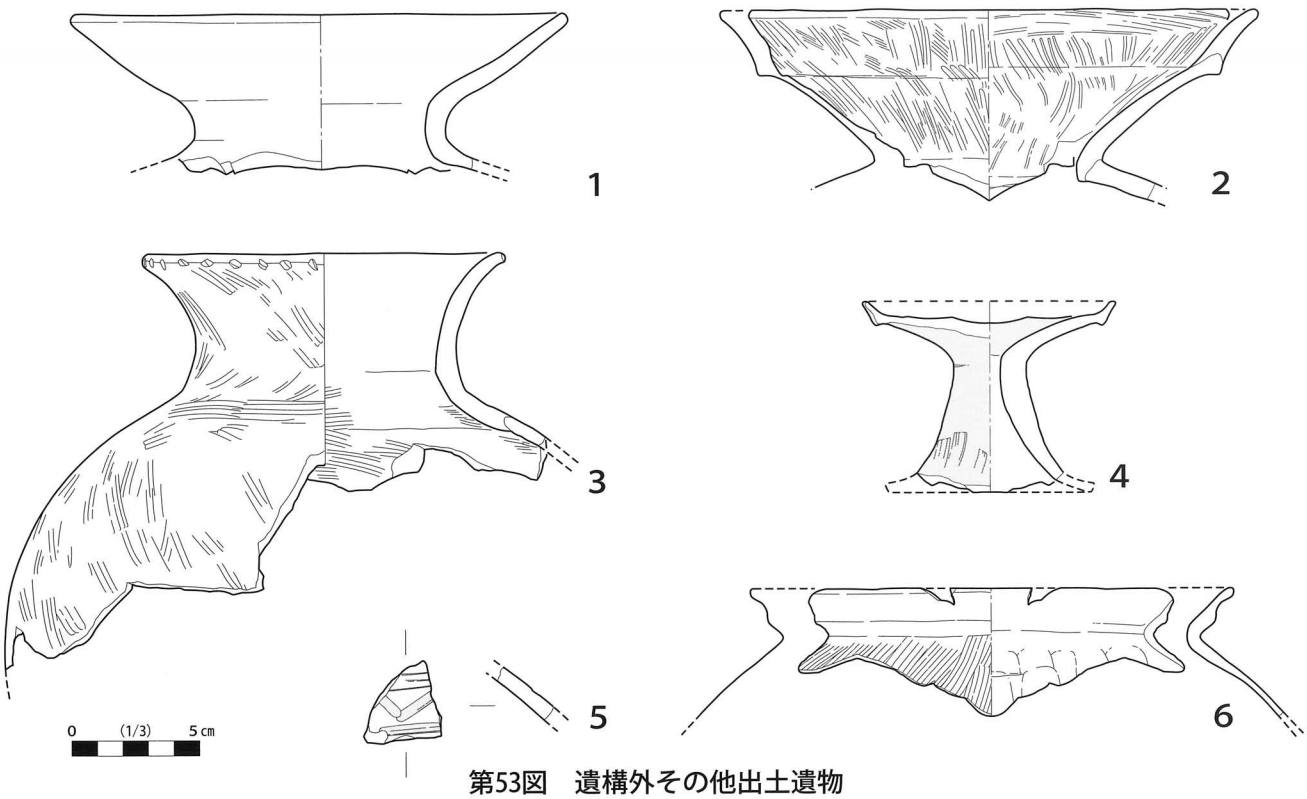
第50図　ＳＸ０２出土遺物（１）



第51図　ＳＸ０２出土遺物（２）



第52図　ＰＣ０１出土遺物



第53図　遺構外その他出土遺物

遺構名	番号	種別	器種別	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	整形その他
SI01	1	土師器	壺	(13.4)	-	(4.3)	口縁部破片	緻密。赤色粒子を多く含む。	良好	明黄褐色	
SI01	2	土師器	壺	-	-	(4.9)	口縁部破片	緻密。砂粒を多く含む。赤色粒子を含む。	やや軟	橙色	頸部外面タテミガキ調整。
SI01	3	土師器	壺	(15.3)	-	(7.0)	口縁部の 1/3	粗。赤色粒子含む。砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SI01	4	土師器	器台	(8.5)	-	(2.1)	杯部の 1/3	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	内外面に放射状のミガキ。
SI02	1	土師器	高杯	(23.0)	-	(4.9)	杯部の 1/2	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	にぶい黄橙色	内外面とも羽状のミガキ整形。
SI02	2	土師器	器台	-	-	(5.0)	接合部～脚部上半の 1/3	やや粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	赤褐色	
SI02	3	土師器	甕	-	(7.4)	(5.8)	脚部の 1/2	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SI02	4	土師器	甕	-	(7.7)	(6.0)	脚部の 1/2	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	
SI02	5	土師器	高杯	-	14.2	(3.6)	脚部下半完存	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	やや軟	橙色	
SI03	1	土師器	甕	(15.4)	-	(5.5)	口縁部の 1/4	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい橙色	口縁部に一定間隔で刺突。
SI03	2	土師器	甕	(13.9)	-	(7.5)	口～体部上半の 1/4	緻密。砂粒を多く含む。赤色粒子を含む。	やや軟	橙色	器壁の磨耗激しく調整等の確認が困難。
SI03	3	土師器	甕	-	8.0	(5.0)	脚部ほぼ完存	粗。微細な砂粒を多く含む。	良好	明赤褐色	成形後底部の薄さを補うため脚部端から内面に粘土塊を付加している。
SI03	4	土師器	器台	8.7	-	(3.9)	脚部上半～杯部の 3/4	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	にぶい黄橙色	
SI03	5	土師器	壺		(4.7)	(6.5)	底～体下半部完存	やや粗。赤色粒子を含む。砂粒を多く含む。	良好	橙色	底部未調整。
SI03	6	土師器	壺	-	(7.0)	(3.2)	底部破片	やや粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	灰黄褐色	外面に線刻。底部未調整。

第４表　遺物観察表（１）

遺構名	番号	種別	器種別	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	整形その他
SI03	7	土師器	甕	-	(9.4)	(4.1)	脚部の 1/4	緻密。赤色粒子、微細な砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SI03	8	土師器	小型壺	7.2	2.3	4.9	口縁部の 1/3 を欠く	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	不整方向ハケ後口縁～内面をナデ調整。内面黒色処理。底部未調整。
SI04	1	土師器	壺	-	-	(5.0)	口縁部破片	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	口縁部に刺突。
SI04	2	土師器	壺	-	-	(5.8)	口縁部破片	緻密。砂粒・金色雲母を含む。	良好	明黄褐色	
SI04	3	土師器	壺	-	(6.2)	(3.5)	底部の 1/4	緻密。砂粒、Φ 5mm大の大粒の砂粒を含む。	良好	にぶい黄橙色	底部未調整。
SI05	1	土師器	杯	(13.1)	9.6	9.4	口～底 1/4 および高台部完存	緻密。赤色粒子を含む。	軟質	橙色	
SI05	2	須恵器	皿	10.9	5.6	3.7	完存	緻密。黒色粒子を含む。	良好	灰白色	
SI05	3	灰釉陶器	碗	(14.4)	6.7	4.7	口縁部の 1/4 及び体～底部の 1/2	緻密。	良好	灰白色	見込部は無釉薬。釉はオリーブ灰色。
SI05	4	土師器	皿	9.9	6.1	3.7	口縁部の一部を欠く	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	黒褐色	
SI05	5	土師器	皿	(7.6)	(3.3)	2.8	1/4	緻密。微細な砂粒、赤色粒子を含む。	軟質	にぶい黄橙色	底部回転糸切り未調整。
SI05	6	灰釉陶器	碗	10.9	5.6	3.7	底～高台部の 1/2	やや粗。白色粒子を含む。	良好	灰白色	見込部に磨痕。
SI05	7	土師器	皿	-	(4.8)	(1.7)	底部の 1/3	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	黒褐色	
SI05	8	土師器	杯	-	5.2	(2.8)	底部完存	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	黒褐色	
SI05	9	灰釉陶器	碗	(17.4)	-	(4.1)	口～体部破片	緻密。	良好	灰白色	釉はオリーブ灰色。
SI05	10	須恵器	碗	(16.0)	-	(4.0)	口～体部破片	緻密。微細な気泡を含む。	良好	灰白色	
SI05	11	土師器	羽釜	(30.8)	-	(7.9)	口縁部破片	粗。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	黒褐色	内外面ともナデ整形。
SI05	12	土師器	羽釜	-	(13.5)	(10.4)	底～体下半の 1/3	粗。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	橙色	内外面ともナデ整形。底部未調整。
SI06	1	土師器	甕	(13.7)	-	(8.3)	口～体上半 1/4	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SI06	2	土師器	甕	(10.3)	-	(3.9)	口～体部上半の 1/4	緻密。微細な砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	橙色	
SI06	3	土師器	甕	-	-	(1.7)	底部破片	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	褐色	内面は黒褐色で炭化物が付着する。底面は一定方向にハケ状工具による調整。
SI06	4	土師器	壺	-	-	(4.8)	頸部破片	やや粗。微細な砂粒、赤色粒子を多く含む。	やや軟	橙色	頸部に刺突がめぐる。
SI08	1	土師器	壺	11.4	3.3	18.6	4/5	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	頸～口縁部タテミガキ。
SI08	2	土師器	甕	(15.0)	-	(7.4)	口～体部上半の 1/2	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	橙色	
SI08	3	土師器	甕	-	9.2	(7.0)	脚部の 3/4	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SI08	4	土師器	甕	-	-	(8.6)	体部下半がほぼ完存	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい赤褐色	
SI08	5	土師器	甕	-	8.0	(9.8)	脚部の 3/4	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SI08	6	土師器	高杯	(13.0)	8.7	11.0	全体の 1/2	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	
SI08	7	土師器	高杯	(11.7)	(8.8)	10.8	全体の 1/2	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	
SI08	8	土師器	高杯	11.9	9.0	7.8	脚部の 1/4 を欠く	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	
SI08	9	土師器	器台	9.2	9.5	11.8	脚部の 1/2 を欠く	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	
SI09	1	土師器	皿	(10.0)	-	(2.1)	口～体部の 1/2	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	黒褐色	
SI09	2	土師器	碗	(14.8)	-	(2.9)	口縁部破片	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	黒褐色	

第５表　遺物観察表（２）

遺構名	番号	種別	器種別	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	整形その他
SI09	3	土師器	皿	(16.0)	-	(3.5)	口～底部の 1/4	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	黒褐色	底部ナデ調整後付高台。
SI09	4	土師器	碗？	-	(8.2)	(4.8)	底～高台部破片	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。			底部ナデ調整後付高台。
SI09	5	土師器	甕	-	-	(3.0)	底部破片	やや粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	橙色	内外面底部ともナデ調整。
SI09	6	土師器	甕	-	-	(1.9)	底部破片	やや粗。微細な砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	橙色	
SI10	1	土師器	器台	8.4	-	(2.2)	杯部がほぼ完存	緻密。砂粒を多く含む。赤色粒子を含む。	良好	橙色	
SI10	2	土師器	甕	-	(9.0)	(6.7)	底～脚部の 1/2	緻密。赤色粒子、微細な砂粒を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	
SE01	1	土師器	杯	-	5.8	(2.5)	底部完存	緻密。微細な砂粒をわずかに含む。	軟質	橙色	付高台。見込み、裏底に亀裂があり一部貫通している。
SD02	1	土師器	甕	(17.4)	-	(2.2)	口縁部破片	緻密。赤色粒子、微細な砂粒を含む。	良好	橙色	口縁部外面にカーボン付着。
SD03	1	土師器	甕	(13.0)	-	(4.1)	口縁部破片	粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	軟質	橙色	器壁の磨耗激しく調整等の確認が困難。
SD03	2	土師器	甕	-	(10.6)	(6.9)	底～脚部の 1/2	粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	軟質	橙色	器壁の磨耗激しく調整等の確認が困難。
SD04	1	土師器	甕	-	(8.3)	(6.6)	脚部の 1/4	緻密。赤色粒子、微細な砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SD04	2	土師器	甕	-	-	(7.1)	口～体上半破片	緻密。赤色粒子、微細な砂粒を多く含む。	良好	橙色	器壁の磨耗激しく調整等の確認が困難。
SK01	1	土師器	杯	14.0	5.0	4.8	完存	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	体外面に墨書（判読不能）。底部全面ヘラケズリ。
SK01	2	土師器	杯	12.4	3.3	4.8	完存	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	整形後上から押し潰たように器高を下げている。底部全面ヘラケズリ。
SK02	1	土師器	杯	-	(1.8)	(2.3)	底部の 1/2	緻密。微細な砂粒をわずかに含む。	やや軟	黄橙色	底部糸切り未調整だが磨耗激しく確認困難。
SK02	2	土師器	杯	-	4.1	(1.5)	底部完存	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	
SK03	1	土師器	杯	-	4.3	(1.9)	底部完存	緻密。赤色粒子を含む。	軟質	橙色	底部回転糸切り未調整。
SK04	1	鉄製品	不明	長 (4.7)	幅 (1.5)	厚 (0.6)	不明	-	-	-	
SK04	2	鉄製品	鏃	長 (12.4)	幅 (1.3)	厚 (0.5)	不明	-	-	-	
SK04	3	鉄製品	鏃	長 (9.6)	幅 (1.1)	厚 (0.6)	不明	-	-	-	
SK04	4	土師器	壺	-	(8.3)	(6.2)	底部破片	やや粗。砂粒を多く含む。	やや軟	にぶい黄褐色	底部木葉痕。
SK08	1	土師器	皿	(9.6)	5.0	2.5	口～体部の 2/3 を欠く	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	黒褐色	
SK08	2	土師器	杯	-	(6.6)	(3.5)	体～底部破片	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	にぶい赤褐色	底部回転糸切り未調整
SK08	3	土師器	羽釜	-	-	(5.1)	口縁部破片	緻密。砂粒を多く含む。	良好	黒褐色	内外面ともナデ調整。
SK08	4	鉄滓		長 8.2	幅 6.2	厚 5.3	-	-	-	-	
SK08	5	灰釉陶器	碗	(19.0)	-	(8.6)	口～体部破片	緻密だが微細な気泡を含む。	良好	灰白色	釉色はほぼ透明。
SX01	1	土師器	甕	13.9	-	(6.1)	口～体部上半ほぼ完存	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	
SX01	2	土師器	甕	(13.1)	-	(3.8)	口縁部の 1/2	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	
SX01	3	土師器	高杯	12.6	-	(7.6)	脚上半のよび杯部の 1/2	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	やや軟	橙色	
SX01	4	土師器	杯	-	(5.0)	(2.0)	底部の 1/3	緻密。砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	橙色	底部回転糸切り未調整
SX01	5	土師器	甕	-	-	(3.2)	底部破片	緻密。微細な砂粒、金色雲母を多く含む。	良好	暗赤褐色	内外面底部ともナデ調整。
SX02	1	土師器	壺	(22.6)	-	(8.9)	口～肩部の 1/3	緻密。砂粒、とくにΦ5㎜大の大粒の砂粒を含む。	良好	にぶい褐色	

第6表　遺物観察表（3）

遺構名	番号	種別	器種別	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	整形その他
SX02	2	土師器	壺	(19.6)	-	(2.4)	口縁部の 1/4	緻密。赤色粒子、微細な砂粒を多く含む。	良好	にぶい橙色	内外面ともナデ調整。
SX02	3	土師器	高杯	-	-	(4.7)	杯部下半～脚部上半完存	緻密。赤色粒子を多く含む。	軟質	橙色	器壁の磨耗激しく調整等の確認が困難。
SX02	4	土師器	高杯	-	(12.6)	(8.0)	脚部の 1/3	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	
SX02	5	土師器	甕	(13.8)	-	(4.4)	口～体上半 1/2	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい赤褐色	
SX02	6	土師器	甕	(14.0)	-	(3.3)	口縁部破片	やや粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	橙色	
SX02	7	土師器	甕	-	-	(4.0)	口縁部破片	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	
SX02	8	土師器	壺	-	(6.8)	(2.5)	底部の 2/3	緻密。砂粒を含む。Φ5㎜大の大粒の砂粒を含む。	良好	にぶい黄橙色	内外面ナデ調整。底部未調整。
SX02	9	土師器	甕	(14.0)	-	(2.9)	口縁部破片	緻密。赤色粒子、微細な砂粒を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	
SX02	10	土師器	甕	-	-	(4.0)	口縁部破片	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SX02	11	土師器	壺	-	4.0	(9.4)	底～体部下半の 1/2	緻密。赤色粒子、微細な砂粒を多く含む。	やや軟	橙色	内外面ナデ調整。底部未調整。
SX02	12	土師器	甕	-	-	(4.2)	脚接合部のみ完存	緻密。砂粒を多く含む。	良好	にぶい赤褐色	
SX02	13	土師器	甕	-	-	(5.1)	接合部完存	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	橙色	
SX02	14	土師器	壺	-	(8.4)	(4.3)	底部の 1/4	やや粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	軟質	にぶい黄橙色	器壁の磨耗激しく、調整等の確認が困難。
SX02	15	土師器	蓋	ツマミ径 4.8	-	(3.0)	ツマミ部完存	粗。砂粒を多く含む。	良好	橙色	ツマミ部縁周に指頭痕。内面ヘラナデ調整。
SX02	16	土師器	甕	-	(10.3)	(6.5)	脚部の 1/3	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	
SX02	17	土師器	甕	-	(8.9)	(6.4)	脚部 1/2	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	
SX02	18	石製品	石皿	長 20.2	幅 17.4	厚 5.0	完存	-	-	-	両端部及び背面中央部敲打痕。上面に磨痕。
PC01	1	土師器	壺	19.1	-	(4.0)	口縁部ほぼ完存	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	にぶい橙色	
PC01	2	土師器	壺	(13.4)	-	(4.3)	口縁部の 3/4	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	口縁部内外面をタテミガキ。
PC01	3	土師器	壺	(16.4)	-	(13.3)	口～体部の 1/3	やや粗。赤色粒子を含む。砂粒を多く含む。	良好	橙色	
PC01	4	土師器	壺	-	(4.2)	(11.5)	体部下半の 1/3	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	黄橙色	内面に輪積痕を顕著に残す。外面はナデ後ミガキ整形。
PC01	5	土師器	甕	(17.4)	-	(6.3)	口～体上半 1/2	やや粗。赤色粒子を含む。砂粒を多く含む。	やや軟	橙色	
PC01	6	土師器	甕	-	67	(5.0)	脚部完存	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	明黄褐色	
PC01	7	土師器	高杯	-	(13.6)	(10.0)	底～脚部の 1/2	粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	橙色	
PC01	8	土師器	甕	21.1	-	(17.9)	口～体上半完存	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	黒褐色	
PC01	9	土師器	高杯	-	15.5	(10.9)	底部～脚部完存	やや粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	橙色	
遺構外その他	1	土師器	壺	(19.0)	-	(6.3)	口縁部の 1/4	粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	やや軟	橙色	
遺構外その他	2	土師器	壺	(20.8)	-	(7.5)	口縁部の 1/4	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	口縁部タテハケ後ミガキ整形。
遺構外その他	3	土師器	壺	13.7	-	(16.4)	口～体上半の 1/3	やや粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	調査区 G-10 ポイント付近包含層から出土。
遺構外その他	4	土師器	器台	(9.7)	(8.0)	7.6	全体の 1/3	やや粗。砂粒、赤色粒子を多く含む。	良好	赤褐色	ハケ後ミガキ整形か。脚部内面を除き赤彩。
遺構外その他	5	土師器	壺	-	-	(2.0)	体部破片	緻密。砂粒、赤色粒子を含む。	良好	橙色	SX02 ないし SI10 覆土からの出土。赤彩。内面ナデ調整。
遺構外その他	6	土師器	甕	(18.6)	-	(5.1)	口縁部破片	やや粗。砂粒を多く含む。	良好	にぶい黄橙色	SX02 ないし SI10 覆土からの出土。

第７表　遺物観察表（４）

第4章　総　括

今回の調査では、古墳時代前期、平安時代前半（10世紀前半）、平安時代後半（11世代）の遺構、遺物を検出した。

古墳時代前期の所産とした遺構は、SI01、SI02、SI03、SI04、SI06、SI07、SI08、SI10、SX02、PC01。

平安時代前半（10世紀前半）とした遺構は、SK01。

平安時代後半（11世紀代）とした遺構は、SI05、SI09、SE01、SD01、SK02、SK03、SK08、SK09～12、SX01。

出土遺物や遺構の切り合い関係から遺構の所産時期を必ずしも明確にできなかった遺構は、SB01、SB02、SD02、SD03、SD04、SK04、SK05 SK06、SK07である。

◆

古墳時代前期の人間の営為の痕跡については、本遺跡をはじめ周辺の村前東A遺跡、角力場第2遺跡、前原G遺跡、寺部村附第6遺跡などで数多く発見されており、御勅使川扇状地扇端部に該期の遺構・遺物が広汎に分布することが改めて明らかとなった。御勅使川扇状地扇端部＝富士川上流部におけるこのような古墳時代前期の広汎な遺構の広がりとその変遷の捉え方は、本県における古墳時代の始まり、甲斐国の成立過程を考える上でも重要な視点となりつつあるといえる。

◆

平安時代前半の所産となるのは、10世紀前半に比定される土坑、SK01の1基みである。調査区内では本址を除き遺構はもちろん、包含層や他遺構の覆土を通じても該期の遺物は検出されず、本址が該期の集落から隔絶した位置に占地することが看取される。南北に軸を取る隅丸長方形を呈した形状やその遺構配置から、用途として墓坑などの蓋然性を指摘できる遺構である。

◆

平安時代後半（11世紀代）については、通常の竪穴住居址（SI05）のほか、井戸址、土坑、その他竪穴状遺構など多様な遺構が検出された。

SI09は、プランが東西に長い不整な小判形を呈することから、住居址とすることに躊躇したが、平坦な床面をもち、構築土（材）こそ検出されなかったものの遺構北東隅に火床面を有することから、これを竈と捉え、住居址に分類した。

検出された井戸址と思しき遺構（SE01）については、近接した寺部村附第6遺跡第Ⅱ地点においても見つかっている。調査区周辺は、相対的に水に乏しい扇状地扇央にありながら、反面扇端も近くなってきていることから、地下水位もある程度高くなってきている。そのため、井戸は比較的容易に構築することができたものと推察される。一方で扇端の湧水線まではまだ若干の距離があるため、井戸の存在はここに暮らす人々の利便性を大きく高める施設として、周辺での集落の安定的存在を示唆する遺構とすることができる。

また、調査区の北西隅付近から、不明遺構SX01が検出されている。周辺の調査では、相対的に不整なプラン、周壁の緩やかな立ち上がり、底面が平坦な床面状を呈しない等をメールクマールとして所謂「竪穴状遺構」として、しばしば報告される遺構であり、該期のものとしては本遺跡と寺部村附第11遺跡でそれぞれ1基、寺部村附第6遺跡では該期と示唆されたものも含め4基が見つかっている。

この他に、古墳時代前期とされたものとして、寺部村附第6遺跡で2基、前原G遺跡で2基、角力場第2遺跡で1基が検出されている。ただし角力場第2遺跡では出土遺物から遺構の時期を古墳時代前期としたものの、覆土の主体は明らかにこの地域の平安時代の遺構に特徴的な黒色乃至黒褐色の砂礫質土であり、今回検出されたSX01も覆土からの遺物の出土量では古墳時代のそれが平安時代のそれを凌駕する状況等に鑑み、この種の遺構についてはその構築時期についても、もう一度精査する必要があるのではないか。

なお、このプランの不整さをはじめとする形態的特徴については、遺構そのものが当初から不整に構築された可能性とともに、扇状地上にある遺構周辺の地山がほとんどの場合、脆い砂礫層であることに

起因する可能性もあるが、いずれにしても今後とも注視し、その用途性格を見極めていきたい。

◆

出土遺物や遺構の切り合い関係からその所産時期を必ずしも明確にできなかった遺構のうちSB02、SK06からは遺物の出土がみられなかった。これに対しSB01、SD02、SD03、SD04、SK04、SK05、SK07からは覆土中から古墳時代前期の所産となる遺物片若干が出土していが、本遺跡においては平安時代後半の遺構を切るSD01覆土から古墳時代前期の遺物しか出ていないことや、SE01や前記したSX01などで遺構の時期である平安時代後半よりも、これに先立つ古墳時代前期の遺物が遺構（覆土）内の遺物出土量の主体をなす状況に鑑みれば、本遺跡において覆土中からの少数・小片の遺物によってその所産時期を判断することは、より慎重にならざるを得ない。本遺跡における基本土層中、遺物包含層であるⅢ層についても、古墳時代前期の遺物が広汎且つ相対的に高密度に分布しており、このことは御勅使川扇状地末端の本遺跡周辺の該期の特徴的な様相としてよい。今回遺構として報告した土器集中部PC01もこのような考え方の範疇で理解しうるものかもしれない。

◆

また、今回の調査において特徴的なのは、各時代を通じた傾向として捉えられる扇状地上という地質的特長に規制された遺構配置である。

本遺跡の立地するのは、御勅使川扇状地上であるため、地山はすべて御勅使川の営為によって運搬された二次堆積層に占められる。調査区遺構確認面においては、黄褐色ローム質土の部分と砂礫層の部分が、雲状またはモザイク状に合い半ばするが、検出された各時代とも遺構の構築にあたっては、砂礫層の部分を避け、ローム質土層部分を明確に選択して利用していることが見受けられ興味深い。集落の形態や集落内の建物の配置に扇状地という地質的特長が影響を与えていることがよくわかる。

参考引用文献

松浦宥一郎ほか 1983『物見塚』櫛形町教育委員会ほか

若草町 1990『若草町誌』

山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ編 1992『甲斐型土器―その編年と年代―』山梨県考古学協会

櫛原功一・平野修 1992『宮ノ前遺跡』韮崎市教育委員会ほか

保坂和博 1997『大師東丹保遺跡Ⅳ区』山梨県教育委員会

田中大輔 1998『角力場第２遺跡』南アルプス市教育委員会

三田村美彦ほか 1999『村前東Ａ遺跡』山梨県教育委員会

山下孝司・瀬田正明 1999「５奈良・平安時代の編年」『山梨県史』資料編２　原始・古代２　山梨県

山下大輔ほか 2000『前原Ｇ遺跡』櫛形町教育委員会

宮澤公雄ほか 2004『寺部村附第６遺跡』南アルプス市教育委員会

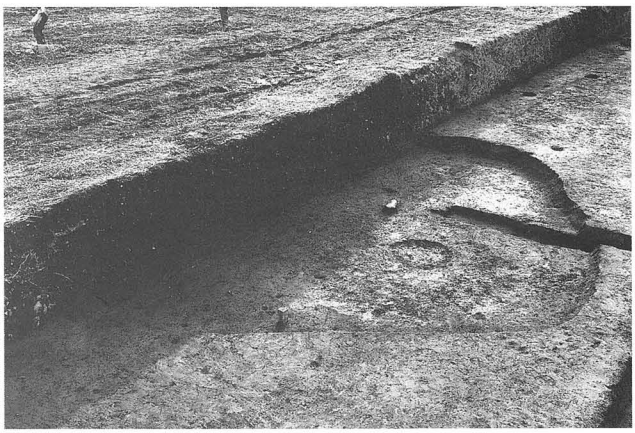
田中大輔 2005『寺部村附第６遺跡（第Ⅱ地点）』南アルプス市教育委員会

田中大輔 2005『寺部村附第６遺跡（第Ⅲ地点）』南アルプス市教育委員会

田中大輔 2005『寺部村附第 11 遺跡』南アルプス市教育委員会

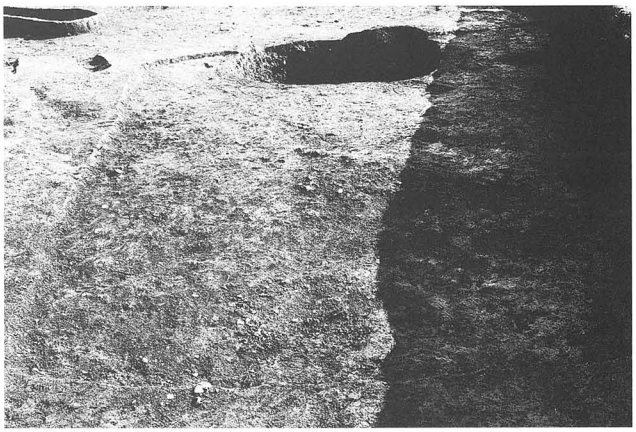
調査区全景 (西より)

SI01(南より)



SI02(北東より)

SI03(南より)



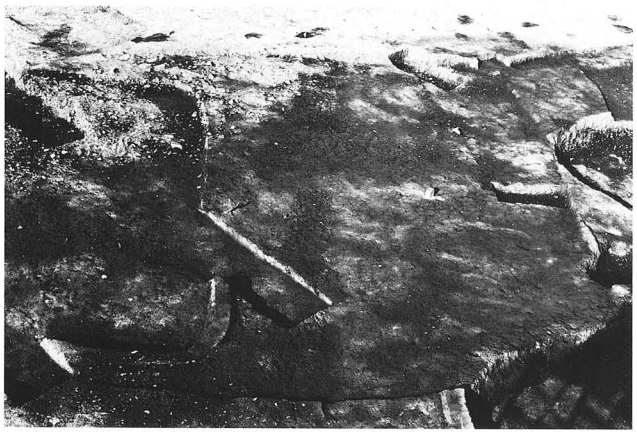
SI04(西より)

図版 2

SI05(西より)

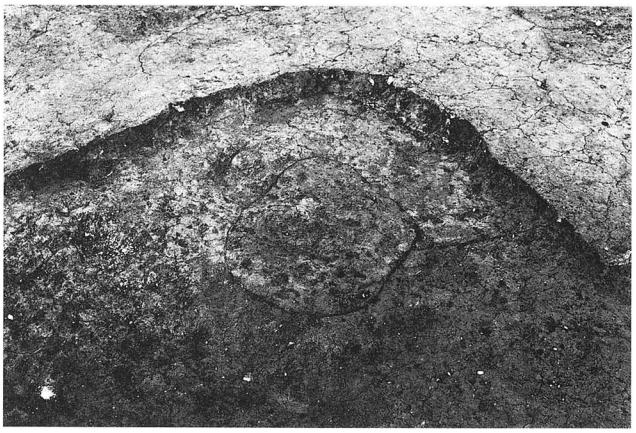
SI05 竈 (南西より)

SI06(南西より)



SI07(南西より)

SI08(南西より)

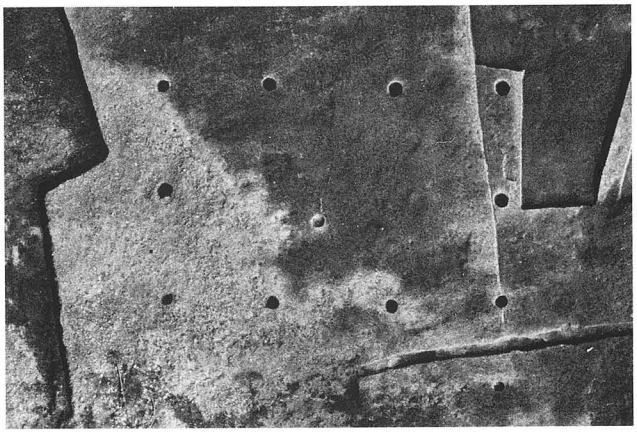


SI09 竈 (南西より)

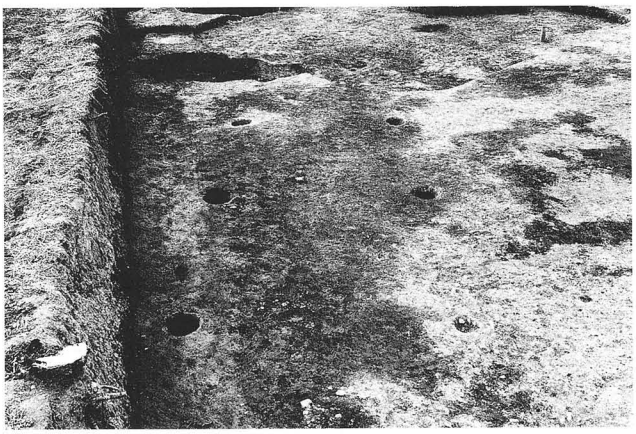
SI09(西より)

SI10(西より)

SB01(東より)

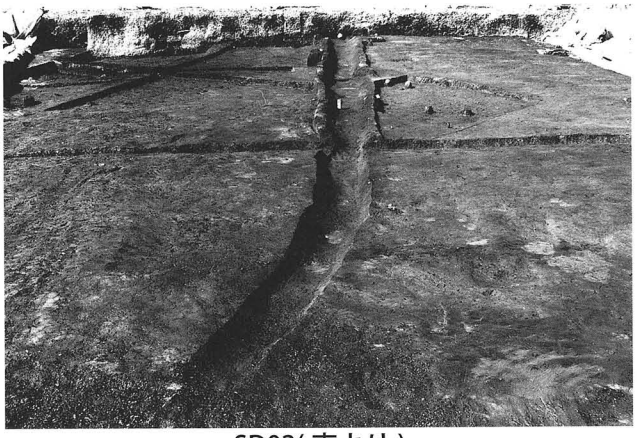


SB01(上方が北)

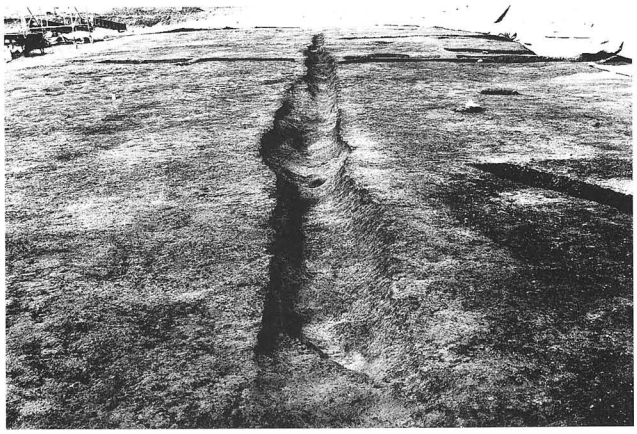


SB02(東より)

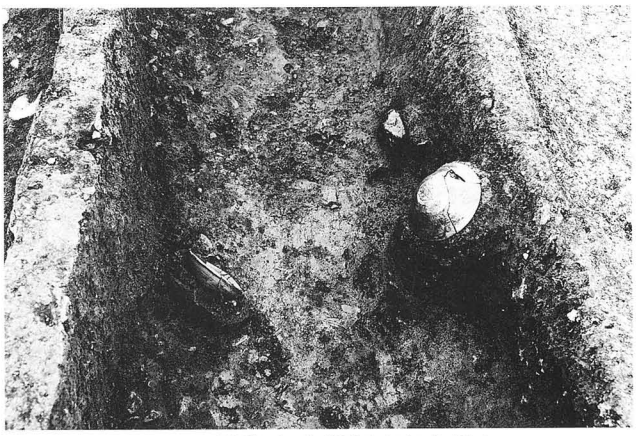
SE01(南より)



SD02(南より)



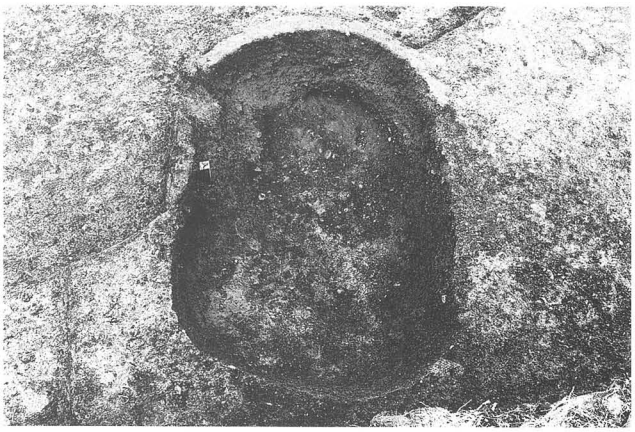
SD04(東より)



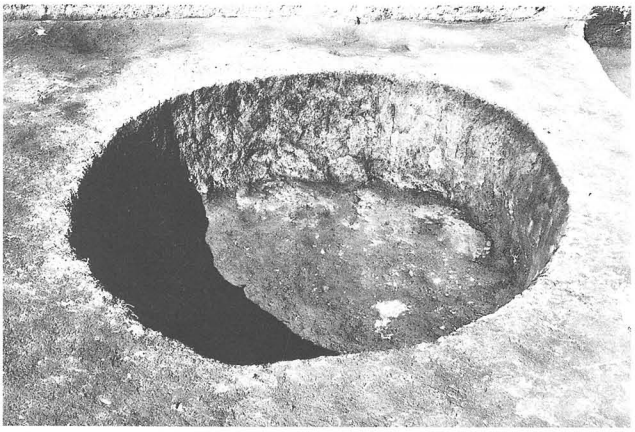
SK01 遺物出土状況 (南より)

図版４

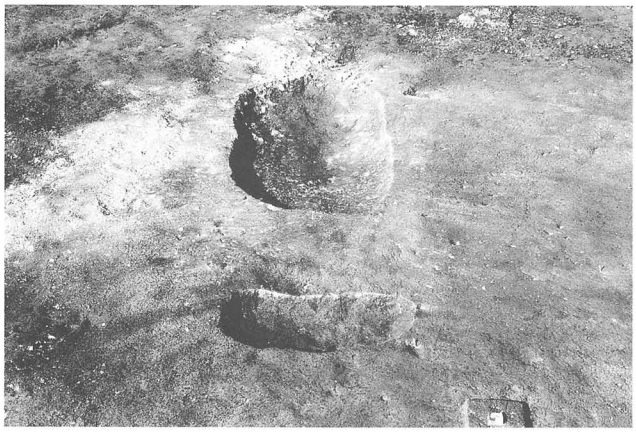
SK01(南より)



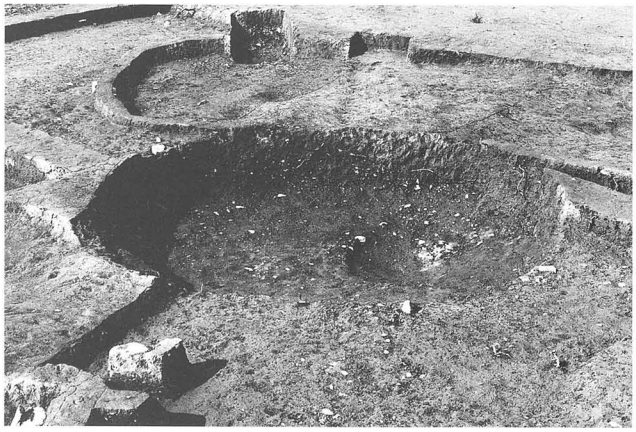
SK02(南より)



SK03(南より)

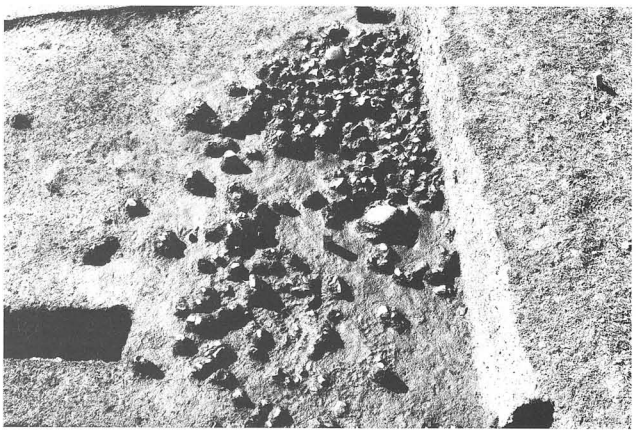


SK04~05(南より)

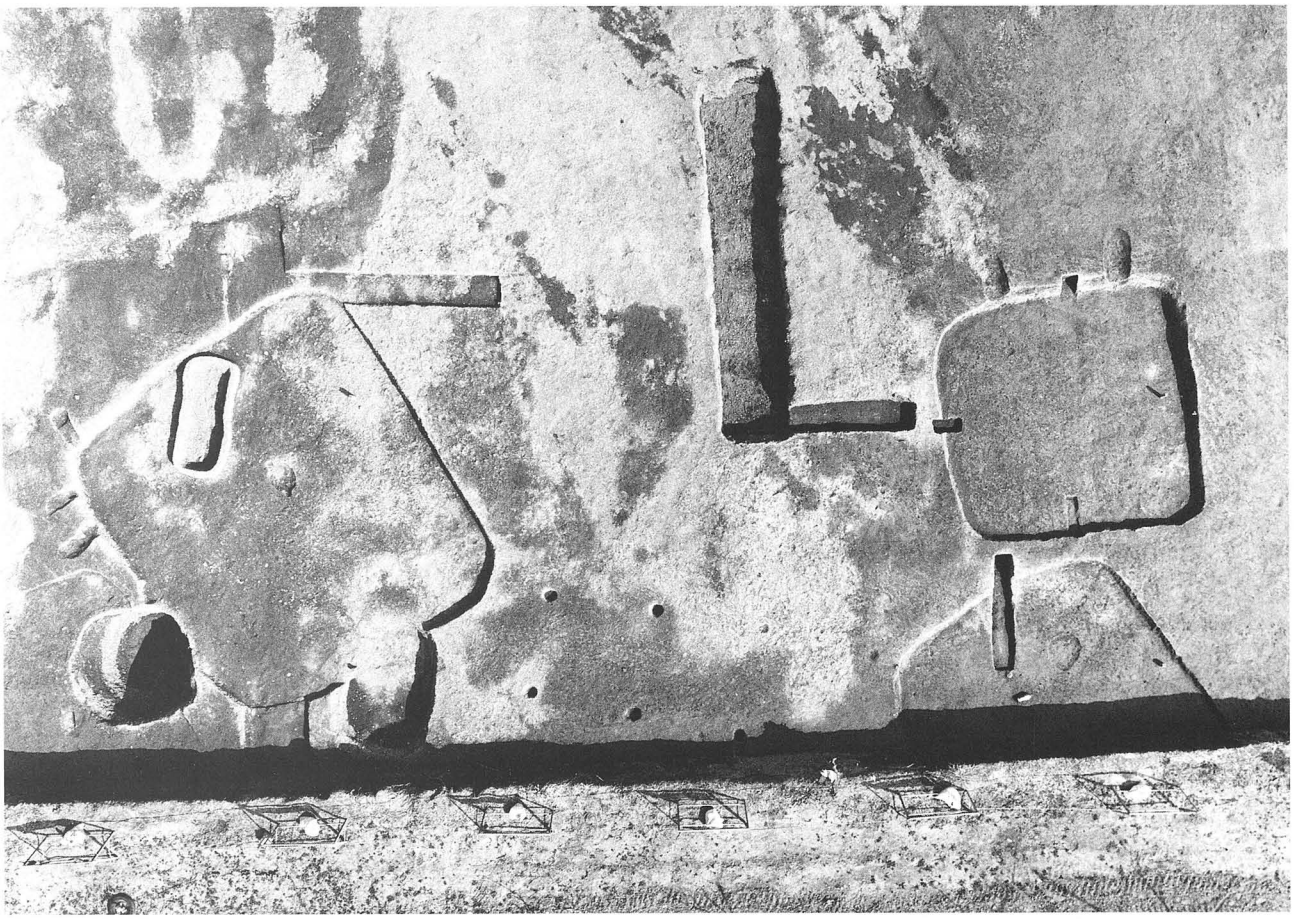


SK08(南東より)

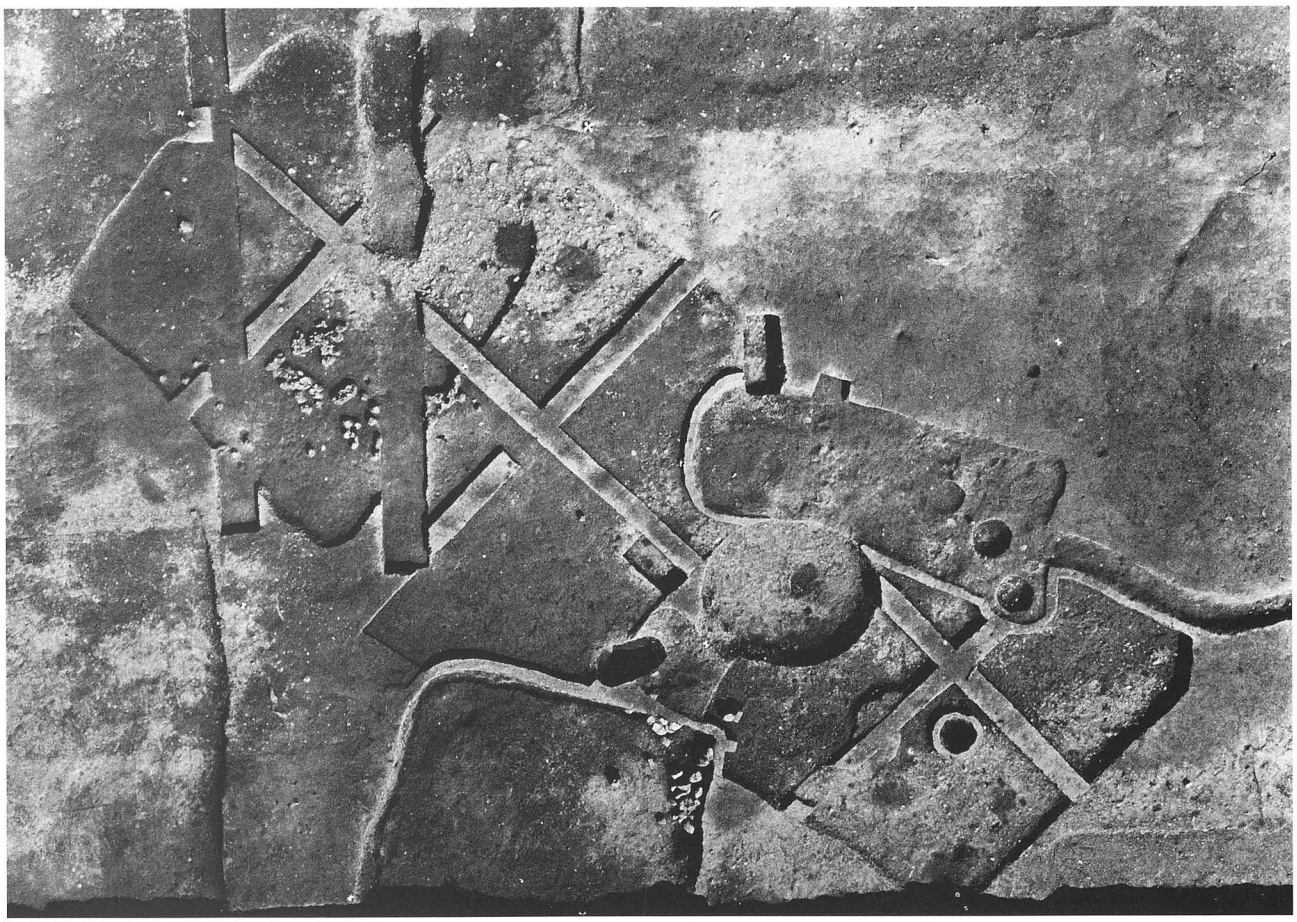
SX01(南より)



SX02 遺物出土状況 (東より)



SI01~04・SK01~02・SB02・SE01(上方が北)



SI05~09・SK07~12(上方が北)

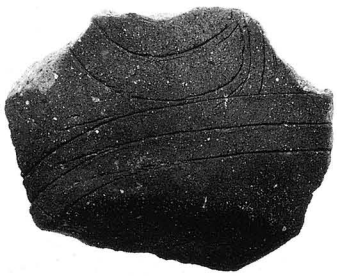
図版6

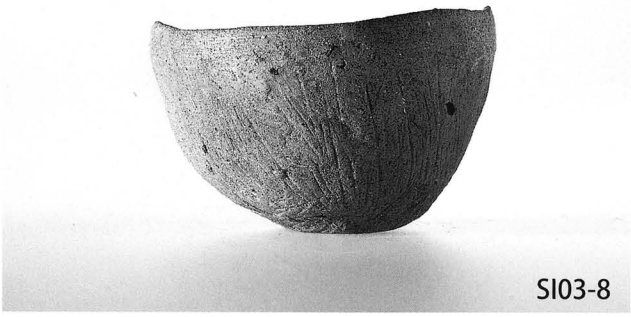
SI02-3

SI03-3

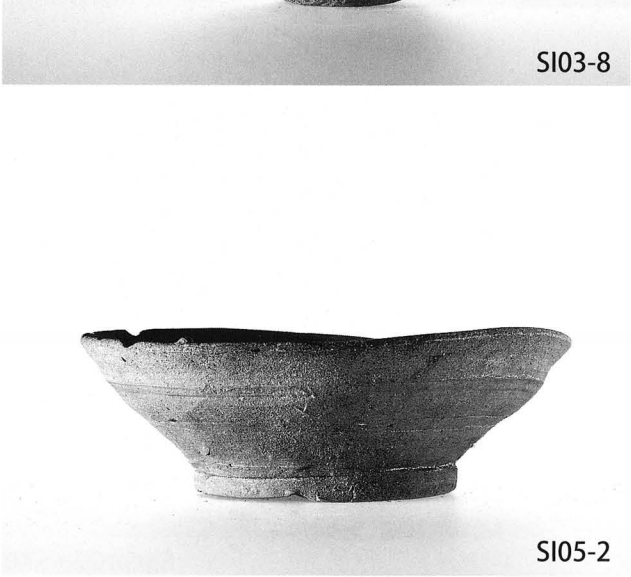
SI03-4

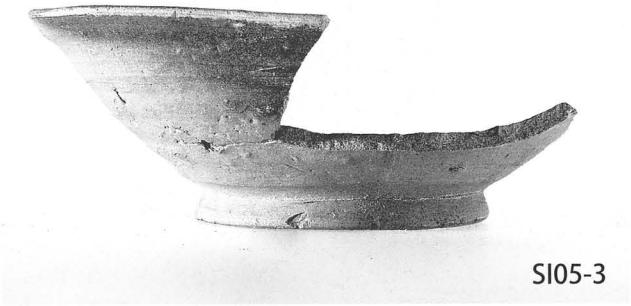
SI03-5


SI03-6


SI03-8

SI05-1


SI05-2


SI05-3

SI05-4

SI05-8

SI05-12

SI08-1

SI08-3

SI08-5

図版８

SI08-7

SI08-8

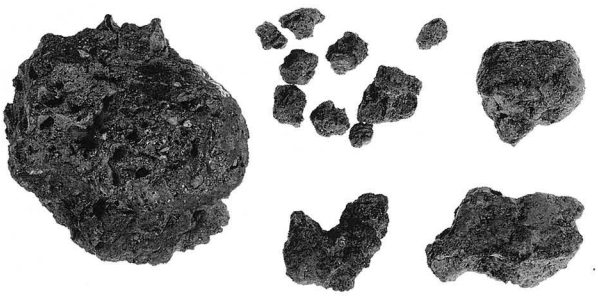
SI08-9

遺構外 -4

SK01-1

SK01-2

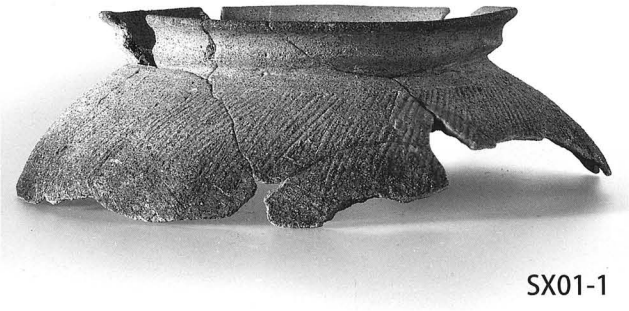
SK08-1


SK08-4 ほか

SK04-1

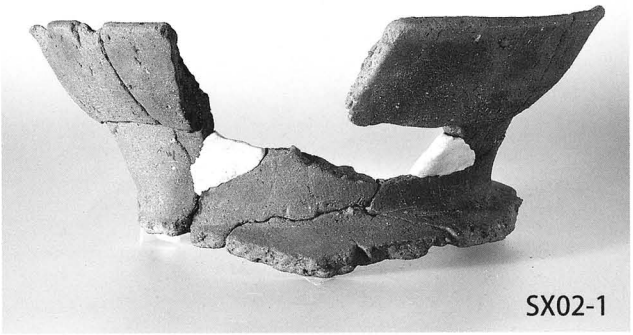
SK04-2

SK04-3

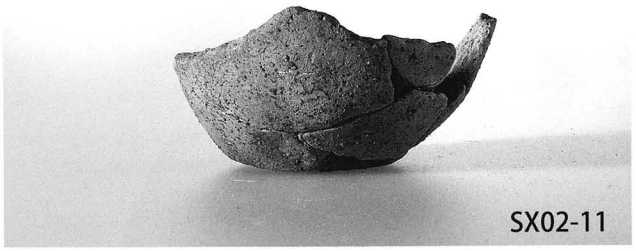


SX01-1

SX01-3



SX02-1



SX02-11

SX02-18

PC01-1

図版 10

PC01-2

PC01-6

PC01-7

PC01-9

PC01-8

報　告　書　抄　録

ふりがな	てらべむらつきだい 12 いせき
書名	寺部村附第 12 遺跡
副書名	新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第９集
編著者	田中大輔
編集機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒 400 － 0492　山梨県南アルプス市鮎沢 1212　TEL055 － 282 － 7777
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 30 日

ふりがな		てらべむらつきだい 12 いせき
所収遺跡		寺部村附第 12 遺跡
ふりがな		やまなしけんみなみあるぷすしてらべ 2456 ばんちほか
所在地		山梨県南アルプス市寺部 2456 番地ほか
コード	市町村	19208
	遺跡	WK-34（南アルプス市遺跡番号）／ 41034（旧若草町遺跡番号）
1/25000 地図名		小笠原
位置	北緯	北緯　35° 36′ 50.78552″（Japanese Geodetic Datum2000）
	東経	東経　138° 29′ 15.21630″（Japanese Geodetic Datum2000）
標高		274 m
調査期間		20001025 ～ 20010323
調査面積		2908㎡
調査原因		道路建設
種別		集落址
主な時代		古墳時代前期、平安時代
主な遺構		竪穴住居址 10 軒、掘立柱建物址２軒、竪穴状遺構２基　その他土坑等
主な遺物		土師器　須恵器　灰釉陶器　鉄製品
特記事項		御勅使川扇状地扇端部に占地した古代の集落址

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第９集

寺部村附第１２遺跡

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

西暦 2005 年 3 月 30 日　発行

編集発行　南アルプス市教育委員会
〒 400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212
電話　055-282-7777

印　　刷　鬼灯書籍株式会社
〒 381-0012 長野県長野市柳原 1233-5
電話　026-244-0210